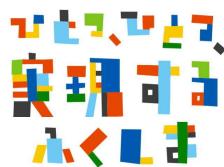

令和3年度

福島県教職員特選研究論文集



福島県教育委員会

はじめに

本研究論文の募集は、教職員の自主的な研究を奨励し、効果的な実践や先進的な取組を研究論文としてまとめることを通して研修意欲や専門性を高めるなど、教職員個々の資質の向上を図ることを目的として、昭和46年度から実施しております。平成23年度は東日本大震災及び原発事故により募集を行いませんでしたが、平成24年度から募集を再開し、本年度で50回を数えます。この長い歴史の中で、数多くの教職員がその時代を反映した様々な教育課題に真正面から向き合い、その研究成果を発表してこられました。

今年度も、新型コロナウイルス感染症の影響により、通常の教育活動に様々な制約を余儀なくされました。授業時数の確保に加え、学習指導要領改訂を踏まえた「主体的・対話的で深い学び」による授業改善、感染予防に配慮した学習活動の充実等、子どもたちの健康と安全を第一としつつ、学びを保障していくために様々な対応に追われる日々であったことと思います。そのような中においても、学校経営、学習指導、特別支援教育など、37点にも及ぶ様々な教科や領域、校種にわたる論文が寄せられました。これは、困難な状況だからこそ、あらためて教育における日々の授業の大切さ、学校の役割を考える機会が増え、ことあるごとに目の前の子どもたちを思う気持ちがもたらしたものと考えております。

さて、福島県教育委員会では、令和3年12月に第7次福島県総合教育計画を策定し、6つの施策を掲げて児童生徒の学力、教職員の指導力の向上等に取り組んでまいります。このような中、各学校や教職員の皆様が、学校や学年・学級、教科等の課題を的確に捉え、指導内容・方法の質的改善を図り、実践研究に取り組まれていることを、大変ありがとうございます。そして心強く思います。

この特選論文集に収められた論文は、厳正な審査を経て選ばれたものであり、各学校が抱える課題の解決、教育活動の更なる充実に向けて、示唆に富むものとなっております。各学校等におかれましては、研究成果を参考にし、本県の復興・再生を担う人材育成のために研究をさらに深められ、学校教育の充実・改善に役立てていただければと思います。

最後になりますが、応募されました皆様の取組に心から敬意を表しますとともに、本県教職員の研修意欲や専門性の向上が一層図られ、児童生徒一人一人の健やかな成長と学校の発展につながっていくことを心から期待いたします。

令和4年2月

福島県教育庁義務教育課長 石幡良子

目 次

はじめに

令和3年度福島県教職員研究論文入賞者一覧	2
特選研究論文	

○ 教育課程

なりたい自分になるために学び続ける児童の育成 ～将来につなぐ資質・能力を育む教育課程を通して～	3
棚倉町立棚倉小学校 代表 校長 鈴木 雅人	

○ 学習指導（E S D）

つながりの中で育む「只見愛」 ～未来へ向かって行動できる子供の育成～海につながる E S D の実践	23
只見町立朝日小学校 代表 校長 米畑 健一	

○ 学習指導（特別活動）

生命の大切さを尊重して行動できる生徒の育成 ～地域との連携を図った防災教育の実践～	43
喜多方市立第一中学校 代表 校長 板橋 和典	

○ 特別支援教育

訪問教育における学びの充実をめざして ～病院訪問学級における自立活動と各教科を関連付けた授業実践～	63
福島県立平支援学校 教諭 鈴木 のぞみ	

審査の観点及び審査総評	80
-------------	----

令和3年度福島県教職員研究論文応募状況	81
---------------------	----

令和3年度福島県教職員研究論文応募者一覧	82
----------------------	----

おわりに

令和3年度 福島県教職員研究論文 入賞者一覧

【特選】

領域等	個人 団体	学校名・グループ名	職名・氏名	研究主題
教育課程	団体	棚倉町立棚倉小学校	(代表) 校長 鈴木 雅人	なりたい自分になるために学び続ける児童の育成 ～将来につなぐ資質・能力を育む教育課程を通して～
学習指導(ESD)	団体	只見町立朝日小学校	(代表) 校長 米畑 健一	つながりの中で育む「只見愛」 ～未来へ向かって行動できる子供の育成～海につながるESDの実践
学習指導(特別活動)	団体	喜多方市立第一中学校	(代表) 校長 板橋 和典	生命の大切さを尊重して行動できる生徒の育成 ～地域との連携を図った防災教育の実践～
特別支援教育	個人	福島県立平支援学校	教諭 鈴木 のぞみ	訪問教育における学びの充実をめざして ～病院訪問学級における自立活動と各教科を関連付けた授業実践～

【入選】

領域等	個人 団体	学校名・グループ名	職名・氏名	研究主題
学習指導	団体	田村市立都路小学校	(代表) 校長 安瀬 一正	小規模校のよさを生かし、問い合わせを協働で解決する喜びに満ちた授業 (2年次) ～学びをつなぐ単元構想図～
学習指導(RST)	団体	塙町立塙小学校	(代表) 校長 藤田 篤	自分の考えをもち、ともにかかわり合い、高め合う児童の育成 ～リーディングスキル(RS)の視点を取り入れた授業の工夫～
学習指導(RST)	個人	相馬市立中村第一中学校	教諭 長谷川 とおる	リーディングスキルの向上による、学習指導要領の目標の達成をめざした学習指導の改善 ～「主体的に学習に取り組む態度」の育成のために～
学習指導(音楽)	個人	福島市立平野小学校	教諭 稲毛 光司	思考力・判断力を育む音楽科の授業改善 ～子どもの音楽観を広げる音楽活動を通して～
特別支援教育	個人	福島県立平支援学校	寄宿舎指導員 泉 大介	自立と社会参加を目指して主体的に生活する児童生徒の育成 ～寄宿舎生活における「できること」の経験を生かした指導実践を通して～
学校保健	個人	相馬市立日立木小学校	養護教諭 渡邊 舞香	主体的に健康の保持増進を図る児童の育成 ～自分手帳と自己管理実践カード等を活用した肥満指導を通して～
学習指導(地理歴史〔日本史〕)	個人	福島県立猪苗代高等学校	教諭 今川 吉晃	生徒の学びを深化させる教育実践の工夫 ～諸資料の活用に重点を置いて～
生徒指導	個人	福島県立遠野高等学校	教諭 渡部 久美子	つながる・つなげる生徒指導・支援に関する実践的研究 ～グループソーシャルスキルトレーニング(T-palクラブ)と医療・福祉機関との連携・協働を通して～

【奨励賞】

領域等	個人 団体	学校名・グループ名	職名・氏名	研究主題
学習指導	団体	本宮市立白岩小学校	(代表) 校長 鈴木 じいざる	安全・安心な社会づくりに貢献できるこころ豊かな子どもの育成(2年次) ～教科等横断的な視点による資質・能力の育成と活用を通して～
学校事務	個人	郡山市立富田東小学校	副主査 泉田 洋介	県下の大規模小学校における事務職員の組織開発 ～複数配置校における事務職員協働組織「事務部」～

研究主題及び副主題

なりたい自分になるために学び続ける児童の育成

～将来につなぐ資質・能力を育む教育課程を通して～

棚倉町立棚倉小学校（代表）校長 鈴木 雅人



I 研究の構想

1 主題設定の理由

(1) 児童の学びの姿から

総合的な学習の時間に4年生のK子は、家業のおまんじゅうやを継ぐために、「お父さんの体力、お母さんの経営能力、おばあちゃんのコミュニケーション能力を勉強する必要がある。今、私が小学校で学んでいることが全てが自分の将来につながっていると思う。だから、友だちとの関わりを大切にして、考える力と体力を伸ばすために勉強をがんばっている。」と作文に綴った。

K子の学びの姿を通して、学ぶことの意義を実感できる環境を整え、自己のよさを発揮しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓いていくための資質・能力を育てることは、私たちの役割であると再確認したのである。そして、私たちは「K子の姿を全ての児童に具現化させたい」、「剥落する知識の上塗りを繰り返すような指導ではなく、真の学力向上の基盤を作りたい」という強い思いから、キャリア教育を軸にした研究をスタートさせた。

(2) 研究の経過から

令和元年度は、棚倉町教育委員会の方針のもと、学習指導要領で述べられている特別活動を要としたキャリア教育の推進、児童の社会的・職業的自立に必要な資質・能力を育成する教育の充実等を踏まえて、将来に必要な資質・能力を育み、キャリア発達を促す教育課程の研究を積み重ねた。令和2年度福島県教職員研究論文においても過大な評価をいただ

いた。児童が目標に向かって粘り強く努力する姿や自己を肯定的に捉える姿が増えてきたという成果を生かして、令和2年度は教科等横断的な視点で組み立てた教育課程を通して、なりたい自分になるために学び続ける児童を育てるすることを目指し、本研究を積み重ねることとした。

2 研究主題及び副主題について

(1) 「なりたい自分」について

児童が今の学びと自己の将来とのつながりを見出しながら、必要感をもって主体的に学ぶためには、目標とする自分の姿を具体的に思い描くことが必要である。その目標の実現に向けて努力する過程や成功体験が、次の学びへの意欲につながるからである。そこで、「なりたい自分」を、「目標とする自分の姿」と捉えるとともに、「目標とする自分の姿」は、授業一単位時間や単元等における短期的なものから、各行事、学年、学期等における中長期的なもの、中学校における進路や将来の夢にまで至ることを全教職員で共有した。

(2) 「学び続ける」について

学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善として、学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を取り入れることを挙げている。これを本校で目指す児童の姿と重ねると、児童が主体的に学びを続けていくためには、「自分のよさや課題を把握して目標を設定する一実現のために個人でまたは協働で努力する一よさやがんばりを振り返る一新たな『なりたい自分』を設定する」のP D C Aサイクルの

確立が必要であると考える。そこで、「学び続ける」とは、「なりたい自分」として設定した「目標とする自分の姿」に近づくために努力し、過程や結果を振り返ることを通して、新たな「なりたい自分」を設定して、主体的に学びを継続させていくうとする態度と考える。「なりたい自分」の振り返りにより、次の目標へつなげることが大切である。

(3) 「将来につなぐ資質・能力」について

2011年の中央教育審議会答申では、社会的・職業的自立に向けて必要な能力を「基礎的・汎用的能力」とし、「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」の4つの能力によって構成されると示した。

4つの能力は相互に関連・依存した関係にあり、すべての者が同じ程度あるいは均一に身に付けることを求めるものではなく、目の前の児童の実態から具体的な能力を設定することが述べられている。これらを踏まえて、児童一人一人が思い描いた「なりたい自分」になるために、教師が意図的・計画的に設定した能力を「将来につなぐ資質・能力」と考え、副主題とした。また、本研究で言う「将来」とは、すぐ先、少し先、さらに先、遠い将来等、様々な時間的空間を意味する。

3 研究仮説

教科等横断的な視点で組み立てた教育課程を通して、特別活動を要としたキャリア教育の充実を図り、将来につなぐ資質・能力を育てる実践を行えば、なりたい自分になるために学び続ける児童を育成することができるであろう。

4 研究内容・方法

児童一人一人が「なりたい自分」になるために学び続けた姿「○○の学習では、△△だった児童が、□□の実践を通して・・な姿が見られた」を集積して、児童のよさを称賛するとともに、教育課程の有効性を検証し改善していく。

(1) 資質・能力と「ほめポイント」の設定

先に述べたように、児童の実態に合わせて資質・能力を設定することを踏まえ、本研究では、多面的・多角的な児童理解をもとに、各学年で「将来につなぐ資質・能力」である育てたい資質・能力を教師が設定する。私たちが設定する資質・能力は、学習指導要領で示している学力の3つの柱「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を育むことにつながる資質・能力であり、児童のキャリア発達を促すための「基礎的・汎用的能力」と重なる。育てたい資質・能力が高まっている姿を教師が見取り、または児童同士が認め合い称賛することができるようになる。

設定した資質・能力を児童の行動レベルにしたもの「ほめポイント」として、全教職員が共通でほめ、育成すべき児童の姿とする。私たちは、この「ほめポイント」こそ、数値化できない非認知能力を児童に意識化、見える化するための重要な役割をもっていると考える。ここで改めて確認したいことは、私たちが目指している『ほめポイント』をもとに『ほめる』ということは、 $3+2=5$ だという結果を求めることができた姿を「ほめる」ことを意味しているのではなく、 $3+2=5$ という結果を導き出すために、粘り強く解決している姿や友だちと話し合って互いの考えのよさに気付き、自己の考えを形成していく姿等を「ほめる」のである。つまり、児童の社会的・職業的自立に必要な「将来につなぐ資質・能力」を見通して「ほめる」のである。教師がこの意識をもって指導を積み重ねていくことが、真の学力向上の基盤になると考える。

全ての教育活動において、資質・能力が高まっている児童のよさ「ほめポイント」を見取り、ほめていくことで、自己への肯定的な見方を高め、児童一人一人の資質・能力を育っていくことを目指す。さらに、ある場面で

高まった資質・能力を他教科や他領域でも發揮している姿を見取り称賛することで、児童の資質・能力の強化につなげる。

資料1

(2) キャリア教育の視点を生かした意図的・計画的な教育活動の展開

資料2

学習指導要領総則に記されている趣旨を踏まえ、全ての教育活動を通して、児童の社会的・職業的自立に必要な資質・能力を育てるために、教科、領域等を精選し、意図的・計画的に関連指導していくこととする。関連指導とは、各教科、各領域を横断、関連して指導することであり、学びが連続するように指導を工夫することと考える。児童のよさ「ほめポイント」を、各教科、各領域で、繰り返し意識させるように指導していく。併せて、児童が「なりたい自分」になるためのP D C Aサイクルを回すために、短期スパンが有効だと考え、2学期制をさらに半分にして四半期制にすることできめ細かく指導し、評価できるようとする。

(3) キャリア教育の視点を生かした授業改善

授業は、2つの柱をもとに構想、実践する。1つ目の柱は、教科のねらいを達成するために、「授業スタンダード」をもとに整理した5つの留意点を意識することである。2つ目の柱は、授業で見られる児童のよさ「ほめポイント」を見取り、価値付けることである。日々の授業において意識して価値付けることはもちろん、授業研究における学習指導案にも「ほめポイント」を明記し、事後研究会で本時の教科のねらいを達成するまでの有効性を話し合う。教科のねらいを達成するための授業展開や指導手法等の中に潜んでいるキャリア教育としての価値を見出し、それを意識して指導することが、学習指導要領が示す「教科を通したキャリア教育」であると捉え、実践していく。

教師の授業改善に向けては、「互見授業週間」を設定し、教科担任の高い専門性をはじめ、いつでも互いの授業を見ることができ、学び

合い高め合える関係性を築いていく。

資料3

(4) 特別活動を要としたキャリア教育の実践

「特別活動を要とする」とは、学校、家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり将来の生き方を考えたりする活動を行うことである。つまり、教育活動全体の取組を自己の将来や社会づくりにつなげていくための役割を果たすことである。これを踏まえて、学級活動(3)の内容を計画に位置づけ、各教科や行事等と関連して指導するとともに、町の取組や地域連携協働事業との関連を図る。併せて、一人一人のキャリア形成に関わる重要な学びの経験を「ドリームファイル（キャリア・パスポート）」に累積する。

資料4

(5) 「自己マネジメント力」の向上の手立て

毎時間の授業、四半期ごとの目標、各行事、部活動、家庭学習等、全ての活動で、「なりたい自分」をイメージした目標設定、自力または協働での実践、振り返り、新たな目標設定のP D C Aサイクル(図1)を意識して指導する。その際、個人の「ほめポイント」を繰り返し意識させ、自己への肯定的な捉えを増やす。

資料5

P D C Aサイクルを確立するためには

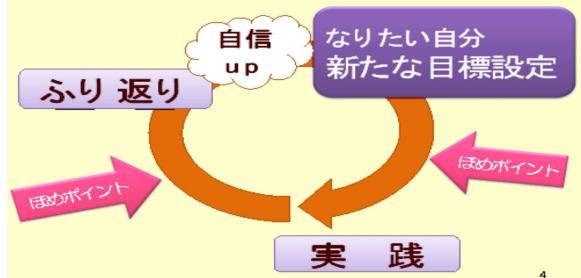


図1 自己マネジメント力向上のためのサイクル

II 研究の実際

私たちは、教職員全員で「ほめポイント」を共有して意図的・計画的に実践を積み重ねた。加えて、全ての学級で、担任及び教科担任が研究授業を行った。1年間で計16回に上る授業研究を通して、児童のよさを見取り、

資質・能力を育てる実践を積み重ねてきた。ここでは、なりたい自分になるために学び続けた児童の姿をもとに、指導の実際について紹介する。

1 各学年の実践

(1) 第1学年

学級活動、道徳科、生活科を中心に関連指導し、他の単元学習や各領域の意欲向上につなげた

第1四半期に学年で育てたい資質・能力を「規則正しい生活習慣を身に付ける」、テーマを「元気なあいさつ、返事をしよう」と設定し、重点的に育てることとした。主に、朝の健康観察において、元気な声で返事ができた姿を見取り、道徳科「あいさつで」等で「ほめポイント」を意識してがんばっている姿を称賛した。さらに、高まったあいさつへの意欲やスキル等の資質・能力を生活科「学校大好き」の学校探検にも生かして関連指導した。

<担任の見取りによる児童の変容>

本児は、初めのうちは緊張して返事やあいさつをすることができなかつた。第1四半期の本児の目標「大きな声で返事やあいさつをしよう」を「ほめポイント」として意識させ、できたときには称賛することを繰り返し行ってきたところ、声が出なかつた朝の健康観察の返事が堂々とできるようになった。その様子を保護者に伝えたり、校長先生に学校便りで紹介してもらつたりして、本児に関わる多くの人々から称賛や励ましの言葉をもらうようにした。これらの働きかけによって、本児は他教科の学習にも自信をもって取り組めるようになり、生活科の朝顔の観察カードには、様々な視点で観察したことをまとめることができた。さらに、家庭では進んで妹に本を読んで聞かせることができるようになった。

(2) 第3学年

道徳科、学級活動、家庭学習を中心に関連指導し、探究心を育て学習への意欲向上につなげた

第1四半期に学年で育てたい資質・能力を

「自分で考えて行動する」、テーマを「次のことを考えて行動する力」と設定し、重点的に育てることとした。道徳科「ぼくらは小さなかにはかせ」で、目標達成に向けて努力することのすばらしさを考えたり、学級活動で目標を達成するために計画を立てる大切さや家庭学習の大切さに気付かせたりした。「なりたい自分」になるために主体的に考えて行動している姿「ほめポイント」を意識してがんばっている姿を称賛し、意欲を高めた。

<担任の見取りによる児童の変容> **資料6**

本児は、「自主学習を計画を立ててやる」という目標を立てて意欲的に取り組んだ。自主学習の計画を立て、努力する姿「ほめポイント」を見取り称賛したところ、日に日に自主学習の質が高まつた。授業の復習を中心に取り組み、疑問に思ったことはさらに調べる等、探究心や向上心を高めていた。そのため、授業においても課題解決に向けて、主体的に学ぶ姿が見られた。

(3) 第6学年

各教科における授業展開の工夫、道徳科を中心に関連指導し、自分への自信を育てた

第2四半期に学年で育てたい資質・能力を「自分のよさを見つめ、さらに向上できるようによし」と設定し、テーマを「自分や友だちのよさ発見！」と設定し、重点的に育てることとした。主に、授業では、対話により自他の考えのよさに気付くことができるよう授業展開を工夫したり、道徳科では、個性の伸長に関する指導を関連させたりした。その中で児童のよさを見取り価値付けた。併せて、「スケジュールプランナー」に自分へのほめ言葉と友だちへのほめ言葉の欄を設け、毎日記入することで、児童のがんばりを家庭と共有した。さらに、見つけた自他のよさを書いた「ほめ言葉カード」を教室に掲示(図2)して、全体での共有を図り、自他理解を深めた。

<担任の見取りによる児童の変容>

4月当初、友だちが固定化され、多くの

友だちとの関わりがもてない様子が見られた本児が、第2四半期に「自分や友だちのほめ言葉を満開にしたい」という目標を立てた。授業や短学活において、自他のよさに気付いている姿「ほめポイント」を称賛し価値付けたところ、自分に自信がもてるようになり、多くの友だちとの関わりがもてるようになった。さらに、周りを見て主体的に行動する姿も増えた。



図2 他者評価の見える化

(4) 第2学年

国語科、道徳科、家庭との連携を中心に関連指導し、自分の考えを伝える意欲を高めた

第2四半期に学年で育てたい資質・能力を「相手に分かりやすく伝える力」、テーマを「自分の思いを伝えること」と設定し、重点的に育てることとした。国語科「つたえたいことを発表しよう」で、自分の考えを分かりやすく伝えるための学習をきっかけにして、各教科等において自分の考えを伝える場を増やし、がんばっている児童の姿を見取り称賛した。夏季休業中においても、「ありがとう」や「ごめんなさい」等、自分の気持ちを伝えている姿を家庭と連携して見取り、称賛した。さらに、以下の道徳科の授業実践を通して、自分の気持ちを自分の言葉で伝えていこうとする心情を育てた。

<道徳科「ぐみの木と小鳥」の授業実践>

授業の2つの柱をもとに、「身近にいる人の身の上や気持ちに思いを寄せ、親切にしていこうとする心情を育てる」ことをねらい、設定した資質・能力を育てるために関連的に実践した。担任が価値を深めるための話合いをコーディネートし、「ほめポイント」を見取って「○○さん、きちんとお話をできたね。」等と

細やかに言葉かけをすることで、児童は自分の思いを「早く書きたい。」と意欲的に取り組んだり、分かりやすく伝えようと発表をがんばったりしていた。互いに思いを伝え合う場を意図的に設け、「ほめポイント」を見取り称賛することで、思いやりについての価値を深めるとともに、「自分の思いを伝えること」を育てるにつながった。



資料7

図3 児童のよさ「ほめポイント」を見取り称賛する様子

(5) 第4学年

道徳科、授業の振り返り、各行事、学級活動を中心に関連指導し、新たな目標を設定した

第3四半期に学年で育てたい資質・能力を「難しいことでも失敗を恐れずに挑戦する力」、テーマを「やればできる！あきらめないでチャレンジ！」と設定し、重点的に育てることとした。ふくしま道徳教育資料集にある「たいこの音」を扱った授業では、目標達成に向けて前向きに努力していこうとする心情を養い、各教科において、○○日記を書いて学習を振り返らせて自他の努力を実感させた。持久走記録会や音楽会等の行事においては、目標達成に向けて努力している姿「ほめポイント」を廊下等に見える化して「やればできる」への意欲を高めた。さらに、以下の授業実践において、教育活動全体を通して「ほめポイント」を意識して、なりたい自分になるために努力してきたことをみんなで共有した。

<学級活動「第3四半期の力をつなげて次にがんばりたいことを決めよう」の授業実践>

2つの柱をもとに、「なりたい自分」に近づいていることを実感させ、今後の学校生活に希望や目標をもたせることをねらって実践した。授業前半に、ICTを活用してこれまでの努力を互いに認め合う場を設けたことで、設定

した資質・能力の高まりをどの児童にも実感させることができた。これにより、新たな目標設定への意欲が高まり、児童は次の「なりたい自分」をイメージして目標を設定することができた（図4）。

資料8



図4 目標設定した児童のキャリアシートにラインを引き、励ます様子

（6）第5学年

算数科、行事を中核に関連指導し、向上心を育て、教科の見方・考え方の深化につなげた

第3四半期に学年で育てたい資質・能力を「自分で調べたり聞いたりして解決する力」、テーマを「新たな道を切り拓こう！」と設定し、重点的に育てることとした。主に、授業においては、児童の疑問から課題を設定したり、自力解決や話し合いの場を確保したりする等、課題を解決する過程で、新たな方法に気付く姿「ほめポイント」を見取り称賛した。ここで、高まった資質・能力を音楽授業参観や持久走記録会等の行事で発揮できるよう声をかけた。目標達成に向けて友だちに聞いたり教えたりする姿等を見取り称賛した。さらに、以下の授業を実践し、設定した資質・能力を高めた。

〈算数科「単位量あたりの大きさ」の授業実践〉

「2つの量に着目させて、単位量当たりの大きさの考えを用いて問題を解決することをねらって、設定した資質・能力を育てるために関連的に実践した。教科担任が、考えを広げ深める話し合いや学びのつながりに気付かせる振り返り等、授業の2つの柱を大切にしたこと、本時の見方・考え方を深め、「新たな道を切り拓く」を育てることにつなげた。そこには、常に授業の2つ目の柱「ほめポイント」を意識して、児童の姿を見取り称賛する教師の関わりがあった。

（7）第3学年

道徳科、各行事、総合的な学習の時間を中核に関連指導し、やり遂げる力や他行事への意欲向上につなげた

第3四半期に学年で育てたい資質・能力を「学習や行事に進んで取り組む」、テーマを「がんばりつづける！」と設定し、重点的に育てることとした。道徳科「きょうりょくクラス」で、みんなで協力してやり遂げていこうとする心情を養い、持久走記録会や音楽発表会等に向けた練習において、目標に向かってみんなで声をかけ合いがんばり続ける姿を見取り称賛した。特に、持久走記録会では、自己タイムの伸び見える化したこと、児童一人一人の「がんばりつづける」力の向上につながった。さらに、各行事での成功体験を総合的な学習の時間「棚倉グルメかるたづくり」や「豆腐づくり」に生かして指導することで、友だちと協力してやり遂げる力を高めることができた。

〈担任の見取りによる児童の変容〉

本児は、「朝マラソンを5周以上走る。本番ではあきらめず走る。」という目標を立てた。これまで、自分から進んで運動する姿は少なかったが、よいタイムを出せるようになってからは自信がつき、意欲的に朝マラソンに取り組む姿が増えた。本番後に「練習のタイムより6秒縮めた。なわとびでも目標を達成できるようにがんばりたい。」と振り返った。保護者からも「練習も本番も目標を決めて有言実行できたね！これからも自分の目標に向かって最後まであきらめずにがんばれ！」とメッセージをもらったことで、継続して練習に励むことができている。

2 コロナ禍における教育課程の見直しと計画の立て直し

資料9

新型コロナウイルス感染症予防のため、体験を伴う活動や外部の人との接触等、教育活動に制限がかかる中、各学年では創意工夫を

生かして、生活科や総合的な学習の時間等の教育課程の見直しと計画の立て直しを行った。これまで見落としていた地域のよさを再発見し、学びを深め、資質・能力を高めることにつながった。この計画を次年度以降も積極的に取り入れていくことを話し合った。

第6学年の総合的な学習の時間「大切なものをみつけよう～先人の生き方に学ぶ～」では、今年度の探究活動として、「夢プロジェクト」と「桜清水の活性化プロジェクト」を設定した。地域連携協働本部と連携して活動を充実させたことで、児童に郷土愛を育てるとともに、学びの意義やあきらめずに挑戦し続けることの大切さ、人の役に立つことの喜び等に気付かせることができた。

＜担任の見取りによる児童の変容＞

年間を通して21の業種に触れた「夢プロジェクト」の学習により、児童は「夢を叶えるために、何度もじけそうになってしまってあきらめずに勉強したい。」「その日のために今からがんばって勉強する。」「どんな勉強でもめっちゃ必要だと思った。」「自分の夢と関係ないと思っても、何でも挑戦することが大切だと思った。」「自分も人のためになる仕事に就いて人のためになりたい。」「日々の努力があればいつかは報われる。」等と振り返った。

地域の人々の仕事に対する思いや生き方、町の宝である桜清水を守り続けてきた人々の思いに触れ、自己理解を深め、自己実現への意欲を高めた6年生は、卒業式で一人一人が自分の夢と感謝の気持ちを真剣に発表した。人の役に立つ大人になりたいと思う6年生の姿に、全教職員が胸を打たれた。

3 資質・能力の高まりを保護者と共有

第4四半期には、児童の成長を学年末の通知表で知らせて保護者と共有し、家庭でも称賛してもらうことで、児童の資質・能力を強化することにつなげた。保護者に知らせた児童の成長の姿を紹介する。

(1) 第1学年

第4四半期に育てたい資質・能力は「みんなのために進んでできることをしよう！」である。道徳科「わたしにできること」において、みんなのために働くことのよさや大切さについて考え、努力してきた姿を生活科「もうすぐ2年生」や学級活動「第4四半期の振り返り」で称賛し、進級への意欲を高めた。

＜保護者に知らせた児童の成長の姿＞

なわとび記録会で「前跳びを3分間跳べるようになりたい」という目標をもち、朝や休み時間に友だちと練習を重ねたことで、本番では3分間跳び続けることができました。このことが自信につながり、算数科の「たしざんとひきざん」の学習では、今まで学習した図を活用して解くというアイディアを出すことができました。道徳科の「すてきなことば『あふたあゆう』」の学習では、学校探検で2年生が優しくしてくれた経験を思い出すことで、「友だちに優しくしてあげたい」という気持ちを高めました。幼稚園生との交流では、幼稚園生に渡すためのプレゼントを一生懸命作ることができました。

(2) 第5学年

第4四半期に育てたい資質・能力は「今ある力を誰かのために、次の自分のために」である。学級活動「第4四半期の振り返り」では、計画的に学習できたこと、友だちの学びを深める発言ができたこと、6年生の姿から自分を見つめ高めるように努力したこと等、がんばった姿を全体で共有し、最高学年への意欲を高めた。

＜保護者に知らせた児童の成長の姿＞

任せにせず先のことを考えて行動するという目標をもち、計画を立てて実行したり準備を確実にしたりしながら生活することができました。国語の読み取りの学習では、手順や方法を考えて疑問を解決することができ、自分の意見や感想を堂々と述べて理解を深めることができました。そうし

た経験を積み重ねることで自信を深め、社会科や算数科の学習でも考えを発表することができました。道徳科の「ふるさと」では、朝ボランティアをなぜやるのかを真剣に考え、伝統を引き継ぐことの大切さと誰かの役に立つことの喜びに気付き、6年生からのバトンをしっかりと引き継ごうと考えてボランティアや委員会活動に取り組むことができました。

III 研究のまとめ

1 児童の変容

(1) 町キャリア意識調査の結果から

この調査は、町が年に2回、町内5校の4年生以上全児童を対象に紙面にて実施している。例年、他の小学校児童に比べ、本校児童の肯定的な評価の割合が低い傾向が見られている。平成30年度11月の調査と令和2年度11月の調査を比較(図5)してみると、町全体との差が、-3~-8%から0~+1%となり、差を縮めた。肯定的に評価している児童が増えたことが分かる。

H30	11月本校	11月町全体	増減
人間関係形成・社会形成能力	84%	88%	-4%
自己理解・自己管理能力	83%	86%	-3%
課題対応能力	75%	83%	-8%
キャリアプランニング能力	83%	88%	-4%

R2	11月本校	11月町全体	増減
人間関係形成・社会形成能力	93%	93%	0%
自己理解・自己管理能力	91%	91%	0%
課題対応能力	86%	87%	0%
キャリアプランニング能力	93%	92%	1%

図5 H30とR2の調査比較(児童N212)

特に、変容が見られた項目と結果は以下のとおりであった。

項目5 自分にはよいところがある。

項目13 将来の夢や希望をもっている。

「自己理解・自己管理能力」について聞いた項目5では、肯定的に回答した児童が71%から87%に変化した。肯定的な回答のうち、「そう思う」と回答した児童が26%から

54%に増加した。これは、四半期ごとに教師が育てたい資質・能力を設定するとともに、資質・能力が高まった姿を「ほめポイント」として見取り称賛したこと、その資質・能力が価値付けられて、自己を肯定的に受容できるようになったためと推察される。

「キャリアプランニング能力」について聞いた項目13では、肯定的に回答した児童が78%から96%に変化した。肯定的な回答のうち、「そう思う」と回答した児童が62%から71%に増加した。これは、教科等横断的な視点で組み立てた教育課程をもとに、コロナ禍の状況に応じて見直しを図りながら、各教科と将来とのつながりを意識させたり、地域の人的、物的な体制を整備して活用したりしたことで、学ぶことや働くことの意義に気付き、社会人・職業人としての憧れを高めたためと推察される。

資料10

(2) Q-Uの結果から

12月に全児童を対象に実施し、学級生活における満足度を調査した。結果は、図6の通りであった。

項目	人数	割合
満足群	301	73.6%
非承認群	37	8.6%
侵害行為認知群	34	8.6%
不満足群	35	8.8%

図6 Q-Uの結果(児童N407)

6月に実施した調査結果と比較すると、満足群が42人増えて8.3%増加、非承認群が26人減り、6.8%減少、侵害行為認知群が15人減り、3.3%減少した。これは、各学級で6月の調査結果を分析し、児童個々のよさや集団としてのよさを見つめ直すとともに、そのよさが發揮できるよう指導の改善や工夫を図ったことで、安定した学校生活を送ることができるようになったためと推察される。

(3) 設定した資質・能力の評価結果から

四半期ごとに、全児童と学級担任を対象に、設定した資質・能力の定着度についての評価

を行った。児童、学級担任共に、第1四半期、第2四半期では約70～100%が身に付いたと回答した。第3四半期では約90～100%が身に付いたと回答した。実践を積み重ねる度に、児童評価と教師評価のズレが解消され、肯定的評価の割合が増加したことがうかがえた。これは、育てたい資質・能力が高まっている児童の姿「ほめポイント」を家庭や地域と共有し称賛したことや、全学年が学級活動(3)をキャリア教育の要とする共通理解のもと実践したことにより、児童に資質・能力が身に付いたと実感させることができたためと推察される。

資料1

(4) 標準学力調査の結果から

1月に、全児童が標準学力調査を行った。国語科、算数科ともに、4つの学年で標準スコアを上回るとともに、知能と学力との相関関係では、全学年で学力が優位になった。特に、6学年においては、昨年度より、国語科で2.1ポイント、算数科で1.2ポイントの伸びが見られた(図7)。これは、「ほめポイント」をもとに児童のがんばりを称賛するとともに、各教科における主体的・対話的で深い学びの実現と自己マネジメント力向上を図ったことで、学習への意欲が高まり、家庭学習も充実して、学力向上につながったためと推察される。

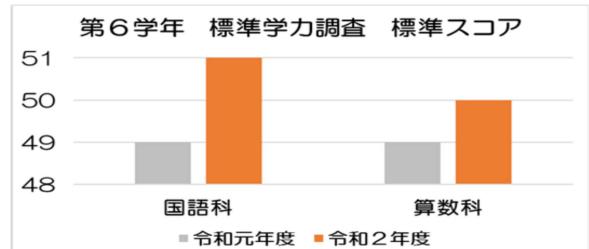


図7 第6学年 標準学力調査の結果比較

(5) 学校評価の結果から

資料2

12月に、全児童、全保護者、全教師を対象に学校評価アンケートを実施した。昨年度と比較してみると、児童は14項目のうち12項目において肯定的評価の割合が増加した。保護者は14項目のうち8項目において、肯

定的評価の割合が増加した。特に、変容が見られた項目と結果は以下の通りであった。

項目11 家庭学習に計画的に取り組んでいる

項目13 なりたい自分になるために目標をもって取り組んでいる

項目14 「こんな自分になりたい」と考えている

「キャリアプランニング能力」について質問した項目11では、児童の肯定的評価の割合が12%増加、項目13では、保護者の肯定的評価の割合が18%増加、項目14では、保護者の肯定的評価の割合が28%増加した。これは、教育活動全体を通して「目標設定—実践—振り返り—新たな目標設定」のサイクルが回るように実践を積み重ねたことで、児童は目標達成に向けて計画を立て取り組むことが意識できるようになり、その姿を見た保護者の理解が促されたためと推察される。

2 研究の成果

(1) 資質・能力と「ほめポイント」の設定

各四半期ごとに、児童の実態を踏まえて育てたい資質・能力を重点化することで、児童に意識させることができたとともに、高まった資質・能力を他教科や他領域へ汎用することができた。併せて、教育活動のどのような場面においても児童のよさを見取ろうとする教師としての資質・能力が高まった。家庭と「ほめポイント」を共有したことで、育てたい資質・能力を高めることにつながった。

(2) キャリア教育の視点を生かした意図的・計画的な教育活動の展開

児童の資質・能力を育てるために有効な教科や領域等を関連指導したことで、1つの教科で高まった資質・能力が、他教科や他領域でも発揮されるとともに、理解の深化につながった。四半期というスパンで教育活動展開し、P D C Aサイクルを回したことで、こまめな評価と改善が可能となり、児童の資質・能力を高める上で有効だった。

(3) キャリア教育の視点を生かした授業改善

授業の2つの柱をもとに、授業を組み立てたことで、教科の見方・考え方を深めたり、学力の基盤となる学習意欲を高めたりすることにつながった。さらに、「ほめポイント」をどの場面に位置づけると、設定した資質・能力を育むことができるかを教師が常に意識したことで、各教科や各領域等の目的が明確になり、指導力向上につながった。

「互見授業週間」を設定することで、いつでも授業を見合うことができるようになり、学び合い高め合う教師集団としての成長につながった。授業研究のみならず、導入の5分間や終末の振り返り5分間を参観する教師の姿が増えた。

(4) 特別活動を要としたキャリア教育の実践

全ての教育活動を通して、将来につなぐ資質・能力を高めるために横断的、関連的に指導をしたことで、学級活動(3)の振り返りが充実し、新たな目標設定につなげることができた。キャリア・パスポートにキャリア形成に関わる大切な学びの経験を累積することで、自己の成長を実感し、自己への肯定的な見方を高めることができた。加えて、生活科や総合的な学習の時間等において、地域資源を有効活用することで、活動が充実するとともに、地域愛や働くことへの憧れを高めることができた。

(5) 「自己マネジメント力」向上の手だて

P D C Aサイクルを回せるようにロングスパンのキャリア・パスポート、ショートスパンのスケジュールプランナー等の活用を軸にして指導を積み重ねたことで、「なりたい自分」になるために大切な方法であることに気付かせることができた。

加えて、私たちは児童がP D C Aサイクルを回し、目標に向かって実践する過程で、設定した資質・能力「ほめポイント」だけではなく、将来につなぐ資質・能力を総動員して称賛することができるようになった。その教職員の姿を見ている児童も資質・能力ベースで自己評価、他者評価ができるようになって

きた。どの学年でも、「○○さん、あきらめないでがんばってすごいね。」、「○○さんなら、やり遂げることができるよ。」、「みんなを笑わせるところは、○○さんのいいところだね。」等、友だちのがんばりやよさを認め、称賛する姿があった。

3 課題と今後の見通し

本実践を通して、学びの意義を実感させるためには、教師が行事や単元で育てたい資質・能力は将来どのような場面で生かされ、どのような場面で必要かを明確にもたなければならないことが分かった。児童に、「この学習や活動で高まった資質・能力が、私の将来に役に立つ、つながっている」と実感させるために、教科等横断的な視点で行事や単元の学びのつながりを明確に見通し、無理のない有効な内容の配列を考えることを、常に意識して指導していく必要があると考えた。

令和3年度は、この課題を解決するために教職員一丸となって知恵を出し合い、「なりたい自分」という目標をもった「学び続ける児童」を育て、全ての児童に真の「生きる力」を育んでいきたい。

以下は4年生の児童の作文（一部）である。

ぼくは、昔から大工になりたいという夢をもっています。

きっかけは、東日本大震災による被害で、家などがなくなってしまった人たちに、自分が建てた家で喜んでもらい、みんなを笑顔にしたいと思ったことがきっかけです。

この夢をかなえるため、ぼくは今様々なことにチャレンジしています。一つ目は、体力をつけるために、習い事のサッカーの他、学校で陸上部に入って練習をがんばっています。二つ目は、毎日の学習です。はじめは分からなくても、何度も何度もあきらめず考え、取り組んでいます。

これからも、運動や学習、行事などに前向きにチャレンジして、5年生になっても、将来の夢を追ってがんばっていきたいです。

自分は役に立てる存在であることを実感しているこの児童の姿を多くの児童に具現化できるようにしていく。

資料 1

育てたい資質・能力と「ほめポイント」の関係

四半期ごとに 育てたい資質・能力が設定 全職員で共有

学年	つくし・つばさ	1年	2年	3年	4年	5年	6年
重点化した資質・能力	失敗を恐れず取り組む	失敗を恐れず取り組む	失敗を恐れず取り組む	失敗を恐れず取り組む	難しいことでも失敗を恐れず挑戦する	分からないことや知りたいことは調べたり聞いたりして解決する	自分で工夫し学習・行動する
学年テーマ	まずは1つやってみよう！	さいごまであきらめないでがんばろう！	しつらいをおそれずにがんばろう！	がんばりつづける！	やればできる!!あきらめないでチャレンジしよう!!	新たな道(未知)を切り拓こう!!	Plan Do Check Action

第3四半期
育てたい資質・能力の一覧表

「ほめポイント」として
見取ったらみんなで認めほめる

6

第3四半期（10～12月）各学年の「育てたい資質・能力」一覧

学年	つくし・つばさ	1年	2年	3年	4年	5年	6年
重点化した資質・能力	失敗を恐れず取り組む	失敗を恐れず取り組む	失敗を恐れず取り組む	失敗を恐れず取り組む	失敗を恐れず取り組む	失敗を恐れず取り組む	失敗を恐れず取り組む
学年テーマ	まずは1つやってみよう！	さいごまであきらめないでがんばろう！	しつらいをおそれずにがんばろう！	がんばりつづける！	やればできる!!あきらめないでチャレンジしよう!!	新たな道(未知)を切り拓こう!!	Plan Do Check Action
方策	<ul style="list-style-type: none"> 目的の確認や見通しをもたせることにより、不安軽減を図り、安心して取り組める環境を整える。 個に応じた目標を持たせることで、達成感を味わわせ、次の活動への意欲につなげる。 	<ul style="list-style-type: none"> 合言葉を見る場所に掲示することで、常に意識させる。 目標をもって努力する経験を積ませることで、最後までやり遂げることの良さを理解させ取り組んでいく。 	<ul style="list-style-type: none"> 第3四半期のめあてを掲示することで常に意識させながら取り組んでいく。 失敗してもまずはチャレンジ、そして失敗してもあきらめないでがんばることの大切さを理解させ取り組んでいく。 	<ul style="list-style-type: none"> 難しいこと、苦手なことに積極的に取り組ませていく。 自分の目標をもって取り組ませることで、結果に間わらずその過程のがんばりを称賛していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 目標をもって努力したり最後までやり遂げたりする体験を積ませる。（個人及び集団） 	<ul style="list-style-type: none"> 第2四半期の力を生かし、自分で疑問をもち、課題に対して根気強く取り組むよう指導していく。 今の自分を見つめ自分の課題を解決することで、自分の道が増えたり広がったりすることを理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> Plan、Do、Check Action4つの掲示物を活用し、常に意識させる。 中学校を見据えてスケジュールプランナーを活用する。
教科、教科外等における手立て	<ul style="list-style-type: none"> イライラや不安などで立ち止まつた時、合言葉を言いながら1つずつできるところから取り組めるようにする。 失敗した時には、挑戦したことを認め、励ましながら次の活動につなげるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習面では、自力解決や友だちと助け合いながら課題を解決する場を設定する。 教室掲示を工夫し、自分や友だちの「最後まで諦めないでがんばる姿」を可視化できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 各行事や学習、生活では、その都度がんばりなどを称賛したり励ましたりしていく。 子どもたちのがんばりが可視化できるよう教室の掲示を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> 難しいこと、苦手なことに対する積極的な取り組みを称賛していく。 考え方けたり頑張り続けたりすれば成果が出てくる経験を多く積ませる。 朝マラソンなどを学年全体で取り組むことで、みんなでがんばるよさを味わわせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間と励まし支え合うような環境をつくったり、「やればできる！」という前向きな合言葉を大切にしたりすること、どんな時も粘り強く頑張ることができるようにする。 各行事や四半期ごとのキャリアシート、日々の教科における〇〇日記の効果的な活用を通して、自分の目標や頑張りを意識、実感することができるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> 教科では、児童の疑問から課題を設定したり、自力解決や話し合いの時間を確保したりするなど、自分たちで課題を解決する場を設定する。 教科外では、学校行事で児童の意見を取り入れ、よりよいものをみんなで作り上げるよさを味わわせる。 生活では、スケジュールプランナーを活用し、自分の生活を見つめ直すことで、努力を認めたり、新たな課題を発見させたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 教科：1時間の学習の中でPDCAを意識した授業展開をする。 教科外：でPDCAを可視化し、意識できるようにする。 生活：スケジュールプランナーに家庭生活・時間の使い方、テスト勉強の計画等立てさせる。



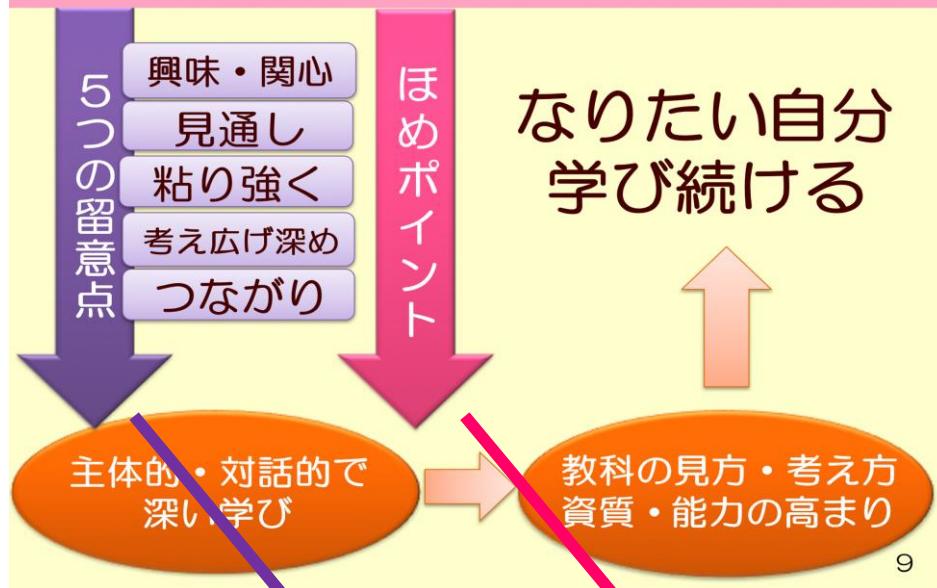
職員室や校長室、廊下等に育てたい資質・能力を掲示したことで、全教職員で見取ることができた。

資料 2

この「キャリア教育関連表」をもとに、横断的、関連的に指導し、朱書きで加除修正したこと、次年度の教育課程編成に生かすことができた。

資料 3

授業で大切にしたい2つの柱



第6学年2組 算数科学習指導案

日時：12月18日（金）5校時 場所：会議室 指導者：...

1 第3四半期で育てたい資質・能力

自分で工夫し学習・行動する力 ~Plan Do Check Action~ (課題対応能力)
--

2 資質・能力を育てるための関連指導

第2四半期では、目標「自分のよさを見つめ、さらに向上する」を設定し、自分のよさや友だちのよさに気付くことができるよう、授業内で意識して声をかけてきた。自分を振り返ったり、互いに認め合ったりしたことで、児童は自分に自信をもつことができるようになった。第3四半期では「自分で工夫し、学習・行動する力」を高めるために、教科、学校行事、家庭学習等において、Plan (計画する) Do (自ら行動する) Check (確かめる) Action (実行する) を意識させ取り組ませている。計画を可視化し、行動後の確かめ・振り返りの時間を設けることで、自己マネジメント力が高められるよう指導していく。

3 単元名 データの調べ方

4 本時の指導

(1) 目標
代表値や全体の分布の様子などに着目することを通して、優勝するクラスについて根拠を明らかにして予想することができる。

(2) 展開 (7/14)

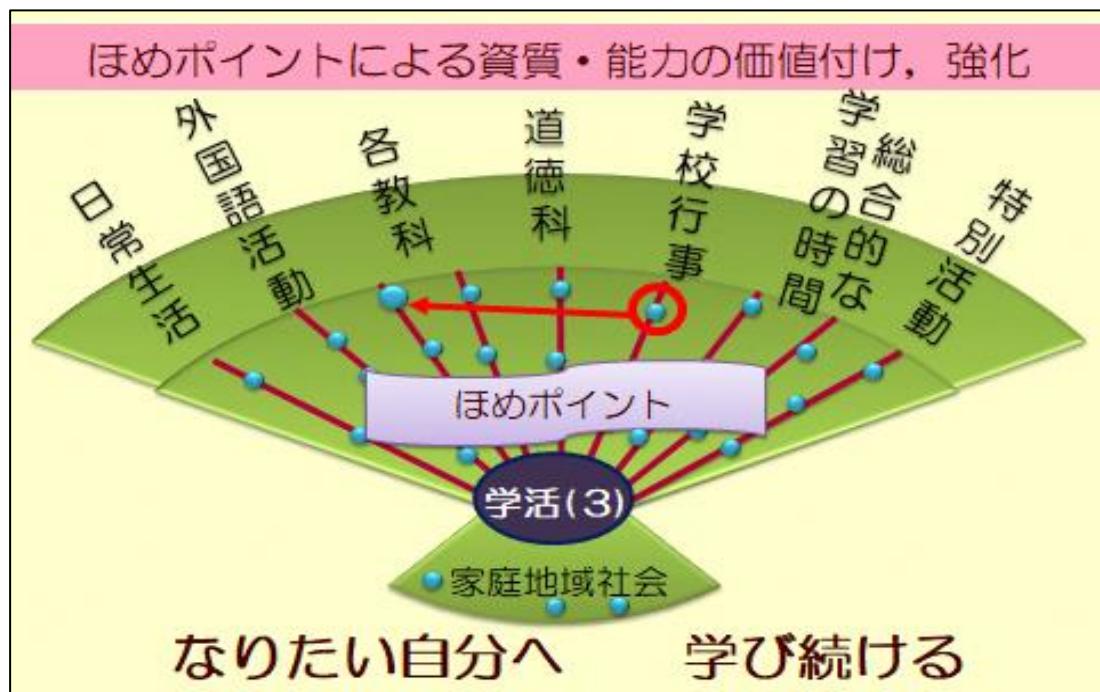
学習活動	○主体的・対話的で深い学びを実現するための指導上の留意点 △個への対応 ※評価	第3四半期の資質・能力を育てるためのほめポイント
1 問題場面を把握する。 (1) 問題を確認する。 優勝するクラスを予想しよう。 (2) 本時の課題をとらえ見通しをもつ。 根拠を明確にして予想しよう。	○これまでに学習してきたグラフや表を振り返ることで、問い合わせを引き出し、本時の学習への興味関心を高める。 ○既習事項であるドットプロットや度数分布表などのデータの特徴を振り返ることで、解決への見通しをもたせる。 ○課題解決に向けて、根拠を明らかにして考えを書いている児童のノートに丸を付け称赞することで、粘り強く取り組めるようにする。 ※データの特徴や傾向に着目し、優勝するクラスについて根拠を明らかにして判断しようとしている。 〔態〕（行動観察、発言、ノート） ○同じ結論でも理由が様々であることに気付かせる。 意見を交換する中で、結論の妥当性について考える姿	既習事項を生かし、様々な視点から考える姿 意見を交換する中で、結論の妥当性について考える姿
2 課題を解決する。 (1) 自力解決をする。 (2) 全体で話し合う。		

2つの柱を学習指導案の「(2)展開」に位置付け、授業改善につなげた

・高い2組が優勝するだろう。 ・中央値がいちばん高い2組が優勝するだろう。 (2) 学習感想を書く。	ことに気付かせる。	
--	-----------	--

資料 4

児童一人一人がもっている資質・能力を扇に見立てている。生きる力を考えることができる。中骨は、各教科、各領域を表しており、それぞれにおいて、児童がなりたい自分を目指して取り組む中で、みんなで「ほめポイント」を見取り、ほめる。青丸が「ほめポイント」、つまり高まっている資質・能力を表しており、児童一人一人の「ほめポイント」をきめ細かく見取り、ほめる。加えて、矢印が示すように、学校行事で高まった資質・能力を算数科でも発揮している姿、言い換えれば、ある場面で高まったく資質・能力が他教科、他領域でも発揮されている姿を、私たちは常に意識して見取りほめていく。このように横断的、関連的に指導していくことで、資質・能力が価値付けられ、強化されて、扇の面がどんどん広がる。そして、学級活動(3)で、個人または協働で高まったく資質・能力を共有し、振り返り、新たな目標に向かってがんばっていくエネルギーを増やす。学級活動(3)が要となるよう、全ての教育活動において、児童がなりたい自分を目指してPDCAサイクルを回し、自己の変容や成長を実感できる充実した学びにすることを目指している。児童の資質・能力が増えたり、高まったりして、大きな扇にしていくこうという考え方である。



資料 5

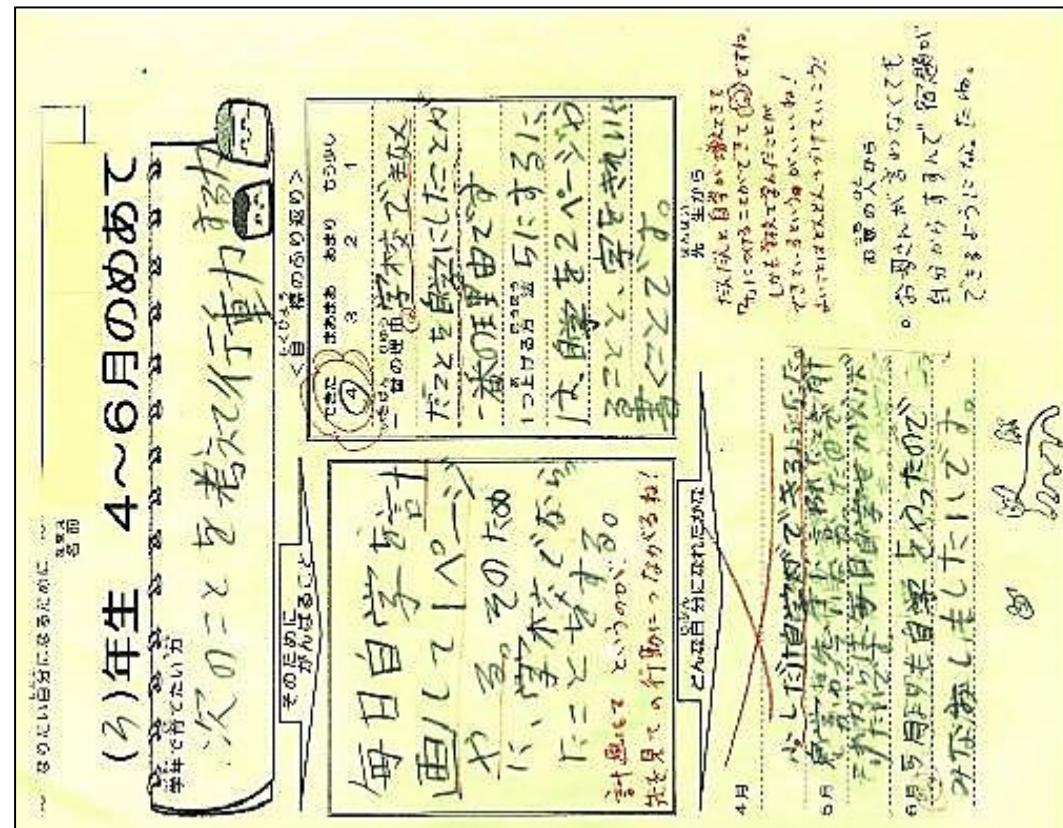
毎日の家庭学習の計画や予定を記入し、見通しをもって行うための「スケジュールプランナー」を活用することで、児童の自己マネジメント力を高めるとともに、家庭と共有して児童のよさ「ほめポイント」を見取ることができた。

やることリスト		日付	家庭学年別時間	メディア別時間 カーナビ・音楽	スクリーン時間 タブレット・スマートフォン
⑩ 口教科書PSO		00:00~7:00	3:0 分間		
口算数のプリント			自己評価と今日できしたこと		
⑪ 口漢字-ペーパー	5-4-3-2-1				
口自主学-ペー	小数の計算のキャリヤーをきいて かけ算と割り算を立ちが かかいようでやった。				
日常を17音で					
⑫					
やることリスト			家庭学年別時間	メディア別時間 カーナビ・音楽	
⑬ 口漢字-ペー	4:00~5:00	45	分間		
口教科書PSO			自己評価と今日できしたこと		
⑭ 口自主学-ペーパー	5-4-3-2-1				
口	小数のかけ算、ナリフ				
⑮ 日常を17音で	五かけ算、テストに向				
⑯	アヨシ・カベキコナーティ				
やることリスト			家庭学年別時間	メディア別時間 カーナビ・音楽	
⑰ 口プリント1枚	4:00~5:00	40	分間		
口漢字-ペーパー			自己評価と今日できしたこと		
⑱ 口自主学-ペー	5-4-3-2-1				
口	ナリフで計算よくころを				
⑲ 日常を17音で	五かけ算のQLEでしてます				
⑳	ノンコウガチャード				
やることリスト		日付	家庭学年別時間	メディア別時間 カーナビ・音楽	スクリーン時間 タブレット・スマートフォン
⑳ 口白玉子-ペーシ		00:00~7:00	3:0 分間		
口漢字-ペー			自己評価と今日できしたこと		
⑳ 口プリント1枚	5-4-3-2-1				
口	白玉子-ペー(漢字のキャリヤー)				
㉑ 日常を17音で	ノンコウガチャード				
㉒					
やることリスト			家庭学年別時間	メディア別時間 カーナビ・音楽	
㉓ 口1枚	10:00~11:00	45	分間		
口			自己評価と今日できしたこと		
㉔ 口自主学-ペー	5-4-3-2-1				
口	白玉子-ペー(ナリフ)				
㉕ 口	和詩-真庭				
㉖ 口	ナリフの作業				
㉗					
今週の自分を振り返ってみよう♪					
自己評価と今週できしたこと			来週がんばりたいこと		
㉘ 5-4-3-2-1			E-Y発表をする		
宿題をていねいにこなす					

上段が上学年用
スケジュールプランナー
下段は中学校との接続を意識した
6年生のスケジュールプランナー

資料 6

児童がなりたい自分を目指して努力してきた足跡を記録している「キャリアシート」。年間を通して、累積しているこのシートは、年度末に7枚程度に精選して、「ドリームファイル（キャリア・ポート）」に綴り、次の学年へ持ち上げる。小中の校種間連携も充実させている。



資料 7

第2学年1組 道徳科学習指導案

日 時：9月11日(金) 5校時 場 所：2年1組教室 指導者：

1 第2四半期で育てたい資質・能力

相手に分かりやすく自分の思いを伝える力（人間関係形成・社会形成能力）

2 資質・能力を育てるための関連指標

第1四半期に「苦手なことを直し、良いところを伸ばす」（自己理解・自己管理能力）を設定し、学習や生活の場面で、自分の苦手なところを意識して直そうと、良いところは継続してがんばろうとすることができるようになってきた。友だちの良さやがんばりを易い会話やさきらカードに記入することによって、子どもたちのがんばりを認め励ます機会を増やしたり自信を付けさせてきた。第2四半期は、「自分の思いをつたえよう」（人間関係・社会形成能力）を設定し取り組んでいる。何か親切にしてもらった時には、「ありがとうございます」、「ごめんなね」など、自分の思いを伝えられるように、また、授業においては、自分の考え方や意見を話すことができるようになるなど、日常生活や学習の場面において自分の思いを伝えたり行動に起こしたりできるよう、園庭指導を図りながら指導を積み重ねている。

3 教材名 「ぐみの木と小鳥」 主題名 おもいやりのこころ
主たる内容項目 親切、思いやり

4 本時の指導

(1) 目標 身近にいる人の身の上や心情に思いを寄せ、温かい心で接するよさを大切にし、親切にしていくことをする。

(2) 展開

学習活動	○指導上の留意点 ◇個への対応※評価
1 本時のわらいをもつ。 思いやりのこころって、どんなことだろう。	○「思いやりの心」について話し合いで、傾聴への方向付けをする。
2 教材を読んで、話し合う。 (1) 小鳥やぐみの行為について話し合う。	○紙芝居形式で教材を提示することで、興味をもってお話を聞くことができるようにする。また、聞く視点をもえてからお話を読みようにする。 ○それぞれの行為が、相手の気持ちを思う心から生まれていることが分かるよう関連づける。 ○ワクワクをもつ気持ちと風の中でためらう気持ちの葛藤を考えさせる。
(2) 小鳥は、風の中、どうしてりすのところに行ったのか考える。	○ペアトーキを取り入れ、小鳥の気持ちを自由に話し合うことで、思いやりをもって行動することの良さについて考えさせる。
3 本時のまとめをする。 (1) 思いやりの心について	※相手のことを見て親切にするとの大切さに気づくことができたか。(ワークシート・発表)
(2) 自己を振り返り、ワークシートに書く。	○今までの自分を振り返ったり、本時の学習を通して考えたりしたことを書く。
(3) 親切にしてもらった経験を紹介する。	○親切にしてもらった経験を紹介することで、実践意欲につなげる。

研究のまとめシート

2年1組 道徳科授業実践	
題材名	おもいやりのこころ「ぐみの木と小鳥」
授業者	
育てたい資質・能力	相手に分かりやすく自分の思いを伝える力（人間関係形成・社会形成能力）

子どもの変容

- 導入で「思いやり」について考えさせることにより、本時の価値への方向付けをスムーズに行うことができた。また、紙芝居形式でお話を聴示したり、聞く視点を与えていたことにより、子どもたちは、興味をもって真剣に聞き、短時間で内容理解することができた。
- 小鳥やぐみの行為について話し合う場面では、子どもたち一人一人が自分の考えをもちながら自分の考えを発表しようと努力していた。ペアで話し合う場面では、少人数ということもあり、自分の考えを自由に話すことができていた。分かりやすく伝えている子どもには、「きちんとお話をできましたね」と褒めることで自信をもたせたり、全体での話し合いの場面では、恥ずかしい気持ちがあり、なかなか発表できない子どももいたので、うなずいたりうなづいたりしていただ子どもたちを褒めながら発表できるよう支援してきた。周りで聞いている子どもたちの中からも大きな声で発表できた友だちを褒めたり、途中で発表が止まってしまった友だちに対しては、応援したり励ましたりするという姿も見られた。
- 授業の最初の思いやりについての価値感と最後の思いやりではどう変わったか、仙崎感の変容についても見取ることが必要だった。風の中、自分が大変なときでもりすにぐみを届けに行つた小鳥の「思いやり」についてなど、まとめをもう少し丁寧に扱いながら、子どもたちの価値の変容についても見取ることができたら良かった。
- 終末の振り返りでは、今までの自分を振り返りながら本時の学習を通して分かったことや考えたことなどをワークシートに書くことができた。「早く書きたい。」というは、自分の思いを伝えたいという気持ちの表れで、今までの学習の積み重ねが生かされていた。

授業者の振り返り

- 本時の価値にせまるために子どもたちのいろいろな見方・考え方をコーディネートするのが難しいが、対話的で深い学びにするためにも上手にコーディネートできるようにしていかたい。また、子どもたちがより良い自分になるために、自分と本気で向き合ながに考えていくよう授業改善に努めていきたい。

資料 8

第4学年1組 学級活動指導案

日 時：12月18日（金）5校時 場 所：4年1組教室 指導者：
1 第四回半期で育てたい資質・能力

2. 資質・能力を育てるための関連指標

2 資質・能力を育てるための関連指導

第2回平理で身に付いた「良風をさらに伸ばす」力を生かし、第3回平理では「美しいもので失敗を恐れず挑戦する」力の育成を設立した。音楽授業部や部ぐるな記録会等の行事では、目標に向かって努力していることや切磋琢磨は美しい感じでして、少ししづきできるようになったことをキャリアシート等に記述してみることで「それができる」という思いを高めてきた。また、道徳「たのこの伴」や各教科の学習において、すでにこれまでになくでも失敗を経験の大切さについて考えて生きさせる事。問題指揮を囲っているところこそ古巣した力である。第4回平理で伸びた人間関係・社会形成能力である。手に分りやすいく自分の考え方や実感を伝える」力へとなづなづけていく。

3 題材 第3四半期の力をつなげて、次にがんばりたいことを決めよう

4 本時の指導

（1）目标

他者からの你賛や励ましを全体で共有し、目標達成に向けて努力してきたことを振り返ることを通して、「なりたい自分」に近づいていることを実感し、今後の学校生活に希望や目標をもつことができるようとする。

(2) 展開

学習活動・内容	○キャリアの構成に基づいた指導上の留意点 ◎個人への指示・添削評価	第3回半期の反省・振り返り するための具体的なポイント
1 第3四半期のめあてについて あり返り・学年課題を確認	○ 学習や行事等の各興味等を提示し、目標に向かって前向きに取り組んできたことを魅せさせることで、なりたい自分に近づいていることに達成感をもつとともに、木曜日の学習意欲を高める。	これまでの学校生活 の中で難しかったこと もまた前向きにチャレンジしてきた姿
10~12 月でがんばったこと・これ からがんばりたいことをえよう。	○ 自己評価と他者評価により達成感を十分に味わわれるとともに、ドリームファイルを見返すことで、次の成長につながる目標を考えることができるようになる。	「失敗を恐れず挑 戦する力」をつけてい きながら成長したため の目標を考えること ができる姿
2 課題を解決する。 (1)めあてに向かってがんばって きたことを振り返る。	○ キャリアシートに記入していく自分の成長に若狭さることで、児童見立児が次にがんばりたいことを考へようとする。	自分がえた目標を 見つめ直し次の日 を決めようとしてい る姿
(2)がんばりたいことを考え、グ ループや全体で交換する。	○ がんばりたいことを考え方で、書いたりし ている児童を称賛することで、積み重ね取り組めるようにする。	自分の振り返りや 他の者の交流を通して がんばりたいことを 決めることができ る姿
3 木時の振り返りを行う。 (1)これからがんばりたいことを 決めて書く。	○ グループや个体での交流を通して、互いに 助言し合ったり、めめて見つめ直したりす ることができるようにする。	
(2)本時の振り返りを書く。	※ 奈良里子:自分に近づくために、これからが んばりたいことを近づける。→ ○ 学びの振り返りとして、本時の学習を各体 みや第4回定期の学校生活に生かしていくく ことを伝える。	

研究のまとめシート

	4年1組 学級活動授業実践
単元名・題材名	「第3四半期の力をつなげて、次にがんばりたいことを決めよう」
授業者	
育てたい資質・能力	嬉しいことでも失敗を恐れず挑戦する（課題対応能力）

子どもの変容

○ 本時は、第3四半期でのがんばりを振り返る前半と、それを受けてこれからがんばりたいことを考える後半の二部構成で取り組んだ。前半では、子どもたち自身の振り返りや第3四半期にがんばってきた写真、担任の「ほめポイント」、分科の先生からのメッセージなどを組み合わせることで、「なりたい自分」に近づいていることを実感している様子が見られた。(子どもの発言、表情など)

○ 後半のがんばりたいことを考える場面では、第3四半期で身に付けてきた力(あきらめないでチャレンジする)を生かしながら、第4四半期の見通し(どんな活動や行事があるか)を持たせたことで、一人一人がしっかりとこれからがんばりたいことを考え、ワーキング・トピックスに書くことができた。特に前半の振り返りを受けて「○○君のよう」とクラスの中で手本にしたい人を見つけ、目標にしている児童も見られた。また、第4四半期にとどまらず、上学年や中学・高校生になっても目標に向かってがんばりたい、と発言することができた児童も見られた。

授業者の振り返り

授業後の意見交換会でも様々な先生から「棚倉小全体で子どもたちを育んでいることがわかった」と言っていたように、担任一人ではなく多くの先生方の協力や見取りにより、今回の授業が実現できた。前半では担任の意図的な発言が多くなってしまったので、もう少し児童の発音を深めたり、その時がんばれた時の心情を聞いて全体にも問い合わせたりという工夫ができたらよかったです。

前半でしっかりと振り返りができたことで、後半のがんばりたいことも一人一人がしっかりと自分の思いを表現することができてよかったです。これからは、担任や先生方の見取りに加えて、子どもたち同士の見取りや認め合いを増やし、第4四半期に育みたい「かかわる力」を伸ばしていきたい。

資料 9

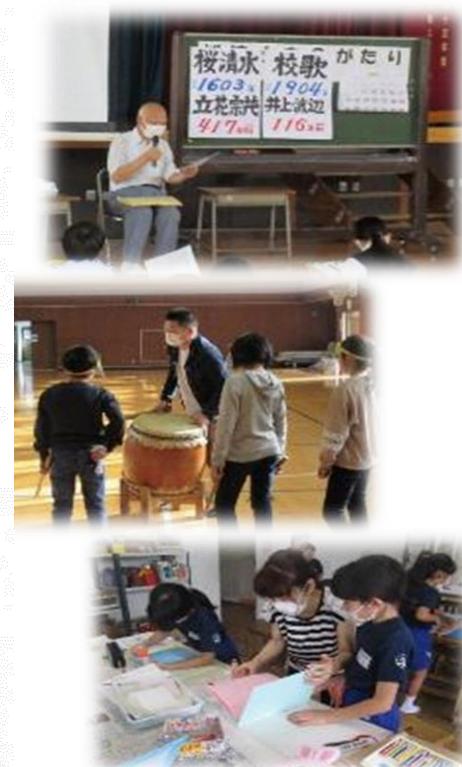
この依頼書を通して学校支援コーディネーターが地域人材を集めてくださったことで、学びが充実した。

学校支援コーディネーター

学校支援事業依頼書

⑧希望の概要についてご記入ください

学校名	棚倉小学校		【 担当 】	
実施期間	令和2年7月27日（月）14：45～15：15			
実施時間				
依頼項目	<input checked="" type="checkbox"/> 学習活動支援	□部活動の支援		
	<input type="checkbox"/> 学習環境整備の支援	□学校行事等への支援		
	<input type="checkbox"/> 登下校の安全確保(見守り隊活動)	□その他		
	※ 要望項目に×印を記入してください。			
依頼内容	○事業名	桜清水の由来について学ぶ（桜清水物語）		
	○目的	棚倉小学校の校章になっている桜清水の由来について知ることで、棚倉町や棚倉小学校を誇りに思う気持ちを高める。		
	○内容	桜清水の由来について、話を聞く。		
	○場所	棚倉小学校体育館		
	○希望ボランティア人数	2名		
	○対象学年・人数	6学年	人数 71名	
	○引率者	6学年担任3名		
	その他 (要望)	※ 授業（活動）のねらい、ボランティアに求めるものなどについて、ご自由にお書きください ・4月中旬に赤館城跡を訪れ、赤館城と棚倉城のつながりについて学芸員さんから話を聞きました。桜清水が棚倉小学校の校章になった由来や、今も桜清水を大切に守っている地域の人々の隠いについてお話ししていただけるとありがたいです。		



＜5年生の児童作文＞

教育活動全体を通して、将来につなぐ資質・能力を育てる実践
を積み重ねたことで、自己理解が深まり、将来への夢や希望を
もつことにつながった児童の姿

私の夢は、養護施設の人になることです。
なぜ私が養護施設の人になりたいかといふと
学校を休んでいる時に本で読みとても心がギ
ューッとなりましたからです。それからかけで養
護施設にて調べました。そしたらなんだ
が出来位にたくしくせつなくなりました。養
護施設以外にいいじめ、自殺などの手助けが
できることになりました。両立する事はで
きなくとも、絶対にどちらかにはなると自分
のほうかで思っています。

人を助けるのは、お医者さんだけではありません、私だけではなくたくさん人に助けてもらいま
した。学校に行けなくなったり、たまたま、学校の先生
の方、友達、そして親の力で学校に行けるよう
になりました。人は、自分で思っていふ以上
に一人ではないと。でも、親がいい子いい
じめをされていくる子は、絶対に自分のはー
と思いつんでしまつていいふにちがいな
いでし

う。なので私がこの子たちの手助けをして
あげたいのです。こんな夢かなうわけないと
思つてしまふこともあります。でも、努力
はいつかむくりんといふ言葉を信じて、こ
れから私のできる限りの努力を産えてみま
した。

私は「やがんばれ」や「やればでき」となど
の言葉は、無理をしている気がしてあまり好
きではありません。だから友達をほげます時
に言つてあげたい言葉は、「無理は体に毒だよ」

と言つてあげたいです。友達に優しいのはい
いけれど、自分を甘やかすのはダメなのです、
藁をわすれず、自分でのさる努力をしていき
て、一人には優しく自分にはきびしく」という言
葉をわすれず、自分を甘やかすのではなくて、
自分の夢は自分でかなえるしかないのです、
勉強、人との立場にな、乙考えることを意識し
て生活していきたいです。

資料 11

育てたい資質・能力を高める手立ての有効性を振り返ったり、その資質・能力の高まりを数値で評価したりしたこと、次の手立てを見通したり、肯定的な評価の高まりを見たりすることができた。

第3四半期（10～12月） 各学年の「育てたい資質・能力」一覧

学年	つくし・つばさ	1年	2年	3年	4年	5年	6年
重点化した資質・能力	失敗を恐れず取り組む	失敗を恐れず取り組む	失敗を恐れず取り組む	学習や行事にすんで取り組む	難しいことでも、失敗を恐れず挑戦する	分からぬことやもっと知りたいことは、自分で調べたり人に聞いたりして解決する	自分で工夫し学習・行動する
学年テーマ	まずは1つやってみよう！	さいごまであきらめないがんばろう！	しぶいをおそれずにがんばろう！	がんばりつづける！	やればできる！あきらめないチャレンジしよう！	新たな道（未知）を切り拓こう！	Plan Do Check Action
方策	・目的の確認や見通しをもたせることにより、不安軽減を図り、安心して取り組める環境を整える。 ・個に応じた目標を持たせてることで、達成感を味わわせ、次の活動への意欲につなげる。	・言葉を見る場所に掲示することで、常に意識させる。 ・目標をもって努力する経験を積ませることで、最後までやり遂げることの良さを理解させ取り組んでいく。	・第3四半期のめあてを掲示することで常に意識させながら取り組んでいく。 ・失敗してもまずはチャレンジ、そして失敗してもあきらめないでがんばることの大切さを理解させ取り組んでいく。	・難しいこと、苦手なことに積極的に取り組ませていく。 ・自分の目標をもって取り組ませることで、結果に問わらずその過程のがんばりを称賛していく。	・目標をもって努力したり最後までやり遂げたいとする体験を積ませる。（個人及び集団）	・第2四半期の力を生かし、自分で疑問をもち、課題に対して根気強く取り組むよう指導していく。 ・今の自分を見つめ自分の課題を解決することで、自分の道が増えたり広がったりすることを理解させる。	・Plan、Do、Check Action 4つの掲示物を活用し、常に意識させる。 ・中学校を見据えてスケジュールプランナーを活用する。
教科、教科外等における手立て	・イライラや不安などで立ち止まつた時、合言葉を言いつがんばつてくれるところから取り組めるようにする。 ・失敗した時には、「挑戦したこと認め、励ましながら次の活動につなげるようにする。	・学習面では、自力解決や友だちの助け台なしで課題を解決する場を設定する。 ・表彰掲示を工夫し、自分や友だちの「最後まで諦めないがんばる姿」を可視化できるようにする。	・各行事や学習、生活では、その都度がんばりなどを称賛したり頑張りましたとしていく。 ・子どもたちのがんばりが可視化できるよう教室の掲示を工夫する。	・難しいこと、苦手なことにに対する積極的な取り組みを称賛していく。 ・考え方続けたり頑張り続けたりすれば成果が出てくる経験を多く積ませる。 ・朝マラソンなどを学年全体で取り組むことで、みんなでがんばるよさを味わわせる。	・仲間と励まし支え合えるような環境をつくること、「やればできる！」という前向きな合言葉を大切にしたりすること、どんな時も粘り強く頑張ることができるようになる。 ・各行事や四半期ごとのキャリアシート、日々の教科における〇〇日記の効果的な活用を通して、自分の目標や頑張りを意識、実感することができるようになる。	・教科では、児童の疑問から課題を設定したり、自己解決や組合いで時間を使ったりするなど、自分たちで課題を解決する場を設定する。 ・教科外では、学校行事で児童の意見を取り入れ、よりよいものをみんなで作り上げるよさを味わわせる。 ・生活では、スケジュールプランナーに家庭生活・時間の使い方、テスト勉強等立てさせてさせる。	・教科：1時間の学習の中でPDCAを意識した授業展開をする。 ・教科外：でPDCAを可視化し、意識できるようにする。 ・生活：スケジュールプランナーに家庭生活・時間の使い方、テスト勉強等立てさせてさせる。

児童評価

身に付いた	73.3%	80.5%	63.0%	82.6%	72.9%	66.7%	62.9%
やや身に付いた	20.0%	11.9%	31.5%	8.7%	18.6%	31.8%	33.9%
肯定的評価	93.3%	92.4%	94.5%	91.3%	91.5%	98.5%	96.8%
教師評価							
身に付いた	66.7%	55.2%	41.1%	69.6%	70.0%	60.6%	61.3%
やや身に付いた	33.3%	40.3%	56.2%	26.1%	30.0%	36.4%	33.9%
肯定的評価	100.0%	95.5%	97.3%	95.7%	100.0%	97.0%	95.2%

学校通信や学年通信で、児童のよさを家庭や地域に発信することで、児童への称賛の機会を増やすことができた。

柳ヶ丘町立柳ヶ丘小学校 学校だより 令和2年9月29日(火) № 20

★教育目標★ えがお かがやき はばたく子

【なりたい自分になるために】伸び伸び、身に付いたことを発信する！

身に付いた
やや身に付いた
肯定的評価

身に付いた
やや身に付いた
肯定的評価

6年キャリア教育「第2回 梦プロジェクト」実施

6年生のキャリア教育実践 「第2回 梦プロジェクト」が先日行われました。

今回は、自動車販売業：鈴木順子さん、社会保険労務士：宇津木裕子さん、保育師：齋知世さん、葬祭業：沼田玲之さん、経営業（靴職人）：西岡大樹さんにお話を伺いました。

皆さんから、「仕事をやるがいい『努力していること』」「子どもたちの無い思い」を聞かせていただきました。真剣な声の声のうのは、やはり子どもたち一人一人に響くものですね。○○さんのお父さん、お母さんというよりも「一人の優い大人からの話」として子どもたちの心の中には残ったようです。ありがとうございました。

もうすぐ10月！ 間もなく前期終了です

明後日より10月になります。早いもので、令和2年度も9ヶ月が過ぎ、半分が経過したことになります。令和元年度が、新型コロナ感染症の感染拡大の状況からバタバタと終了し、慌ただしく始まった令和2年度が半分終しました。その前期も残すところあと10日余りとなりました。職員一同、子どもたちに前期最後の締めくくりをしっかりとさせたいと思っています。よろしくお願ひします。

「校長先生～、のせて・お願い！」プロジェクト

学校たより「なりたい自分」の紹介コーナー

今週のなりたい自分 みんな、自分で掲載依頼がきました！

○乗馬体験から
2年 わたしは、じょう馬体験に行つてかかりの人に馬は1日3時間しかねないことを教えてもらいました。とてもびっくりしました。ビスクットという馬にのったらゆれたけど楽しかったです。

○四半期のめあてから
6年 「ぼくが第2四半期でがんばっていることは、自分のよさを見つけると自分に自信がつくからです。理由は、自分のよさを見つけると自分が自信がつくからです。

6年 私は「自分や友達のよさを発見！」のために自分のよさに気付いたり、友達がいいことをしたらまねをしたりしたいです。そして、友達のよいところをほめることができます

柳ヶ丘立柳ヶ丘小学校 第3学年 学年だより 令和2年7月16日(木) 第14号

おんぶ

コメント ありがとうございました

第1四半期の振り返りに対するコメント、ありがとうございました。とても温かいコメントで、子どもたちもうれしかったようです。素敵なコメントがたくさんありましたので、いくつかご紹介させてください。

第1四半期 学年で育てたい力「次のことを考えて行動する」

・ねる時間、朝の用意を計算を見ながら出来るようになったね。宿題が終わってからゲームができるようになったね。

・家では外から帰ったら、かならず手洗いうがいができるようになりました。これからも、身近にできることからがんばっていかれるといいね。

・先のことを考えて行動できるようになってきたね！苦手な事にも自分からチャレンジできるのはすごいことだよ。もっと自信をもって○○らしく行こう！

・朝、言わなくても自分で用意して、妹にも声をかけてえらい！

・時間をいきしきして動くことができてすばらしいね。そして、もう少し早く行動すればよもうが待てることに気付いたことにびっくりしました。ぜひがんばってください！

・お母さんが言わなくとも、自分からすんで宿題ができるようになったね。

ほめられることで成果を感じながら第2四半期へ。

第2四半期 始まりました

第2四半期 学年で育てたい力
「自分の考えをつたえ、人の考えをうけとる」

第2四半期、3年生では「人間関係形成・社会形成能力」の向上を目指し、上記のめあてを設定しました。自分の考えをもつことは、習熟度アップの第一歩です。そして人の考えを受け取ることができれば、学び合いが生まれ、さらに考えが深ります。友人関係もそうです。友だちの言葉に耳を貸すと、良好な関係を築くことができます。聞かなければトラブルのもとです。さまざまな場面において、この力を伸ばしていきます。

本日、子どもたちの7～9月のめあてのエピソードをお披露しました。9月までにどのような姿を変えていくと効果的なのか、1つのポイントになるとと思います。学校でもご家庭でも一緒にほめていきましょう。

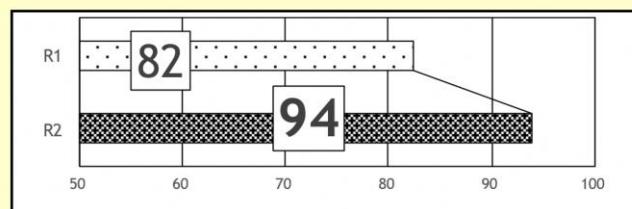
裏面もご覧ください

資料 12

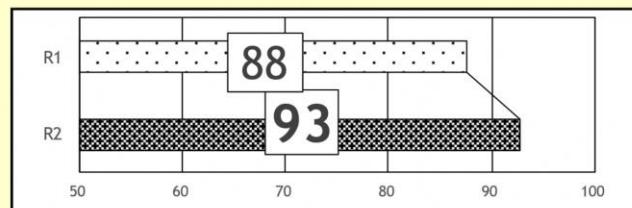
学校評価の結果から

—学校評価アンケート（児童）—

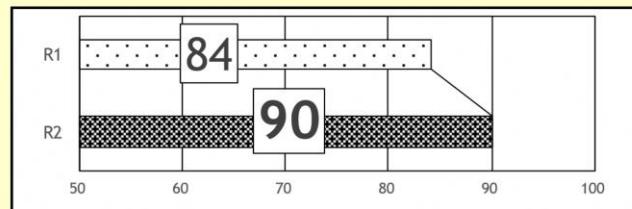
家庭学習に計画的に
取り組んでいる



なりたい自分になる
ために目標をもって
取り組んでいる



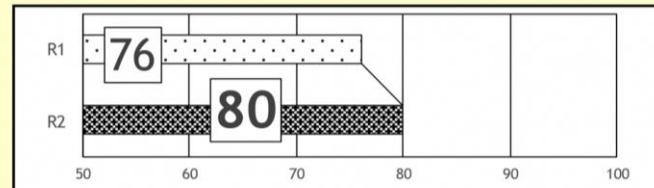
「こんな自分になりた
い」と考えている



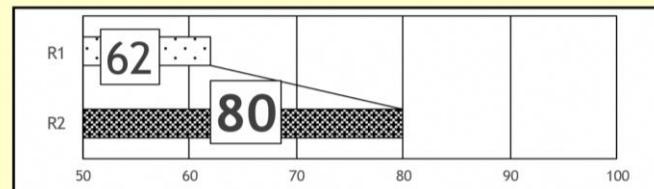
学校評価の結果から

—学校評価アンケート（保護者）—

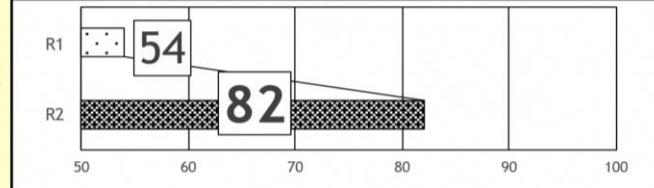
家庭学習に計画的に
取り組んでいる



なりたい自分になる
ために目標をもって
取り組んでいる



「こんな自分になりた
い」と考えている



研究主題

つながりの中で育む「只見愛」 ～未来へ向かって行動できる子供の育成～ 海につながる ESD の実践

只見町立朝日小学校 (代表)校長 米畠 健一



I 研究の動機

本校は、平成25年度よりESDの実践に取り組み、「つながりの中で育む『只見愛』」を基本理念として、地域を愛し、主体的に学ぶ子供たちの育成を図ってきた。令和元年度の研究においては、総合的な学習の時間や生活科を軸としたESDストーリーマップを実践する中で、各教科とのつながりを明確にした単元構想を構築することができた。また、地域との関わりを意図的に設定していくことでコミュニケーション力の向上を図ることができた。さらに高学年においては、海洋交流学習等の体験活動を通して「海」とのつながりを意識した実践につなげることができた。

一方で、次のような課題が見られた。

- より主体的に学び続け、学びを実践につなげていく態度の育成が必要であること。
- 各学年の学びのつながりを明確にし、目指す児童像を教師・児童それぞれに共有していくこと。
- 「海」と「ふるさと」のつながりを捉え、海を学ぶことの意味を明らかにすること。

以上のことから、持続可能な只見町、国際社会の担い手として必要な能力や態度を伸ばしていくために、これまでの研究成果を踏まえ副主題を新たにし、6年間で育成していく子供たちの姿やそれに向けた各学年での実践の方向性を明らかにしながら研究を進めてきた。

II 研究主題について

1 「つながり」とは

- (1) 「只見学」を進める上で大切な「人・も

の・こと」への主体的な関わりによる学び

- (2) 問いを友達と共有し合ったり、互いのよさを認め合ったりする協働的な学び
- (3) これまでの学習や経験を踏まえながら、新たな学びに生かしていく連続性やストーリー性のある学び

2 「只見愛」とは

単に郷土を愛する心としてではなく、「自分に自信をもち、家族や学校、地域に誇りをもち、夢や目標に向かって学び続ける意欲」と捉えた。

3 「未来へ向かって行動できる力」とは

- 現状を把握する力
- 只見町への影響や関係を考える力
(知る)
- 解決のために考える力
- 主体的に関わる力(実行する)
以上の4つの力と捉えた。

4 「海につながる」とは

自分たちの町の問題が、海洋問題と関連していることに気付くことと捉えた。

III 研究仮説

総合的な学習の時間(以下、総合とする)や生活科の学びを学習の中心として、様々な教科との関連を図りながら只見愛を育み、目指す児童の姿を明確にしながら、只見町の問題と気候変動や海洋の問題をつなぐ単元開発や単元構想の工夫をしていけば、ふるさとを持続発展させるために主体的に考え、未来へ向かって行動できる力の育成を図ることができるであろう。

IV 研究内容

1 総合や生活科における「只見学」の学びと海とをつなぐ、単元構想の工夫や開発(ESDストーリーマップの改善)

(1) 上学年

- ・ 只見町の問題と地球温暖化・海洋問題とをつなぐ実践
- ・ 只見町を守っていくことと、地球を守っていくこととのつながりを意識した実践

(2) 全学年

- ・ 只見町のよさに気付く実践
- ・ 只見町のよさを守っていくために、自分たちができる考えることを考える実践
- ・ 只見町を守るために自分たちができることを行動する実践
- ・ 各教科・「只見学」をつなぐ実践

2 子供たちの主体的な学びを重視した実践

- (1) 深い学びにつなげるためのコーディネート
- (2) 自分の思いや伝えたいことが分かるように表現する場の設定
- (3) 学習形態の工夫

3 毎日の授業を通した土台となる資質・能力の育成

4 学びを支える日常的な教育実践

- (1) 親和的な学級集団の育成
- (2) 繼続的な学びのための取組
- (3) 「家庭・地域と手をたずさえる学校」としての活動

5 関係機関との連携を図った活動

V 研究の実際

1 総合や生活科における「只見学」の学びと海とをつなぐ、単元構想の工夫や開発(ESDストーリーマップの改善)

ESDストーリーマップ（以下、ストーリーマップとする）とは、総合や生活科を軸に様々な教科との関連を明確にした各学年の学

びの地図である。〈別添資料1〉学びの連續性やストーリーを可視化することで、1年間の流れを明確に捉えることができると考え、実践してきた。今年度は6年間で育成する子供の姿と各学年の学びの関連を明確にするイメージ図（別添資料2）を作成するとともに、ふるさとのよさを再認識し、その素晴らしさを実感できる学びを根底とし、その上で、海洋や地球環境の問題とのつながりを意識した学びができるよう、各学年での目指す姿に基づいた単元構想の工夫や開発に取り組んだ。

1・2学年では、行事（遠足）で、只見町のブナを使った染め物体験（資料1）やブナセンターの見学を行った。只見町に生息している生物について知ったり、自然物を生活の中に生かす楽しさを体感したりすることで、自分たちの住む地域の素晴らしさや豊かさを実感することができた。



（資料1 ブナの葉染めをしている様子）

さらに、1学年では、生活科「たのしいあきいっぱい」において、見近な自然と直接関わる体験や、栽培してきた野菜を収穫する体験を取り入れ、子供たちが学校や地域のよさや自然の恵みに気付くことができるよう大きな单元を構想した。また、図画工作科の時間において生活科で見つけた木の葉やドングリなどを使って楽器を作ったり、収穫したさつまいものつるを活用してリースを作ったりするなど、他教科とも関連させることで、活動がより広がるよう工夫した。

3学年では、ユネスコエコパークの象徴である「ブナ」の秘密を探る学習を行った。地域にある「ブナセンター」を見学したり、セ

ンターの専門指導員の方と共にブナ林散策を行ったりすることで（資料2），児童の探究心が高められるようにストーリーマップの改善を行った。

また，ブナ林散策も季節による違いを捉えやすくするため，春と秋の2回行った。

季節によって，咲いている花が異なったり，虫の様子が変化したりしていることを知ることで，自然の素晴らしさに気付けるように改善を図った。それにより子供たちは，身近な自然に直接ふれ，体験することでその素晴らしさを知ったり，自然環境の変化を知ったりすることができ，当たり前すぎて気に留めていなかった周りの環境が，実は豊かな自然にあふれているという気付きにつながった。



（資料2 ブナ林散策を行っている様子）

4学年の学びでは，水を守るという視点を引き出すために，水に関わる問題が地球規模で発生していることを，「地球温暖化」をキーワードとして考えさせることができるように，ストーリーマップの改善を行った。理科の「もののあたたまり方」の学習と関連させ，海面上昇の原因を視覚的に理解させることができるように実験を行った（資料3）ことで，地球温暖化に由来する諸問題に关心をもち，その原因や影響を調べていきたいという意欲がもてるようとした。また，地球温暖化がもたらす弊害を調べる過程で，それを防ぐためには，町にある豊かな自然（ブナ林）を守る必要があることに気付かせることで，前半の単元との関連をもたせられるようにした。



（資料3 水位変動を観察する児童の様子）

5学年では，自分たちの町の産業の課題から，自分たちの住む地域にも気候変動の影響があると気付くことができるよう取材活動を行ったり，課題追究の時間を確保したりした。さらに，地球温暖化が自分たちの生活にどのような影響を及ぼしているか調べる活動を取り入れることで，気候変動の問題を自分事として捉えることができるように改善を図った。また，分かったことや自分たちができそうなことを考え，リーフレット（資料4）にまとめ，次年度，海辺の地域の小学生と交流した際や修学旅行に行った際に配布するなど，自分たちの思いを表現する場を設けた。



（資料4 子供たちが作成したリーフレット）

6学年「只見の未来を考えよう」では，只見町のよさや課題を見つめ直すために町役場で取材活動（資料5）を進めた。自分たちの住む町には大きな課題があることに気付いた子供たちは，その課題を解決するために，様々な立場の人々に取材をしたり，調べ活動を行ったりした。また，自分たちと異なる地域の視点を取り入れるために，町外（いわき市・相馬市）にも取材を行った。新型コロナウィルス感染防止のため直接交流が困難だったが，

アンケートや電話での交流を行い、新たな視点を得ることができ有効だった。只見町の未来について考える学習では、取材活動だけでは知ることのできなかった問い合わせや疑問を追究する時間を確保したことにより、地域で起きた水害（2011年新潟福島豪雨）の原因が、地球温暖化によるものだという気付きにつながり、持続可能なまちづくりを進めていくためには、環境問題や海洋問題も避けて通ることはできないということに子供たち自身が気付き、自分たちにできることについて話し合うという主体的な学びになった。子供たちが考える未来へ向けての提案が、単なる思いつきではなく根拠のあるものにつながった瞬間だった。



(資料5 町役場で取材活動を行う様子)

このように、ストーリーマップを子供の学びの思考に合わせて、工夫・改善することにより、教師は学びのつながりやその後の展開について具体的なイメージを明確にもち、各学年で目指す児童像に迫ることができた。また、各学年で目指す児童像に迫るために、只見町と海がつながっていることを全職員で理解し、それを子供たちに気付かせることができるような課題提示や発問を研究していくことで、子供たちに「海とのつながり」を強く意識させることができた。

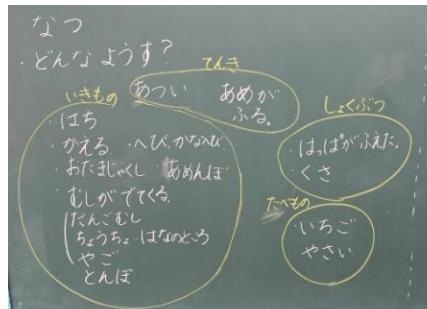
2 子供たちの主体的な学びを重視した実践

(1) 深い学びにつなげるためのコーディネート

1学年生活科の学習では、単元の始めにイメージマップ（資料6）を子供たちと一緒に

作成し、「本当にそうなの？」と問い合わせ、子供たちをゆさぶることで、「実際に確かめてみたい」「行ってみたい」という意欲が高まり、主体的に活動する姿へつながっていった。

3学年総合「只見の自然博士になろう」では、新たな課題作りをする際に、只見の自慢だと考えているブナが、実際には過去に疎外されていた歴史があることを伝え、そこから、今現在大切にされているのはなぜかという理由を問うことで、子供たちから様々な疑問や意見が出るようとした。また、外部講師（ケンタロ・オノさん）の講演を聞いたことにより、只見のブナ林と他の国々や地球環境とのつながりを考えることができた。3学年だけではなく他の学年においても、講師の方による講演会は、新しい視点を得る絶好の機会となり、新たな問い合わせを引き出したり、探究心を



くすぐったりすることにつながった。

(資料6 子供たちと作成したイメージマップ)

(2) 自分の思いや伝えたいことが分かるように表現する場の設定

2学年の生活科「生き物なかよし大作せん」では、自分のなかよくなれた生き物を紹介する場として、高学年の児童や先生方に向けたポスターセッションを行った。伝えたい相手を自分たちで決めたことで、相手を意識しながら伝えたい内容を精選してまとめたり、分かりやすく発表するポイントを意識して練習したりすることができた（資料7）。練習の際には、よさを認め合ったり、気付いたことを伝えたりする活動も取り入れた。子供たちの「やりたい」「知りたい」という思いに寄り添いながら学習を進めていくことで、子供たち

の主体性を育むことができた。



(資料7 発表練習の様子)

6学年の総合「只見町の未来を考えよう」では、自分たちの思いや考えを自由に話し合うことができるよう、話し合う時間を十分に確保した(資料8)。話し合いの際には、自分の考えを伝えたり、友達の考えにつなげて話をしたりする場を設定すること、さらには、ディベート方式による討論を行わせることで、より深い考えに導くことができた。また、子供たち同士が指名し合いながら話し合う流れを習慣化させたことで、主体性が高まっていた。取材活動や自分たちで話し合いを進める授業を継続することで、子供たちに積極性が出てくるとともに自分たちで話し合ってたどり着いた「只見町を持続可能な町にするための提案」は、全国海洋サミットで他県の友達に向かって発信したり、地域成果発表会(資料9)で、町の町長・教育委員長・町内の小中学校の児童・生徒、さらには地域の方々に発信したりすることにつながった。これにより、相手を意識した発表の仕方や表現の仕方についての学びへつながり、プレゼンテーション力の向上へもつながった。また、自分たちにできることを考え行動するという目指す児童の姿に迫ることにもつながった。



(資料8 自分の思いや考えを伝えている様子)



(資料9 地域成果発表会での様子)

(3) 学習形態の工夫

1学年生活科「あきを楽しもう」では、単元の終わりに保育所の年長組を招待する場を設定し、自分の思いや考えを伝える活動を行った。「年長さんを招待する」(資料10)という目的意識や相手意識を明確にもたせたことで、こんなことをやってみたい、こんなものを準備してあげたいなど、意欲的に準備に取り組む姿につながった。また、単元の流れを子供たちに知らせたことで、秋探しをしているときにも、「これは○○につかえそうだ」、「○○もできそう」など、見通しをもって活動する姿につながっていった。保育所の子が分かるようにと、あるグループがルールを相談したり、紙に書いて提示したりし始めたことで、「主体的に取り組む姿」は全体に広まつていった。



(資料10 保育所の子に自分たちの学びを紹介している様子)

5学年総合「只見の食と農作物」では、自分の思いをしっかりと伝えることができるよう聞き手を惹きつける話し方のスキルを提示した。総合だけでなく社会科などでも繰り返し発表する場を設定し、一方的な発表にならないようにした。経験を重ねることで、発

表のはじめだけでなく途中にも問い合わせを入れたり、「なぜ○○だと思いますか?」「どうしてそう考えたのですか?」「例えばどんなものがあると思いますか?」など、聞き手を搖さぶる問い合わせを入れたりしながら発表できるようになってきた。

3 毎日の授業を通した土台となる資質・能力の育成

学びを展開していくにあたり、子供たちが自分の考えを明確にもち、友達と協働しながら考え方を深めていったり、自分の思いを正確に表現したりする力は不可欠である。これは、学習指導要領が示す子供たちに必要な資質・能力であり、国立教育政策研究所が提示する21世紀型能力そのものであると考える。本校では各学年の実践のベースにある資質・能力として、研究イメージ図にも明記し実践に取り組んだ。<別添資料2>

1学年では、学級活動の時間にみんなで学習するときの約束を話し合い、決まったことは教室内に掲示し意識できるようにしてきた。最後まで話を聞こうとする姿が少しずつ見られるようになってきていることから、徐々に「コミュニケーション力」が高まってきているといえる。

2学年・3学年では、国語科・算数科において積極的にペア学習やグループ学習を取り入れて、意図的に発表の機会を増やしてきたことで、進んで発表できる児童が増えてきた。また、友達の考えを再生させたり、図を使って相手に分かりやすく説明させたりしてきたことで、説明する力や筋道を立てて話す力が少しずつ身に付いてきている。

4学年では、国語科の物語文の学習で、叙述を基にして考えを深めるように繰り返し指導している。これにより、論理的思考を身に付けることができ、説得力のある意見を述べるようになってきた。

5学年では、総合で地域の人達に取材活動

を繰り返し行ったことで、話を聞く中で新たに感じた疑問を追質問したり、改めて電話で質問したりと、深く追究する姿が見られた。

6学年では、総合で課題解決のために町役場やまちづくり協会の方々に取材をした際、自分たちの予想を言ってから質問したり、聞いた後でさらに感じた疑問を追質問したりする姿が見られたことから、コミュニケーションスキルの高まりを感じる。また、課題解決のために子供同士で話合いを進めたり、自分たちの考えを繋げたりすることで、よりよい考えを導き出す姿が見られた。

4 学びを支える日常的な教育実践

(1) 親和的な学級集団の育成

① ハイパーQUテストの実施・分析及び活用

豊かな学びを実現するためには、安心感のある親和的な学級集団の育成は必要不可欠である。本校では、ハイパーQUテストを年に2回実施している。第1回の実施の後には、研修会に参加し(資料11)、テストで分かることや、活用の仕方について理解を深めた。第2回の実施の後には、子供たちの気持ちやクラスの状況をまず担任が分析を行い、その後、校内生徒指導委員会で共通理解を図ることで、現状を理解し、よりよい学級集団になるための方策について全職員で考え実行した。



(資料11 研修会の様子)

② あさひの花の推奨

良好な人間関係を築いていくことを目的

とし、全校生で「あさひの花」活動（資料12）に取り組んでいる。友達のよい行いを「あさひの花」に書き、図書委員が給食の時間に放送で紹介したり、掲示したりしている。異学年にあてたメッセージも多く見られ、学年を超えてお互いのよさを認め合い、称え合うことができていることが分かる。書かれた子供にとっても、書いた子供にとっても全校生の前で称賛されることは大きな自信となり、自尊感情の高まりや良好な人間関係の構築につながっている。



(資料12 あさひの花)

(2) 継続的な学びのための取組

本校では、「只見愛ファイル」を作成し（資料13）、授業で使用してきた学習カードを綴り、学びの蓄積をしていくことで、教師が子供の学びを見取り、次の学習に生かせるようにしてきた。また子供たちは、これまでの学びをふり返ったり自己の成長を自覚したりする中で、達成感を味わうことができた。



(資料13 学びの蓄積「只見愛ファイル」)

(3) 「家庭・地域と共に手をたずさえる学校」としての活動

① 家庭との連携を図った家庭学習

家庭との連携を図り、家庭学習の習慣化を図るために「つなぐんファイル」、「家庭学習の手引き」の活用を継続してきた。つなぐんファイルには、日々のめあてや自分の予定、自分に必要な力を考えて自主学習の内容を計画して記入し、それらの反省を行うことで「問題を発見する力・解決する力」や「論理的に・批判的に考える力」を育むことにつなげている。また、家庭学習が習慣化していることが「只見学」の学びの支えになり、「只見愛」の育成にもつながっている。

② 自己表現するために必要な「語彙力」、様々な資料を読み取るために必要な「読解力」の育成を目指した読書活動や新聞活用 生涯読書に親しむ態度を育てることは、E S Dや「只見愛」で重視する能力・態度を伸ばすための土台づくりにつながっていくと考え、家庭や地域の方と連携し読書活動の推進や新聞を活用した学習を行ってきた。

読書活動では、家庭と連携し「家読の日」を設定して取り組んだり、図書ボランティアの方による読み聞かせを実施したりしてきた。読み聞かせでは、昔語りを行ってくださる方もいらっしゃった。本や昔語りの感想を伝え合うなど、本を介してコミュニケーションが図られ、「只見愛」や「コミュニケーション力」が高まっている。

新聞の活用では、図書委員が気になる記事に「おすすめ！」の付箋を貼り、読んでもらえるように活動してきた。気になる記事について話をすることで、同じ記事でも様々な捉え方があることに気付いたり、自分の考えと比較したりするなど、「論理的に・批判的に考える力」を育むことにつながっている。

5 関係機関との連携を図った活動

「地域から学び、学んだことを生かして地域に貢献する学校」としての取組

本校は、コミュニティスクールとして、年3回の学校運営協議会を開催し、より強固な

学校・地域・家庭の連携や学校の地域貢献のあり方について協議し、実践に取り組んでいる。学校が地域と連携し、積極的に人材を活用しながら教育活動を推進することにより、子供たちが地域のよさ、素晴らしさを実感するとともに、「地域のよさを守りたい」「地域の素晴らしさを伝えたい」という思いに結び付き、将来にわたって地域に貢献していくという態度の基礎を培うことにつながっていた。また、地域の方々からは「子供たちに只見のよいところを伝えたい」「学校に行くのが楽しく、生きがいになっている」等の声も聞かれ、地域の方々の心情面の高揚にもつながっていた。

① 地区振興センターとのつながりを重視した学校行事

本校では、地区振興センターと連携し、学区内を流れる黒谷川を活用した「なかよし活動」(資料 14)を行っている。「なかよし活動」では地域の方を講師に招き、川の楽しみ方を教えていただき、子供たちは川に住む生き物を探したり、きれいな石を拾ったり、川の流れを体感したりした。また、イワナのつかみ取りを実施し、捕まえたイワナをその場で塩焼きにして食べる経験もし、五感を使って川の恵みを感じることができた。地域に根ざした活動をカリキュラムの中に取り入れたことで、地域の方々から川がもつ恵みについて学ぶ機会となり「只見愛」や「E S Dや海洋教育の視点に立った資質・能力」の育成につながった。



(資料 14 なかよし活動の様子)

② つなぐんリストの活用

今年度も、「つなぐんリスト」<別添資料 5>を活用して地域人材の検索や実績の記録ができるようにした。このリストは、「只見学」の土台である地域人材の活用につながっている。今後も「つなぐんリスト」を更新していくことで、より充実した活動へつながるようにしていきたい。

③ 地域とつながるクラブ活動

本校のクラブ活動は、地域の方々を講師に招き、協力していただきながら行っている。今年度は、「自然工芸クラブ」「和太鼓クラブ」「伝承遊びクラブ」の3つのクラブを設定した。地域の伝統を教わったり、地域の自然に実際に触れたりする活動を一緒にを行う中で、「コミュニケーション力」や「他者と協力する態度」を育むことができた。また、先人から受け継がれてきた知恵や思いを知ることで「只見愛」が高まり、これからも大切にしていきたい、受け継いでいきたいという思いにもつながっている。

VI 研究の評価

1 子供の意識調査から<別添資料 4 >

土台となる資質・能力の項目のほとんどで、「そう思う」「少しそう思う」と回答する児童が80%以上であった。また、1学期と2学期を比較するとほぼ全ての項目で「そう思う」と感じた子供が増えており、日々の学校生活の中で自分の成長を実感しているといえる。今年度、目指す児童像に迫るための手立てを講じてきたことで、土台となる資質・能力が少しづつ身に付いてきていると考えることができる。また、「只見愛」に関わる項目において、ほとんどの児童が「そう思う」「少しそう思う」と答えていることから、ふるさと只見のよさを理解し、それを守っていこうという心情を育むことができたと考える。また、山間部である只見町も、海とつながっているということを感じることができるようになって

きている。しかし、新型コロナウイルスの感染防止の影響もあり、体験学習が制限され例年通りの学習を行うことは難しかった。同様に、ペアやグループ活動においても、制限がかかっていることで思うように友達と関わることができないというジレンマを子供自身を感じているのではないかと思われる。ICT 機器の活用やリモートによる交流など、工夫して学習に取り組んでいくことが必要だと感じる。また、子供たちが「自己実現」に向けて取り組む意識を高めていくためには、自己有用感の高まりが不可欠であると考える。協同的な様々な活動を通して、達成感や満足感を味わわせていくように、個に応じた目標や課題の設定、個に応じた効果的な支援の工夫を行っていく必要がある。課題の見られた項目については、引き続き改善を図っていく必要がある。

2 教師の意識調査から <別添資料3>

全職員がストーリーマップを活用し、総合・生活科における「只見学」の学びと海とをつなぐ単元構想の工夫や開発を意識して取り組むことができたと回答している。全職員で意識して実践に取り組んできたことで、6年間の学びのつながりや海とのつながりが明確になった。一方、今年度の実践では、4・5・6学年において学びが重複する内容があったため、学びの柱を明確にし精選するなど、来年度も更なる単元開発や工夫を進める必要がある。また、子供たちが海を学ぶ必然性や、各学年の実践の関連について、話合いを重ね単元開発を行ってきたことで、教員一人一人が ESD に主体的に取り組み実践することができ、指導者の意識の高まりが見られた。また、子供たちがより主体的な学びを行えるように、地域の「人・もの・こと」に多くふれあう機会を設定したことにより、子供たちの「コミュニケーション力」の高まりを感じることもできた。今後、教師のファシリテーシ

ョンスキルを更に深めることで、子供たちのより主体的で深い学びにつなげたい。

VII 研究の成果と課題

1 総合や生活科における「只見学」の学びと海とをつなぐ、単元開発の工夫や開発(ESD ストーリーマップの改善)

- ストーリーマップは、生活科・総合と各教科や行事とのつながりが明確になっており、それを活用することで、教師が見通しをもって授業を展開することができた。また、只見町と海がつながっていることを全教員が自覚し、それを子供たちに伝えることで「海とのつながり」を意識させることができた。
- 各学年で目指す児童像に迫れるような単元の工夫や開発を行い、実践してきたことで、6年間の学びのつながりや海とのつながりが明確になった。
- ケンタロ・オノさんの講義、さらには東京大学大学院教育学研究科附属海洋研究センターによるオンライン講義を実施したことで、只見町と海とのつながりが明確になり、その後海洋の学習を自分事として課題解決のための追究活動や探究活動に取り組む姿が見られた。
- 子供たちの学びに合わせて、ストーリーマップをその都度改善したり修正したりしながら取り組み、学習を積み重ねたことにより、子供たちの学びの実態に即した単元開発をすることができた。
- 担当教員で、子供たちが海を学ぶ必然性や、各学年の実践の関連について話合いを重ね単元開発を行ってきたことで、教員一人一人が ESD に主体的に取り組み実践することができ、意識の高まりが見られた。
- 柱を明確にし精選するなど、全体を見通したマネジメントの工夫が必要である。
- 6年間を見通した学びに必要な活動や資料を考え、準備・精選・蓄積していく必要

がある。

- よりよい単元開発のため教師の地域理解の研修を行っていく必要がある。

2 子供たちの主体的な学びを重視した実践

- 「人・もの・こと」への主体的な関わりを重視できるように学びを進めることができた。特に、地域の方をゲストティーチャーとして招いたり、地域に足を運び交流したりする活動を意図的に設定したことが地域を知り、地域を愛する心の醸成につながった。
- 課題提示の工夫により子供たちに既知とのズレを感じさせることができ、必要感のある主体的な活動へとつながった。
- 子供たちの「やりたい」「伝えたい」という気持ちを奮い立たせるような導入・単元の開発により、学習意欲の向上につなげることができた。
- 問いを見出す導入の工夫や調査活動のアドバイザー的支援など、児童が主体となって学びを進める工夫を意識して行うことができた。
- 目指す児童の姿を具体的にしながら実践していくことにより、指導と評価の一体化を図ることができた。
- 課題をより自分事として捉え、主体的に取り組んでいくための、教師の指導力（ファシリテーションスキル等）の向上がさらに必要である。

3 主体的な学びを支える日常的な教育実践

- 家庭や地域と連携しながら教育活動を行うことで「只見愛」や「土台となる資質・能力」を効果的に育成することができた。
- 学びの足跡を計画的に掲示することにより、子供たちはそれを手がかりに、自分の考えをまとめたり、新たな問い合わせを生み出したりしていくことができた。

○ 異学年交流の場を意図的に設定することで、上級生が下級生に寄り添う姿や上級生がリーダーとなってまとめる姿など、同年齢集団だけでは育むことが難しい子供たちの姿を生むことができた。また、それらの活動の積み重ねが、学年を超えてお互いのよさを認め合う姿へとつながり、「只見愛」や「土台となる資質・能力」を育むことへとつながった。

- 子供たちが学びのつながりに気付いたり、視野を広げたりすることができるよう、掲示資料の場所や方法を工夫、改善していくことも必要である。

4 毎日の授業を通した土台となる資質・能力の育成

- 目指す児童像に迫れるように単元の開発や改善を行ったり、各教科との関連を図つたりしながら実践してきたことで、土台となる資質・能力の意識化につながった。
- 土台となる資質・能力は、各教科との関連を図りながら、段階的に身に付けていく必要がある。

5 次年度へ向けて

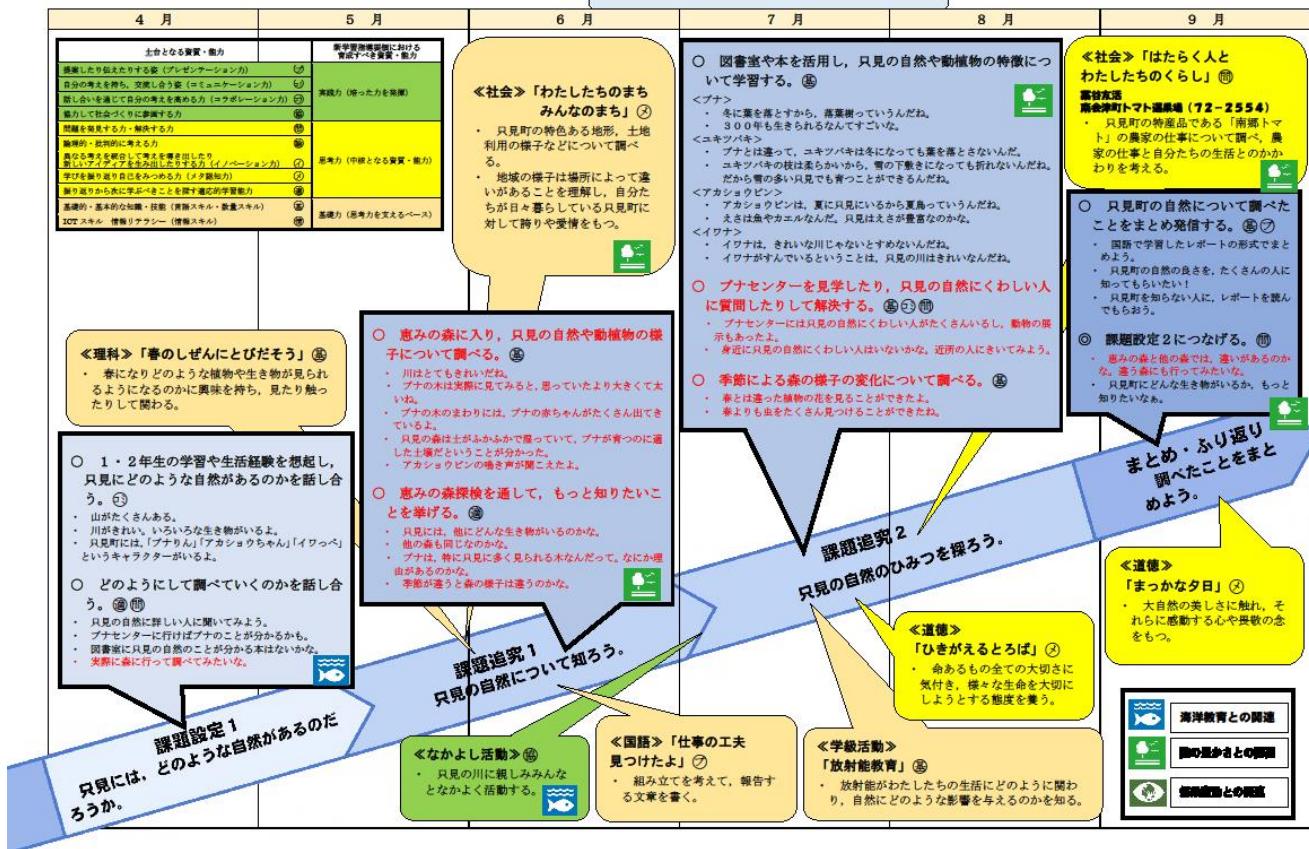
今年度の実践を受けて、令和4年度も、さらにふるさとのよさを再認識し、その素晴らしさを実感できる学びを根底とし、その上で海洋や地球環境の問題とのつながりを意識した学びができるように、単元の開発や工夫を継続したい。そして、子供たちが自分たちの故郷を守ることが海洋や地球の環境を守ることにつながることに気付かせていきたい。そのことにより自分たちの町の課題や地球環境の問題をより自分事として捉え、より主体的な学びにつなげられるよう、教員の指導力向上に関する研修を積み重ねながら、子供たちの豊かな学びにつなげたい。

〈資料1 ESDストーリーマップ〉

児童の実態や学びを考慮し、改善（朱書き）を図りながら実践していった。

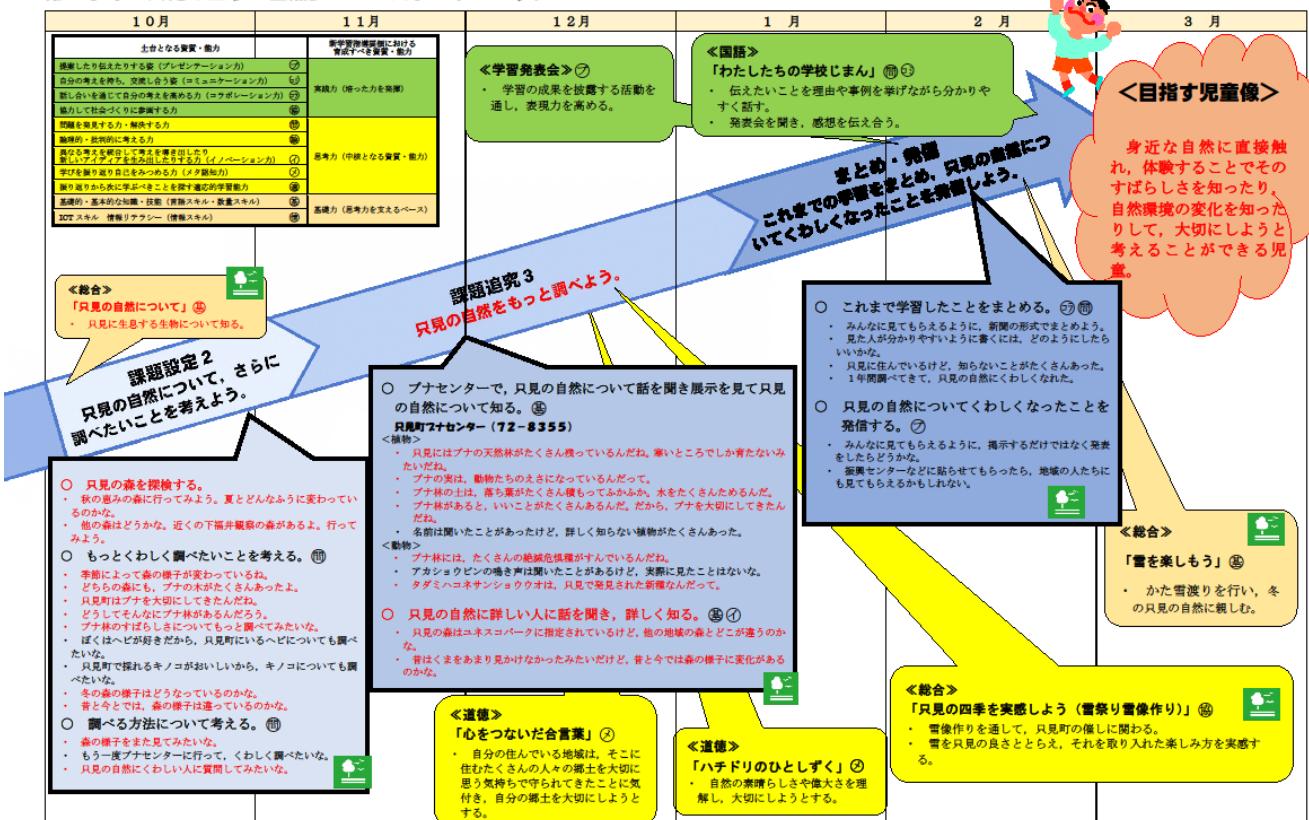
第3学年「只見の四季・自然」ESDストーリーマップ

＜学習テーマ＞ 只見の自然博士になろう。



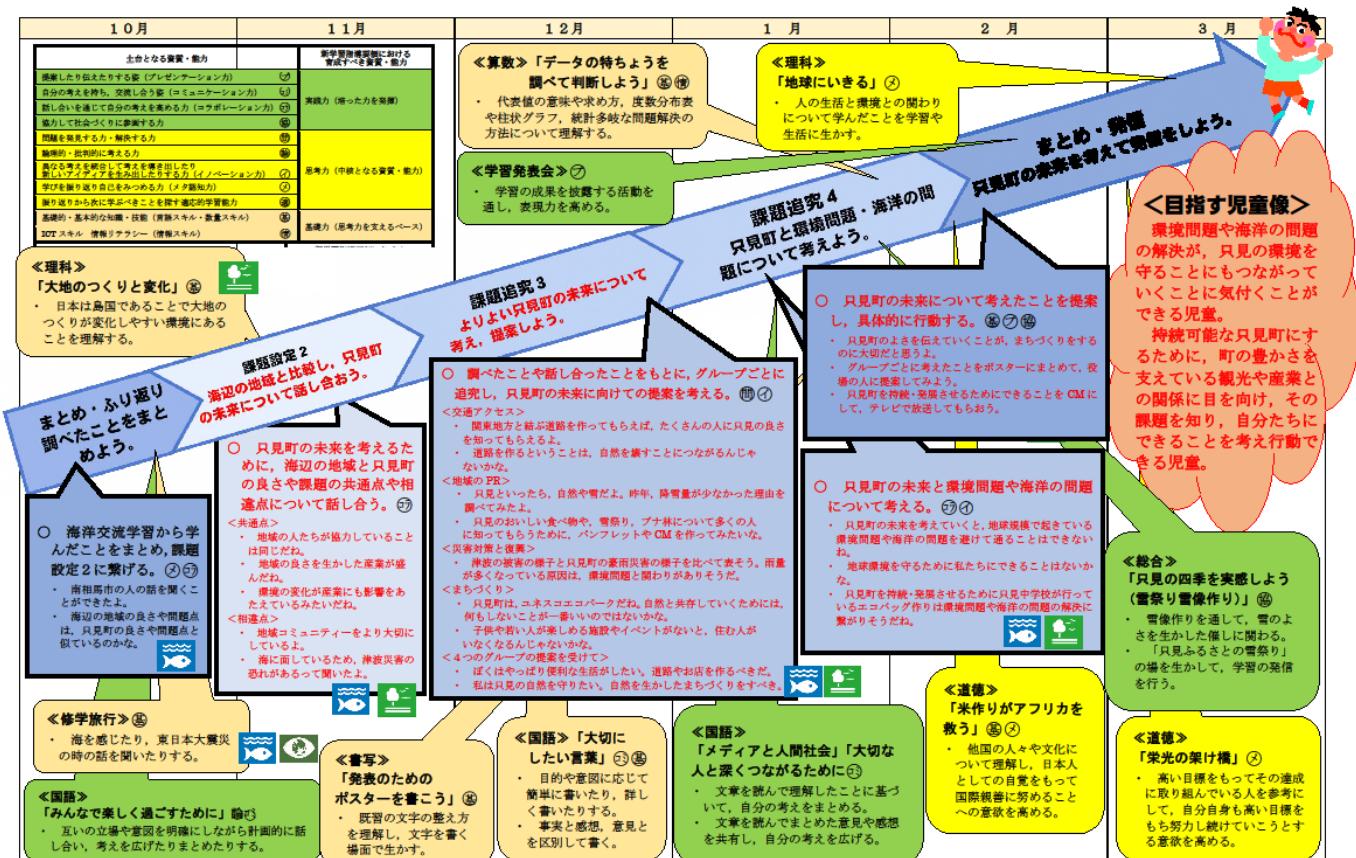
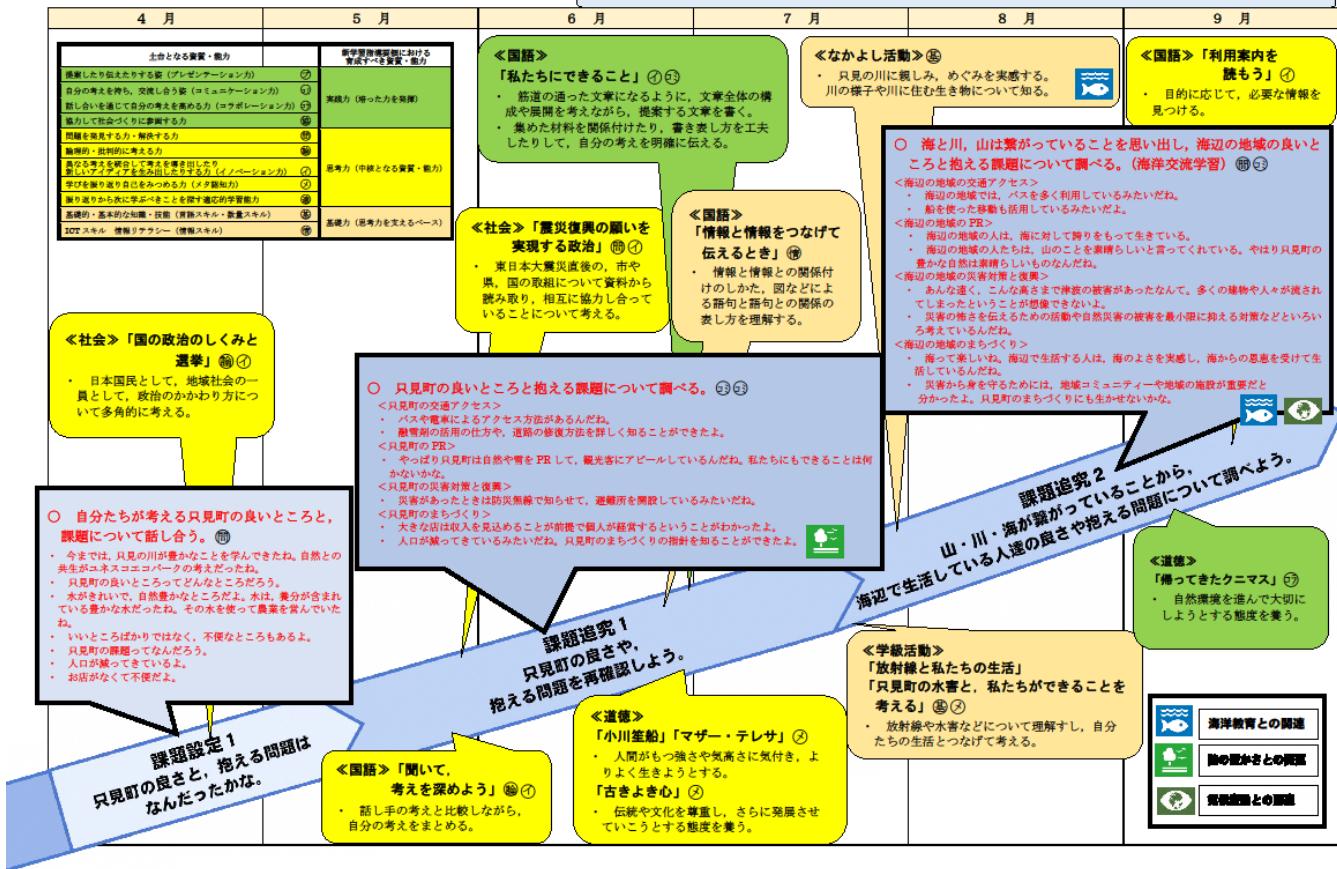
第3学年「只見の四季・自然」ESDストーリーマップ

＜学習テーマ＞ 「わたしたちの学校じまん」②③

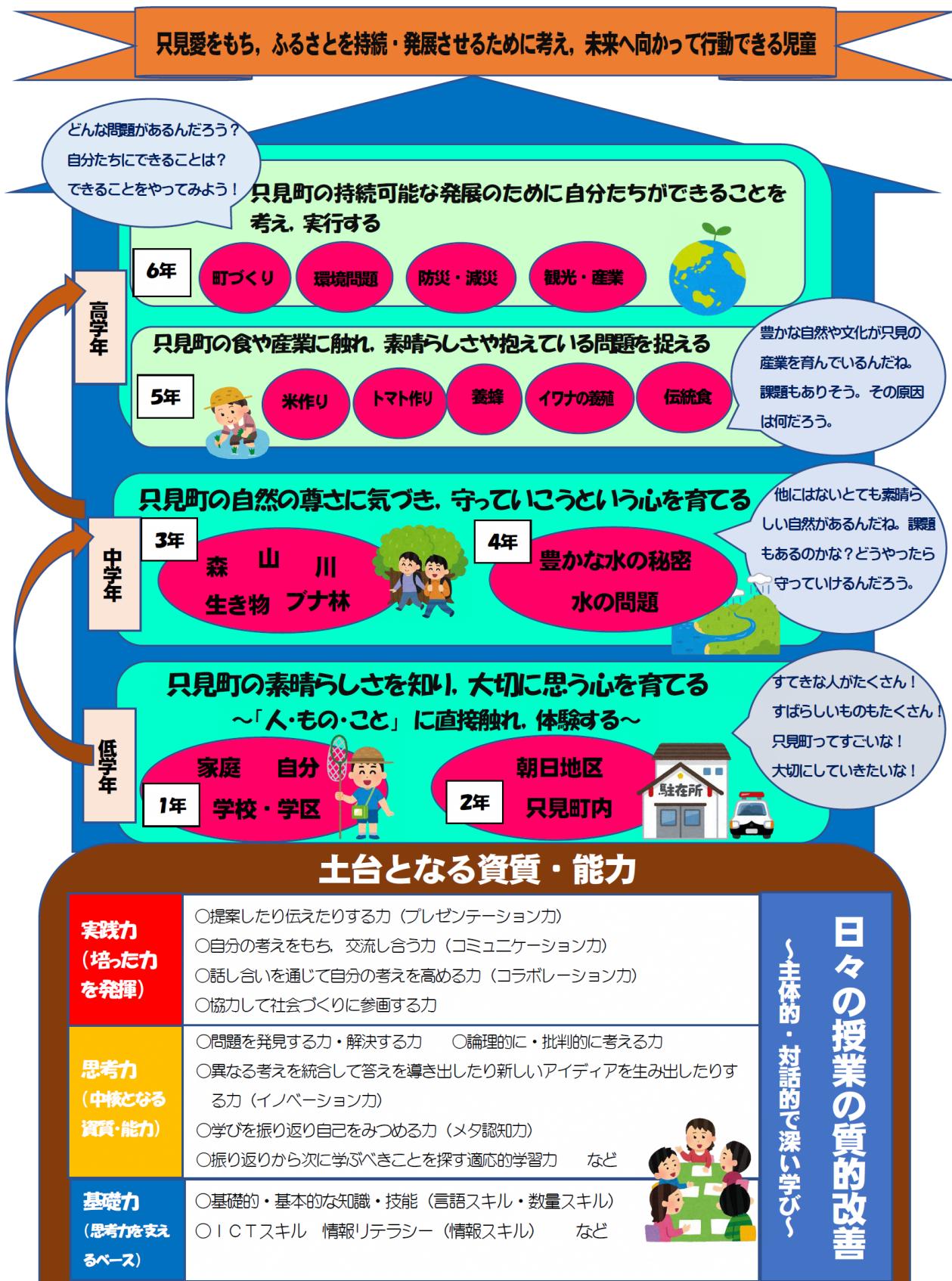


第6学年「只見町の未来を考えよう」ESDストーリーマップ

＜学習テーマ＞ 海辺の地域から学んだことをもとに、只見町の未来について考え、できることを実行しよう。



〈資料2 各学年で目指す児童の姿と主体的・対話的で深い学びを行うための資質・能力〉



〈資料3 教員の意識調査より〉

① 総合・生活科における「只見学」の学びと海とをつなぐ、単元構想の工夫や開発を意識して実践できましたか。

意識した・・・6名

意識したが、うまくいかなかった・・・0名

意識できなかつた・・・0名

無回答・・・0名

○ 「意識した」に回答。具体的にどのような手立てを意識して実践しましたか。また、どのような態度から、土台となる資質・能力が育っていると感じていますか。

- ・ 海とつなぐところまでは難しかったが、低学年の目標である地域を知り、地域の良さを知ることを意識して、地域の人々や自然と関わるようにした。
- ・ 「生き物なかよし大さくせん」で、陸上の生き物だけでなく水の中にすむ生き物を探す時間を設定した。たくさんの生き物と出会い、愛着をもって飼育することで、誰かに生き物のことを伝えたいという気持ちをもち、分かりやすく伝えるためにはどうしたら良いか考え実践する姿から、プレゼンテーション力の向上が見られた。
- ・ 川の流れはいずれ海に流れ出るという話をした。只見の自然のすばらしさについて探検したことをまとめることで、子供たちは、「只見学」の学びを十分学ぶことができたと感じる。
- ・ ケンタロ・オノさんの講話を手がかりに、海洋の問題と只見の自然をつなげ、温暖化の視点まで取り入れた。
- ・ 理科の水を扱う単元や社会科の水道を扱う単元内容に関連させて水を守るという意識を育てた。一見するとつながりが見えづらい両者を結び付ける学びにより、自ら問題・課題を見出し、情報を集め選択しながら解決につなげる力を育成できたと考える。
- ・ 只見町でさかんなものについて調べる活動から、問題があることに気付いた子供たち。その問題は、全て異常気象と関係があることに気付けるように学びを進めた。さらに、異常気象から地球温暖化・海の問題に学びをつなげられるように、単元構想を工夫した。
- ・ 地域の様々な人と関わることでコミュニケーション力、さらには自分たちで調べて発表するプレゼンテーション力が育ってきていると感じる。
- ・ 只見と海がつながっていることを教師が自覚し、それを子供たちに伝えることで「海とのつながり」を意識させることができた。
- ・ 只見町の課題を知り、それを解決するために追究したり、取材したりすることで問題解決力が高まってきたと感じる。

② 子供たちの主体的な学びを重視した実践を意識しましたか。

意識した・・・5名

意識したが、うまくいかなかつた・・・1名

意識できなかつた・・・0名

無回答・・・0名

○ 「意識した」と回答。具体的にどんな手立てを意識して実践しましたか。また、どのような態度から、土台となる資質・能力が育っていると感じていますか。

- ・ ストーリーマップをもとに、単元のねらいや流れを確認した。
- ・ 「もっとなかよしまちたんけん」では、もっと地域のことについて知りたいという想いを引き出し、子供たちの想いに沿った学習計画にすることで、町の人に積極的に関わろうとする姿が見られコミュニケーション力の向上を感じた。（臨機応変な質問・会話を楽しむ）
- ・ 問いを見出すきっかけとなる事象に出会わせ、自身でそこに疑問を見つけさせるようにセッティングを行った。また解決に向けた調査も、アドバイザーとしての立ち位置を意識した。
- ・ 子供たちは、難しい課題でもアドバイスを活用しながら進め、自分なりに答えをまとめていくことができていた。
- ・ 取材を行う人や方法（直接・電話・FAX）などを、可能な範囲で子供たちの想いが実現できるようにした。
- ・ 主体的な学びにつながるように、只見町の良さ、豊かさ、すばらしさ等、今までの学習も含めて確認する時間を確保し、取材を通して分かった課題を自分事として捉えられるようにした。
- ・ 教師主導の授業ではなく、子供たち主体の話し合いをさせたり、探究活動を継続的に行ったりすることができた。
- ・ 自分の考えをもち交流する姿から、コミュニケーション力の高まりを感じた。

○ 「うまくいかなかった」「意識できなかった」と回答。具体的にどんなことが理由であると振り返りますか。

- ・ 総合的な学習の時間が初めての3年生は、学び方を学ぶ段階で精一杯で主体的な学びまでたどりつけなかった。

③ 親和的な学級集団の育成を重視した実践を意識できましたか。

意識した・・・4名

意識したが、うまくいかなかった・・・1名

意識できなかった・・・1名

無回答・・・0名

○ 「意識した」と回答。具体的にどんな手立てを実践しましたか。

- ・ 帰りの会で友だちのがんばりやよさを称賛する場の設定。
- ・ 間違ってもいいという雰囲気づくり。
- ・ 教育相談など、普段から友だち関係にも気を配った。
- ・ 個々に扱う課題が、最終的には1つにまとまって集団としての意見を形成する流れとし、集団でお互いの活動をフォローし合えるようにした。
- ・ QUテストの分析と活用
- ・ コミュニケーションの時間の確保

- ・ 子供たち主体の学級活動を進め、どの子供たちも居心地の良い時間を作ることができた。
- ・ 意識的に子供たちをほめることで、自己肯定感を高めた。

○ 「うまくいかなかった」「意識できなかった」と回答。具体的にどんなことが理由であると振り返りますか。

- ・ 学習規律を十分に身に付けさせることができず、みんなで頑張ろうという雰囲気を生むことが難しかった。
- ・ 学活や道徳を充実させられなかった。
- ・ 基本的な指導は行ったが、生活科の時間だけでは学級集団の育成までは意識して行えなかった。

④ ストーリーマップの改善・開発をしたことで、どのような成果がありましたか。また、意見・要望はありますか。

- ・ 各学年のたてのつながりが見えてきた。
- ・ 教師も地域の良さを知ることにつながった。
- ・ ブナに焦点化していくことで、地球温暖化などの様々な問題につなげることができた。
- ・ 水と海洋、只見という点を「温暖化」という視点でつなげ、1つにまとめることができた。
- ・ 海洋問題や環境問題につながるストーリーマップになってきた。
- ・ 今年度の児童に合った単元の流れにすることができた。
- ・ より海とのつながり、気候変動について学ぶことのできる単元の流れにすることができた。
- ・ 生活科は、基本的な流れは変えられないで大きな変化はなかったと思う。

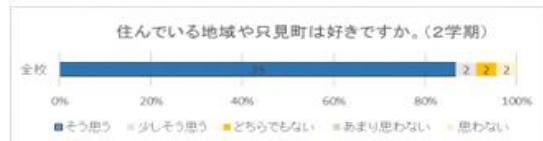
⑤ 今年度の成果・課題は何ですか。

- 6年間の学びのつながりや海とのつながりが明確になった。
- 地域とのつながりを意識した実践ができた。
- 朝日大すきという想いを様々な場面で感じることができた。
- 目指す児童像をはっきりさせたことで、ストーリーマップの改善につなげられた。
- 目指す児童像にせまれるように、学校全体で研修を行うことができた。
- 事後研究会は、全員が参加・発言できる形態であり良かった。
- 教師が地域のことを知っていないと単元開発は難しいので、教師の研修も必要だと感じた。
- 6年間を見通した学びの柱・軸を明確にし、何年生で何をやり、そこから次年へ何をつなぐのかを明らかにすること。そのために必要な活動や資料を考え、準備・精選すること。
- ストーリーマップは完ぺきなものではないので、今後も工夫・改善していく必要がある。

〈資料4 子供の意識調査より〉

〈結果〉

① 住んでいる地域や、只見町が好きですか。〈2学期〉

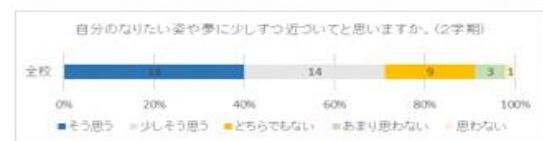


② 将来只見町の役に立ちたいと考えていますか。〈2学期〉

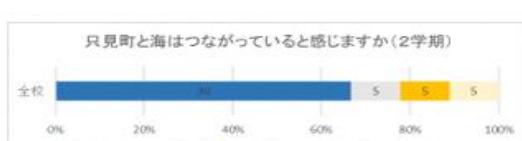


③

自分のなりたい姿や夢に少しずつ近づいていますか。〈2学期〉

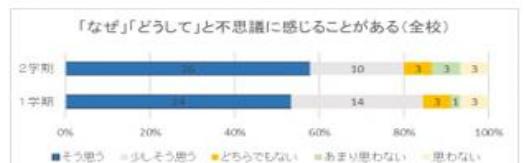


④ 只見町と海はつながっていると感じますか。〈2学期〉

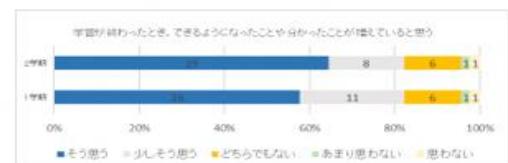


⑤

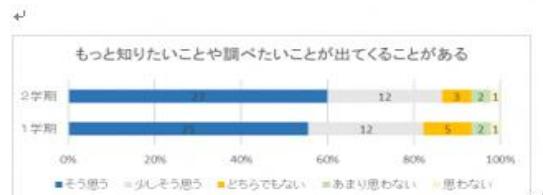
問題を発見する力について（全校）



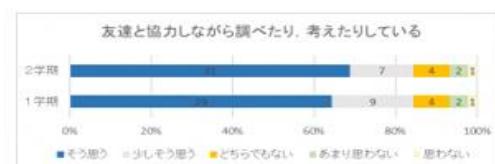
⑥ 問題を解決する力について（全校）



⑦ 振り返りから次に学ぶべきことを探す適応的学習力について（全校）

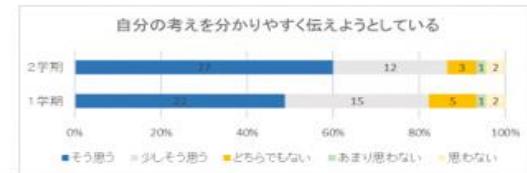


⑧ 友達と協力しながら調べたり、考えたりしている。（全校）

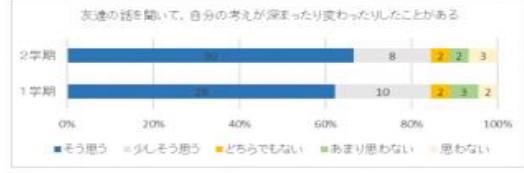


⑨

コミュニケーション力について（全校）

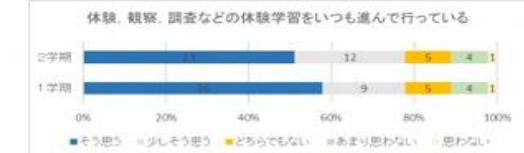


⑩ コラボレーション力について（全校）

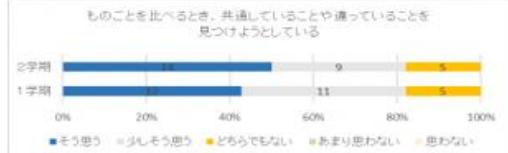


⑪

体験、観察、調査などの体験学習をいつも進んで行っている（全校）

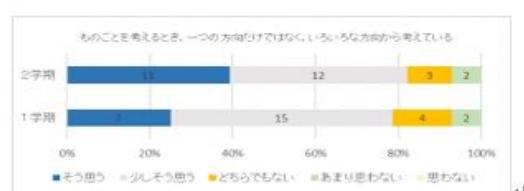


⑫ 論理的に考える力について（3年生以上）



⑬

批判的に考える力について（3年生以上）



只見町のいいところはどんなところですか。只見町に問題があるとしたらどんなところですか。(記述内容から)

14	ただみまちのいいところはどんなところですか? 升もうだけす。
15	ただみまちにもんだいがあるとしたらどんなところですか? とくにない。

1年児童

14	ただみまちのいいところはどんなところですか? りせんがたくさんあるところ。水がいい。 雪がたくさんある。
15	ただみまちにもんだいがあるとしたらどんなところですか? なし。

2年児童

17	只見町の素晴らしいところだと思いますか? しぜんの中に生き物がたくさんいる。
18	只見町の課題はどんなところだと思いますか? なし。

3年児童

17	只見町の素晴らしいところだと思いますか? 自然がたくさんある。 水がきれい。
18	只見町の課題はどんなところだと思いますか? 人が少ない。(人口) 店や建物を増やす。

4年児童

17	只見町の素晴らしいところだと思いますか? 自然ゆたか。春夏秋冬でいろいろ変化する所
18	只見町の課題はどんなところだと思いますか? お店が少ないところ

5年児童

17	只見町の素晴らしいところだと思いますか? 自然がたくさんあるところ。地元の人の交りがが多いところ。
18	只見町の課題はどんなところだと思いますか? 高齢者が多くて、働く人が減っているところ。

5年児童

17	只見町の素晴らしいところだと思いますか? 自然が他には負けないほどあり、動物もたくさんいて、人もやさしい。
18	只見町の課題はどんなところだと思いますか? 人口減少。

6年児童

〈資料5〉地域人材活用につながる「つなぐんリスト」

つなぐんリスト (検索)【朝日小】 - Excel

サインイン

ファイル ホーム 挿入 ページレイアウト 形式 データ 校間 表示 ヘルプ 実行したい作業を入力してください

アドイン入手 Visio Data Visualizer
Bing マップ
個人用アドイン People Graph
おすすめ グラフ マップ ピボットグラフ 3D マップ 折れ線 縦棒 勝敗 スライサー タイム ライン リンク テキスト ヘッダーと ボックス フォーマット 記号

ピボット おすすめ テーブル ピボットテーブル テーブル 画像 オンライン 画像 図 アイコン ハート
アドイン

A8 : X ✓ f8 1

学年 1年 2年 3年 4年 5年 6年 低学年 中学年 高学年 下学年 上学年 全校生

教科等 国語 社会 算数 理科 技能(外国語) 生活 総合 道徳 特活 その他

分野 自然 文化 公共 産業 歴史 読書 栽培 その他 元に戻す

朝日小学校つなぐんリスト

No.	学年	教科等	分野	内 容	実施	氏名・施設	住所	連絡先	備考	実績									
										R	R	R	R	R	R	R	R	R	R
1	1	生活	自然	草花遊び	7					○ ○ ○ ○									
2	1	生活	自然	草花遊び	7					○ ○ ○ ○									
3	1	生活	自然	草花遊び	7					○ ○ ○ ○									
4	2	生活	文化	昔語り	10					○ ○ ○ ○									
5	2	生活	文化	昔語り	10					○ ○ ○ ○									
6	2	生活	文化	昔遊び	9					○ ○ ○ ○									
7	2	生活	文化	昔遊び	9					○ ○ ○ ○									
8	2	生活	文化	昔遊び	9					○ ○ ○ ○									
9	3	社会	産業	トマト農家見学	9					○ ○ ○ ○									
10	3	社会	産業	町のようす	6					○ ○ ○ ○									

つなぐんリスト Sheet1

参考文献

本研究で重要な論理的基盤となった文献

国立教育政策研究所 教育課程研究センター

「学校における持続可能な発展のための教育（E S D）に関する研究【最終報告書】」

平成 24 年 3 月

- 国立教育政策研究所 教育課程研究センター
『E S Dの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み』
- 生方秀紀, 神田房行, 大森亨 (2 0 1 0)
『E S Dをつくる −地域でひらく未来への教育−』 ミネルヴア書房
- 五島敦子, 関口知子 (2 0 1 0)
『未来をつくる教育 ESD −持続可能な多文化社会をめざして−』 明石書店
- 奈須正裕 (2 0 1 7)
『「資質・能力」と学びのメカニズム』 東洋館出版社
- 東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センター (編集) (2 0 1 5)
『海洋教育のカリキュラム開発−研究と実践−』 日本教育新聞社
- 文部科学省 (2 0 1 7)
『小学校学習指導要領解説 総則編』 東洋館出版社
- 文部科学省 (2 0 1 7)
『小学校学習指導要領』 東洋館出版社
- 只見町史編纂委員会 (1 9 9 8)
『只見町史』 只見町
- 飯塚恒夫, 新国勇 (2 0 1 3)
『只見おもしろ学ガイドブック』 只見町教育委員会
- 只見町ブナセンター (2 0 1 2)
『只見の自然 只見町ブナセンター紀要 NO. 1 ・ 2』 只見町ブナセンター
- 新国勇 (2 0 1 4)
『只見の自然を楽しむ本』 只見の自然に学ぶ会
- 東京大学大学院教育学研究科 附属海洋教育センター (2 0 1 9)
『学校における海の学びガイドブック』 大日本図書
- 関西大学初等部 (2 0 1 3)
『思考ツール 関大初等部式思考力育成法 実践編』 さくら社

研究主題及び副主題

生命の大切さを尊重して行動できる 生徒の育成 ～地域との連携を図った防災教育の実践～

喜多方市立第一中学校（代表）校長 板橋 和典



I 主題設定の理由

1 今日的課題から

今年で東日本大震災から10年の節目を迎える。しかしながら、現在も地震や洪水、土砂災害などさまざまな自然災害が発生している。いつ、どこで起こるか分からぬ自然災害に備えて、命を守る防災教育が必要不可欠である。本校のある喜多方市は、東日本大震災及び原子力発電所の事故の影響を受けながらも福島県の中では被害が少なく、県内の他方部と比較しても防災に関する意識は低いと思われる。「会津は災害に強い」と言われているが、天災に関して「自分は大丈夫」という油断を払拭し、物事を冷静に判断し、考え、自分の命を自ら守るとともに、人のために行動できる実践力が求められる。そこで、教育カリキュラムの中で防災・減災教育のあり方を検討し、一般的な防災の知識だけでなく、教育の現場の中に「そなえ」の意識を醸成する。さまざまな教育活動で、防災・減災教育の指導の工夫や実践を通して、生命の大切さを尊重して行動できる生徒の育成を図りたい。

2 学校教育目標から

本校では『地域と連携し地域に貢献する喜一中生の育成』という教育目標のもと、「学ぶ意義を踏まえた、豊かな知性を持つ生徒」「心身ともに健康で、力強い向上心をもつ生徒」「自他を大切にできる、思いやりのある生徒」の3つの目指す生徒像を掲げ、その具現化に取り組んでいる。「防災・減災教育」

を基盤とした指導の工夫・実践をすることで、生命の大切さを考えて行動できる実践力を育てることを重要事項としている。さまざまな教育活動を通して、中学生としての「防災・減災」の意識が高まるような手立てを講じ、地域の関係機関や地区住民との連携を図りながら、中学生としてできる防災を考えさせ、地域の一員として地域の安全を守る行動がとれる生徒を育成する。

3 生徒の実態から

東日本大震災の発生から10年の年月が経過する。東日本大震災が発生したとき、現在の中学生は3歳から5歳であったため、大地震の影響や福島県内の被害の様子などの知識は乏しい。7月に実施した『防災についてのアンケート』では、「互いに助け合うことが大切だと思うか。」という質問に対して「とても大切だと思う」「大切だと思う」と答えた生徒の合計は98%を超えており、災害が発生したときの協力体制の心情は育まれていると考えられる。その反面、「地域の一員としてどのような行動が求められているか。」という質問に対して「よく知っている」「おおむね知っている」と答えた生徒は50%を若干超えた程度である。「防災・減災」についての正しい知識を伝え、行動力を高められるような指導を継続することにより、地域の一員として地域の安全を守る行動がとれる生徒を育成していきたい。

II 研究仮説

1 研究仮説

さまざまな教育活動を通して「防災・減災教育」を基盤とした指導の工夫・実践を積み重ねることで、生命の大切さを考えて行動できる実践力を育てることができるであろう。

2 仮説の概念規定

- (1) 「防災・減災教育を基盤とした指導の工夫・実践」とは、今まで実施されてきた教育カリキュラムにおいて、教師側の更なる工夫を加えることができれば、生徒の防災意識が高まると考えた。新たな教育活動を追加するだけではなく、既存の教育カリキュラムの中でも教師側の仕掛けにより、生徒は防災意識を高められると考えている。
- (2) 「生命の大切さを考えて行動できる実践力」とは、防災の知識を得るだけではなく、万が一のときに実際に行動できる力と捉える。事前アンケートを見ると「震災が発生したときに助け合うことが大切である」という心情面は育まれているが、「どのようなことに気を付けて行動すべきか」という防災知識は不十分である。正しい防災知識を身に付けるとともに、実践する機会を設定することが、実践力の高まりにつながると考えている。

III 研究計画

- 4月 第1回防災訓練
- 7月 磐梯山・田付川フィールドワーク
「地域の防災を考える」講話
第1回防災の意識アンケート調査
- 8月 学区内の危険箇所の実態把握
被災地の相双地区の中学校との交流
- 9月 「東日本大震災から学ぶ」講話
震災復興の現地視察
- 11月 地区ボランティア活動
地区ハザードマップの作成

第2回防災訓練（地域と連携して）

12月 第2回防災の意識アンケート調査

IV 研究の実際

1 第1回防災訓練

期　　日：令和2年4月14日（火）

該当生徒：全学年

(1) 概要・ねらい

今年度の防災教育最初の学校行事として避難訓練が行われた。例年の避難訓練と同様に火災・地震を想定しての避難訓練となっており、避難経路の確認を主な目的とした。

(2) 活動内容

今回の避難訓練は『①安全の確保 → ②屋外への避難 → ③校長からの話 → ④広域消防署員からの講話 → ⑤水消火器による消火訓練』と一般的な流れではあったが、防災学習のスタートとして、校長の話の中でその取組と心構えが告げられた。

(3) 防災教育の仕掛け

校長の話の中で「今年は東日本大震災から10年目を迎える大切な1年である」ことに加え、昨年10月に福島県内に台風が上陸し、福島県内でも大きな水害が発生した事例とともに「会津地方でも災害が発生することが考えられ、そのときに自分がとるべき行動を考えられる生徒になってほしい」という思いが語られた。最後に「今年一年間、喜多方一中は防災学習に力を入れること」が告げられ、防災教育のスタートが切られた。

2 磐梯山フィールドワーク

期　　日：令和2年7月8日（水）

該当生徒：第3学年

(1) 概要・ねらい

「災害についての調査や学習を通して、地域の一員として積極的に防災に関わる態度を養う」ことを目的として、本活動を行った。

(2) 活動内容

磐梯山噴火記念館を訪れ、佐藤館長から講

話をいただいた。磐梯山は1888年の噴火によってできたものである。それ以降、噴火は起こっていないが、いつ噴火してもおかしくない状況であることが伝えられ、生徒は驚きを隠せない様子であった。また、福島県内では磐梯山の他にも多くの火山が存在し、過去に大きな火山災害が発生していることが伝えられた。さらに、日本では気象災害として台風の上陸による水害が発生しやすいことを受け、前年の台風災害や熊本豪雨の様子が語られた。生徒の記憶に新しい災害であり、記憶を呼び起こしながら話を聞いていた。全ての災害の発生を防ぐことはできないため、災害の仕組みを理解し、災害に備えることが大切であるとのメッセージが印象的であった。

(3) 防災教育の仕掛け

喜多方市では水害だけでなく、さまざまな種類の災害が起こる可能性があることを感じさせるために、この活動を実施した。災害の仕組みを理解することは、すべての災害に対応するために必要なことであり、今後の防災教育のために大切な知識であると感じた。

3 田付川フィールドワーク

期　　日：令和2年7月9日（木）

該当生徒：第3学年

(1) 概要・ねらい

「田付川の防災現地調査を通して、水害への理解を深めて危険を回避するための備えや的確な避難行動ができるようにする」ことを目的として、本活動を実施した。喜多方市生活防災課の上野様、喜多方建設事務所の高久様を講師に迎え、午前中は田付川付近の散策を行い、午後は本校の体育館に戻り、田付川の防災についての講義学習を行った。

(2) 活動内容

午前中は田付川付近を散策しながら講話をいただいた。過去に田付川でも氾濫が起きており、田付川に架かる幸橋が流された。現在ではその教訓を生かし、水位計が設置されて

いる。この水位計は喜多方地区内の多くの川に設置しており、その数も増やしたいとの説明があった。また、過去の水害の様子から、24時間の雨量が167ミリまで対応できるように河川の幅を広げる整備が進められている。そのような努力を重ねても、昨年、九州に上陸した台風19号の雨量が、もし喜多方で降った場合、田付川も氾濫の恐れがあると伝えられ「水害は他人事ではない」との考えが芽生えたようであった。

午後の体育館での防災講義では、水害の危険について説明を受けた。大雨が降ったとき、会津地区では「地滑り」の発生の可能性が高いとのことである。多くの自然災害は「山鳴り」「川が濁る」「水位が下がる」などの前兆現象が起こるとの説明もあった。まとめとして「守れない災害は必ず発生する」ことが告げられ、いざというときのために「ハード面・ソフト面の対策」「地域一体での防災に対する取組」が必要であるとのことであった。

(3) 防災教育の仕掛け

遠方の磐梯山と身近な田付川のフィールドワークを行うことで、生徒は会津地区内では火山災害と水害の危険性があるという事実を感じることができていた。

4 「地域の防災を考える」講話

期　　日：令和2年7月28日（火）

該当生徒：全学年

(1) 概要・ねらい

「水害が発生したときの危険箇所についての知識を深めること」を目的として、喜多方市生活防災課の上野様を講師に迎え全校集会を実施した。

(2) 活動内容

水害により水かさが増すと「濁り水で道路や水路が見えなくなる」「傾斜地で大量の水が川のように流れる」「川の土手が決壊し水深が深くなる」などの危険があることが伝えられた。マンホールや道路脇の水路さえ、

水害が発生したときには危険箇所になる。また、濁り水には泥や砂が含まれるため、水道水より重く、水の深さがひざ上になると歩くことさえ困難になるとのことであった。以上のことから、水害が発生したときの危険箇所として「用水路や川の合流地点」「マンホール」「柵がない用水路」「柵がない道路」「水が流れ込む傾斜地」の5つのポイントが挙げられた。これらのポイントを水害ハザードマップ作成のための着眼点とした。

(3) 防災教育の仕掛け

今回の危険箇所の講話を受けて、夏季休業中の課題を生徒に課した。自分が住んでいる地区の危険箇所を地図上にプロットするというものである。今回の講話であげられた5つのポイントを理解させ、継続性を持たせた指導になるよう心掛けた。また、偶然にも講話前日の7月27日に台風が接近し、田付川の水位が上がり、本校の体育館が地区の避難場所になった。大きな被害がなく台風が通過したことにより28日の午前中には避難していた方々は全員自宅に帰宅することができたが、一時は30名程の方が避難していた。避難所の姿を残したまま、この集会を実施したため、興味深そうにその様子を観察する生徒も多かった。この仕掛けが11月に実施した地域合同避難訓練につながるものとなった。

5 学区内の危険箇所の実態調査

期　　日：夏季休業中

該当生徒：全学年

(1) 概要・ねらい

「自分の生活地区にある危険箇所を確認し、水害ハザードマップを作成するための資料とすること」を目的として、本活動を実施した。

(2) 活動内容

夏季休業中の空いた時間に自分の生活地区内を散策し、危険箇所を調べる宿題を課した。危険箇所については7月28日の講話で確認された5つのポイントに絞り調査し自分の生

活地区の地図に危険箇所をプロットさせた。また、保護者との話し合いの中で、自分の生活地区の避難場所や危険箇所について話し合う機会を設定させた。

(3) 防災教育の仕掛け

11月に予定されているハザードマップ作成の前段階として、この活動を設定した。実際に散策し自分の目で確認することで得られるものは多いと考えた。しかし、全生徒が地域の危険箇所を確認するには不十分であるため、11月6日（金）の地域ボランティア活動の中でゴミ拾いを行いながら、危険箇所を確認する時間を設定した。

6 生徒会と小高中学校との交流事業

期　　日：令和2年8月17日（月）

～18日（火）

該当生徒：生徒会本部役員

(1) 概要・ねらい

「自然災害の現状、原因および減災などについての理解を深め、現在および将来に直面する災害に対して適切な行動選択ができるようすること」をねらいとして、本活動を実施した。夏季休業中の期間を利用し、生徒会本部役員が1泊2日で南相馬市を訪れた。

(2) 活動内容

宿泊場所に到着した後「周辺の震災現場の散策」を行った。今回の宿泊場所である小高駅前の旅館は、現在では町の唯一の宿泊施設になっていた。震災後はボランティアや大学生を受け入れるなど小高地区のシンボルになっていたとのことである。近くの村上海岸には3重の防波堤が作られており、防波堤と防波堤の間には松が植樹されており、30cmほどの高さに成長していたとのことであった。

2日目には「小高中学校生徒会との交流事業」が行われた。はじめに小高中学校生徒会から「震災当時から今日までの足跡」の紹介がなされた。災害発生時には、家が壊れて流されたり、ガラスが割れたりした。道路は地

割れが起こって車が通れず、携帯電話がつながらないため何日も家族と連絡が取れないという状況が続いたとのことである。余震が続き停電や断水が発生するなど、生活環境は悪化の一途をたどっていた。避難所では、非常食など食料が限られ、プライベートが守られないことによりストレスがたまり、家族内の喧嘩が多く発生するなど精神的にも参っていたとのことであった。その後、仮設住宅での暮らしが始まる生徒もいれば、家族と別々の暮らしになる生徒もいた。地元を離れる人々も多かったため町中の人口が減っていくなどの変化も見られた。東日本大震災から10年の年月を経て、家族全員での生活が始まり、高齢者やお店が戻ってきたりと以前の様子に近づいてきている反面、子どもの数は減っている。少子高齢化が進んでおり「完全な復興はまだ先である」という言葉には重みがあった。当時の行動を振り返り、「あらかじめ避難場所を決める」「防災グッズや非常用の食料を準備する」「物資などを分け合う気持ちを持つ」などの備えが必要であったと述べていた。「命より大切なものはない。早めに避難して自分の命を守る」ことが最重要だというコメントで説明が終わった。地元の中学生から聞く話には重みがあった。

(3) 防災教育の仕掛け

東日本大震災で原発の被害をほとんど受けていない会津地区からすると、相双地区の被害の大きさは計り知れないものである。その経験を乗り越えて生活をする同年代の生徒と触れ合うことにより、防災・減災の意識を深めることにつながると考えられる。その経験を文化祭の場で全校生徒に伝え、防災・減災意識の共有を図れる場を設定した。

7 「東日本大震災から学ぶ」講話

期　　日：令和2年9月10日（木）

該当生徒：第1学年・第2学年

(1) 概要・ねらい

「東日本大震災の津波被害や原発事故に関する資料を見る、講話を聞く機会を通して、命の大切さや災害に備えることの大切さに気づくこと」を目的とし、本活動を実施した。福島県立博物館の筑波様を講師に迎え、第1・第2学年の学年集会の形式で活動を行った。

(2) 活動内容

災害では、人々の「これくらいなら大丈夫だ」「今まで大丈夫だったのだから…」という心の隙が、避難を遅らせる。避難の第一歩が遅れたことにより、いざ避難をしようとしたときには手遅れであり、多くの命が失われることにつながる。また、ハザードマップ上では津波が来ないと考えられていた地域にまで津波が到達することにより、大きな被害が発生することもある。災害は想定外の事象の繰り返しであり、想定外であるが故に被害が大きくなるとのことであった。

実際の避難所運営ではさまざまなトラブルが発生する。「支援物資の問題」や「水の確保の問題」「トイレの衛生問題」など多岐にわたるものであるという。そんな中、幼少時代から防災教育を受けて育った地域では、小学生でさえ地域の一員として避難所で活動に当たっている。学校が避難所になった場合、必要物資の場所を理解しているのは、その学校の児童生徒である。また、避難所の清掃活動や支援物資の運搬活動などでは、小学生や中学生が大きな力となる。避難所の運営がうまくいかない地域の特徴としては「自分は避難民であり、だれかがやってくれる」という思いが強く、トラブルを生むとのことであった。中学生として「自分の命を守ることにより、地域の方々の命を守れるようになってほしい」と、筑波様から伝えられた。

最後に、避難所では「自分の目で見て」「自分で考え」「自分で行動する」ことが大切であることが告げられ、その実践力の育成のためにクロスロードゲームが行われた。クロスロードゲームは、阪神・淡路大震災の際に、

神戸市職員が実際に直面した課題などを取り扱ったものであり、画一的な答えのない設問が盛り込まれている。災害対応は、ジレンマを伴う重大な決断の連続である。二者択一の設問に YES または NO を判断することを通して、防災を「他人事」ではなく「我が事」としてとらえ、相互に意見を交わすことがねらいである。生徒はジレンマの中で、自分なりの理由付けを行い、判断を下していた。

(3) 防災教育の仕掛け

10年前の東日本大震災では浜通りを中心に大きな被害が発生している。しかし、会津地方では津波被害や放射線による風評被害はあまり感じられなかった。さらに、今の中学生は震災当時の記憶も不鮮明である。当時の避難所の様子を写真や動画を交えて知ることにより、震災復興の現地調査がより効果的なものになるとを考えた。さらに、地震の影響で天井から落下した体育館の照明や、津波によって流されたパトカーの扉などの震災遺産を展示したことにより、多くの生徒が東日本大震災の被害の大きさを感じることができた。

8 震災復興の現地調査（いわき市）

期　　日：令和2年9月15日（火）

該当生徒：第1学年

(1) 概要・ねらい

「東日本大震災の津波被害や原発事故に関する資料を見学し、講話を聞く機会を通して、命の大切さや災害に備えることの大切さに気づかせること」を目的とし、本活動を実施した。例年は遠足として実施していた行事を、東日本大震災で多くの被害を受けたいわき地区での防災学習に置き替えた。

(2) 活動内容

豊間公園では語り部の大谷様より講話をいただきた。東日本大震災では大きな津波が豊間地区を襲った。豊間地区では2度目の津波が大きな被害をもたらした。1度目の津波は被害が小さかったため、避難所から自宅や海

辺の様子を確認するために戻った人がいたとのことである。「津波は2度、3度と襲ってくることや、安全が確保されるまでは絶対に自宅や海辺の様子を確認しに戻らないこと」というメッセージが伝えられた。

いわき震災伝承みらい館から、海岸線に目をやると「森林防災緑地」を確認することができた。これは東日本大震災の後に作成されたものであり、当時の教訓が生かされたものとなっていた。震災前の豊間地区の写真には、河川ぎりぎりまで多くの家屋が並んでおり、現在の風景とは大きく異なるものであった。10年の歳月をかけて地域の復興が進んでいるものの、当時の様子には戻っていないことを実感した瞬間であった。

いわき市地域防災交流センターふれあい館では語り部の阿部様・石川様から久ノ浜地区的災害の様子を聞き、避難所や震災後の火災の写真などを見学した。久ノ浜地区では津波が押し寄せた後、大きな火災が発生しており、一晩かけて消火活動が行われていた。津波の被害にあった自家用車や住宅から油が流れ出し、海面上で火災が発生しているパネルを発見すると、生徒は驚きを隠しきれなかった。

(3) 防災教育の仕掛け

同じ福島県内においても、東日本大震災で受けた被害はさまざまである。大きな津波被害を受けていない会津地区からすると、いわき地区の被害の大きさは計り知れない。「いわき地区の災害の傷跡」や「10年たった今でも復興途中であること」に驚きを感じた生徒が多くいた。【資料編2ページ】

9 震災復興の現地調査（相馬市）

期　　日：令和2年9月15日（火）

該当生徒：第2学年

(1) 概要・ねらい

1年生と同様のねらいで2年生は相馬市で現地調査を行った。

(2) 活動内容

防災備蓄倉庫は相馬市の中心部にあり「兵糧蔵」と呼ばれている。倉庫の中には水・食料・衣服・毛布・リヤカー・発電機などの生活に必要な支援物資や機械などが保管されている。炊き出し用の釜では一度に220人分のご飯を炊くことができることであった。東日本大震災後は全国各地からたくさん支援物資が送られ、喜多方市からも支援物資が届けられた。国内外からの多くの支援によって支えられており、命や生活・安全を守ることの大切さに触れることができた。

次の訪問地であるスポーツアリーナ第二体育館では、震災語り部の菅野様から「東日本大震災について」、小沢様から「原子力発電所事故について」の講話をいただいた。相馬市では東日本大震災で458名の命が奪われており、そのほとんどが津波によるものであった。震災後はライフラインが止まってしまい、多くの人が避難所生活を送っていた。学校や公民館などの避難所では教室程度の広さに80人の人が雑魚寝して生活を送っていた。不自由な生活の中、深夜にスマートフォンの明かりで受験勉強に取り組む高校3年の女子生徒がいたり、汚れているトイレを大人に混じって清掃する小学6年の男子生徒がいたりという話も伺えた。自分たちより小さい子どもが、地域の人々のために働いている話には重みがあった。被災者は日常の生活が奪われたことに加えて、放射能差別を受けるなど悪者扱いされることもあり、精神的ストレスをためていた。そんな中、避難所生活で「出会い」「友達」が得られ、避難所で出会った方々との絆こそが大きな励みだったとのことである。この事故を単なる被害と捉えるのではなく「福島県の団結力を試された大きな事故」と表現されたところに重みを感じた。

(3) 防災教育の仕掛け

福島県内でも震災の被害には大きな差異がある。相馬市では震災の被害に加えて、原子力発電所事故による被害も大きかった。1日

の行事の中で多くのことを感じ、学ぶことができると実感できた。【資料編3ページ】

10 地区ボランティア活動

期　　日：令和2年11月6日（金）

該当生徒：全学年

(1) 概要・ねらい

「地域防災活動の一環として、自分が住んでいる地区の危険箇所を再確認すること」を目的として、この行事を実施した。近くに住む生徒が5名程度の集団で歩きながら通学路の危険箇所を確認する活動を行った。

(2) 活動内容

前日の事前打ち合わせの中で、地域の危険箇所を確認した。夏季休業中の宿題であった危険箇所のプリントを持ち寄り、当日に確認すべきポイントの共有を図った。本校は学区も広いため、地区によって危険箇所もさまざまである。住宅地ではマンホールや道路脇の水路が危険箇所のほとんどであるし、周辺部では用水路や傾斜地などの危険箇所も見られた。その資料をもとに、当日のボランティア活動の時間に自分たちの目で危険箇所の確認を行った。地図上のイメージだけではなく実際に現場を目にすることにより、生徒には危険箇所のイメージが鮮明に記憶された。

(3) 防災教育の仕掛け

本校では通学路のゴミ拾いをしながら登校する「地区ボランティア活動」を実施してきた。今年度はその取り組みに、防災活動を盛り込んだ活動を計画した。水害が発生し、避難が求められるときには中学生は地域の命を守る立場となる。地域の弱者の手を引きながら避難するときには、危険箇所を知っておくことが重要である。翌週に行われる地域合同避難訓練では集団下校を計画し、水害が発生している想定の中で、危険箇所を迂回しながら下校する活動へつなげた。

11 地区ハザードマップの作成

期　　日：令和2年11月11日（水）

該当生徒：全学年

（1）概要・ねらい

「地域防災活動の一環として、自分が住んでいる地区の危険箇所を再確認する活動」のまとめであった。11月6日に実施した地区ボランティア活動で確認してきた危険箇所を、用紙にまとめる作業を行った。

（2）活動内容

地区ボランティア活動の事前指導のときに、あらかじめピックアップした危険箇所マップの上に、実際に確認してきた危険箇所を追記する作業を行った。住宅地ではマンホールや道路脇の水路が至る所に存在することや、周辺部では用水路や傾斜地などの危険箇所が存在することを再確認することができた。

（3）防災教育の仕掛け

同日に実施された地域合同避難訓練終了後に集団下校訓練を実施した。自分たちが作成したハザードマップを参考に、水害が発生した想定の中で安全に下校することを目的とした。実際に作成したハザードマップをもとに、下校する体験を設定することにより、この活動が生徒の印象に残ると考えた。

12 第2回防災訓練（地域合同避難訓練）

期　　日：令和2年11月11日（水）

該当生徒：全学年

（1）概要・ねらい

「災害発生時には進んで他の人々や集団・地域の安全に役立つことができるよう防災対応能力の基礎を培う」ことを目的として、第2回の防災訓練を実施した。今回の避難訓練は地域の協力を得ながらの活動とした。喜多方消防署の職員、地区の自主防災会の方々、地区の行政区長様、喜多方市赤十字奉仕団の皆様、喜多方市地域防災課の職員、県立博物館の職員を招いての実施となった。

（2）活動内容

今回の避難訓練では『避難所の設営』を実施した。地区ごとに活動内容を分担し、避難所設営の一部を体験する機会とした。

①段ボールシート敷き：喜多方市の協力をいただき、避難所で使用する段ボールをお借りし、それを体育館内に敷く作業を行った。7月の水害で本校体育館が避難所になったときに、床が冷たくなるとの反省を受けて喜多方市が準備したものであった。段ボールの有無により、保温効果が大きく異なることも体験することができた。

②机・椅子（受付場所）の設置：避難者の受付に必要な机・椅子の設置作業を行った。実際に避難所になった場合は、多くの避難者が一斉に受付場所に殺到する。受付作業では、避難者に住所や緊急連絡先を記入してもらうが、高齢者の中には自分で記入することができない方もいる。そこでは避難者の声を聞き取りながら記録する役目も必要になるため、スペースを確保しながら受付場所を設置する必要があることにも気づくことができた。

③簡易ベッドの作成：喜多方市の地域防災課職員の指示のもと、簡易ベッドの作成を行った。災害のために喜多方市で準備された段ボール製の簡易ベッドを10台程度作成した。説明書の通りに作成することで2人程度が休養できるベッドになるが、中学生3～4名が作業に当たってもある程度の時間が必要であった。また、プライバシーを確保するための仕切りボードも作成した。

④救急用品の準備：保健室から避難所に必要な救急用品を運び出し、体育館内に簡易医務室を設置する作業を行った。担架や救急箱、保温用の毛布や電源ドラム、スリッパなどを運び出した。学校内の様子を把握していることに加え、重い荷物を運ぶ役目として中学生が担う役割は大きく、中学生が地域の一員として活動できることを体感できた。

⑤避難誘導係：避難者にとって避難所は初

めて生活する空間であり、トイレがどこにあるのかさえわからない。困っている方に声をかけ、案内を行う係として避難誘導係を設定した。普段から学校の諸活動で体育館を使用しているからこそ、聞かれている場所を速やかに説明することができる。避難者が多くなるほど、要望も多種多様になるため、中学生が地域の一員として担う役割は大きい。

⑥受付係：受付では避難者の身元確認作業が行われ、受付係が受付名簿や個人カードの管理を担当した。避難者が高齢の場合、受付名簿の記入も困難である。受付場所が混雑しないように、避難者からの聞き取りを行い、受付名簿への記入補助作業を行った。また、受付周辺が混雑しないように誘導を行ったり、個人カード記入後に検温作業を行ったりと、活動は多岐にわたった。

⑦案内板設置係：避難者は不安な中での生活となる。初めて生活する空間で「どこに何があるのか」「支援物資はいつ届くのか」などの情報も不足しており、それが不安をさらに拡大させる。避難者が必要な情報を入手できるよう、案内板設置係の生徒が活動した。入り口や下足置き場などの案内板の作成や、支援物資の有無などの情報を掲示できる情報共有板などの設置も必要であった。

(3) 防災教育の仕掛け

いざというときに行動できる生徒を育てるためには、実際に経験をさせることが必要である。小集団ごとに役割を与えることで、自分の役割を果たすことに加え、他の集団の活動の様子を目にするとの効果も得られた。既存の教育カリキュラムである「避難訓練」に防災訓練の活動を盛り込むことにより、生徒の実践力を育むことができた。【資料編4～6ページ】

V 生徒の変容の様子

1 防災についてのアンケートから

1年間の取り組みを経て、生徒の「防災・

減災」についての意識の変化の様子を捉るために、7月と12月に「防災についてのアンケート」【資料編7～10ページ】を実施した。顕著な変容の様子は以下の通りである。

《回答評価》

- A 「よく知っている」
- B 「知っている」
- C 「あまり知らない」
- D 「知らない」

〈防災「知識」についての質問〉

Q3 自宅周辺の避難場所を知っているか。

※「知っている」と答えた生徒の割合

7月 26% → 12月 46%(+20P)

Q6 自宅周辺の危険箇所が思いつくか。

※「思いつく」と答えた生徒の割合

7月 55% → 12月 81%(+26P)

上記の2つの質問からも、生徒が「防災・減災」についての知識を深めることができたことがわかる。特に「自宅周辺の避難場所や危険箇所」などは、災害が発生し避難する時に知らなかつたでは済まされない。これらの知識は基本的な知識ではあるが、防災のために重要な知識である。その知識の定着が1年間の指導の成果である。

〈防災についての「意識」の質問〉

Q8 地域の一員としてどのような行動が求められているか。

※A・Bと答えた生徒の割合の合計

7月 55% → 12月 82%(+27P)

Q9 日頃から準備すべきことを知っているか。

※A・Bと答えた生徒の割合の合計

7月 84% → 12月 96%(+12P)

上記の2つの質問からも、生徒が「防災・減災」についての意識を深めることができたことがわかる。特に「地域の一員としてどのような行動が求められるか。」の質問では、27Pの向上が見られた点は大きな成果である。中学生は自分が避難するだけではなく、地域住民を守る一員であることを理解することができたと判断できる。「日頃から準備すべきことを知っているか。」の質問において、Aの生徒の割合が各学年とも減少しているこ

とがわかった。7月の段階で「よく知っている」と答えたものの、防災学習を重ねていく中で自分が準備しておくべき役割が大きいことに気付いたものと考えられる。生徒の防災意識の高まりを感じられる回答であった。

2 防災学習に取り組んだ生徒の感想から

防災学習のまとめとして、1年間の防災学習の感想を記述させた。防災教育に取り組んだ生徒の感想を分析すると「東日本大震災の被害と復興状況について」「地域合同避難訓練から学んだ対応について」「災害発生時に求められる中学生の役割と心構えについて」の3つの観点に分けることができた。以下の記述は生徒の感想の一部である。

- ・浜通りの人々は東日本大震災の後も、震災が発生したときの対応を日ごろから準備していることがわかった。
- ・被災地は時間が経てどんどん復興すると思っていたが、復興はまだまだ先で、完全にもとには戻らないと知った。
- ・地域合同避難訓練では、中学生としてお年寄りや小さな子どもを最優先にしなければならないと改めて感じた。
- ・避難所では私たちにできることがたくさんある。いざという時には自分にできることを探して積極的に活動したい。
- ・自然災害は、いつ、どこで起こるか分からない恐ろしいことなので、日ごろから自分自身でできることをよく考えて準備することが大切だとわかった。
- ・防災について改めて学ぶことができたので、もう一度家族と防災について話し合ってみたいと感じた。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) 生徒アンケートの結果からも、災害が起ったときの対応策や震災の危険性などの知識の高まりが確認できた。

(2) さまざまな講話を聞く中で、災害が発生したときには自分の命を守ることに加えて、地域の一員として命を守ったり、助け合ったりすることが中学生にも求められていることに気付かせることができた。

(3) 合同避難訓練では与えられた役割の中で、自分がとるべき行動を判断しながら、積極的に活動する生徒の姿が見られた。

2 今後の課題

- (1) 地域の高齢者の協力をいただきながら合同避難訓練を実施することにより、今年度以上に地域の一員として果たすべき役割を明確にする必要がある。
- (2) 地域合同避難訓練では1つの役割を経験しただけで他の仕事を体験できなかった。次年度以降は役割をローテーションして複数の仕事を経験させ、3年間で多くの役割を体験する必要がある。
- (3) 各教科における防災学習に関する学習内容を厳選することによって、より多くの教育活動の中で防災学習に取り組めるよう教科横断的に計画する必要がある。

3 おわりに

令和3年2月13日(土)23時08分頃、福島県沖を震源とするマグニチュード7.3の地震が発生し、喜多方市でも震度4を観測した。そこで生徒に緊急アンケートを実施した。「13日の地震を受けて家族と防災や避難について話し合った」生徒の割合は全体の34.9%、「タンスや本棚などの落下物・転倒物を自分の目で確認した」生徒の割合は29.1%であった。この結果から、1年間の防災学習を経て、防災や避難について関心が高まっていると感じられる。一方で、社会の一員として自ら行動に移すことができる生徒はまだ多くないという現状が明確になった。次年度以降も指導を継続し、生徒一人一人の行動力を育成する必要性を感じた。

令和3年度 福島県教職員研究論文



目次（資料編）

◇ 「防災・減災教育」活動の様子

震災復興の現地調査の様子（1学年・いわき市）	2
震災復興の現地調査の様子（2学年・相馬市）	3
地域合同避難訓練の様子	4

◇ 「防災についてのアンケート」の結果

学校全体	7
1学年	8
2学年	9
3学年	10

資料編

喜多方市立第一中学校

震災復興の現地調査（1学年）



○豊間公園（語り部）①

於：いわき市



○豊間公園（語り部）②



○豊間公園（語り部）③



○いわき伝承みらい館①



○いわき伝承みらい館②



○いわき伝承みらい館③



○いわき市地域防災交流センターふれあい館①



○いわき市地域防災交流センターふれあい館②

震災復興の現地調査（2学年）



○防災備蓄倉庫①

於：相馬市



○防災備蓄倉庫②



○防災備蓄倉庫③



○防災備蓄倉庫④



○消防団慰靈碑



○スポーツアリーナ第二体育館（語り部）①



○スポーツアリーナ第二体育館（語り部）②



○磯部メガソーラー

地域合同避難訓練①



○段ボールシート敷き①

於：喜多方市立第一中学校体育館



○段ボールシート敷き②



○段ボールシート敷き③



○段ボールシート敷き④



○受付場所の作成①



○受付場所の作成②



○簡易ベッド（段ボール）の作成①



○簡易ベッド（段ボール）の作成②

地域合同避難訓練②



○簡易ベッド（段ボール）の作成③



○簡易ベッド（段ボール）の作成④



○救急用品の準備①



○救急用品の準備②



○救急用品の準備③



○救急対応所の作成①



○救急対応所の作成②



○受付の様子①

地域合同避難訓練③



○受付の様子②



○受付の様子③



○避難誘導係の様子①



○避難誘導係の様子②



○簡易カッパの作成①



○簡易カッパの作成②



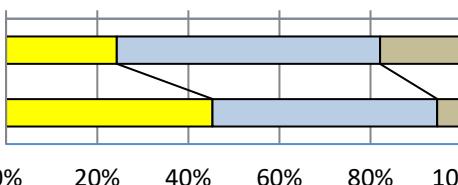
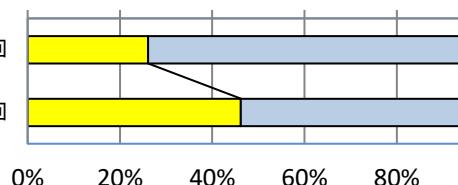
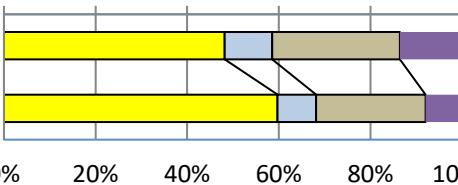
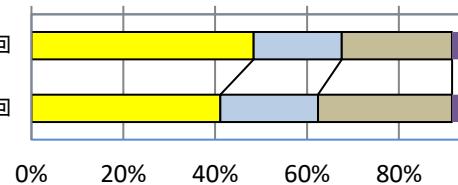
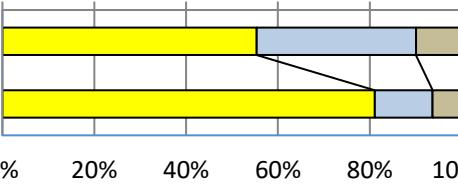
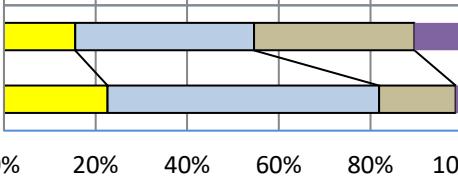
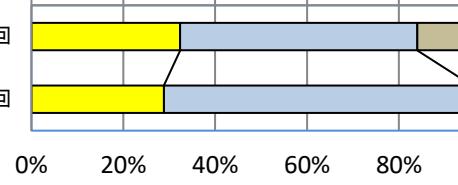
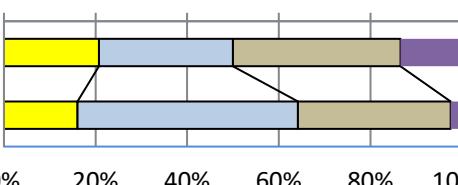
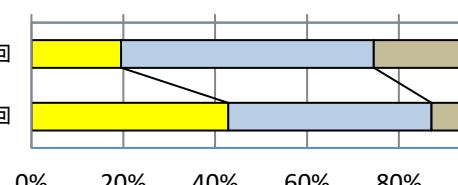
○避難場所（仕切りボード内）の様子



○避難場所の全体像

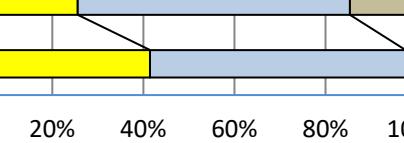
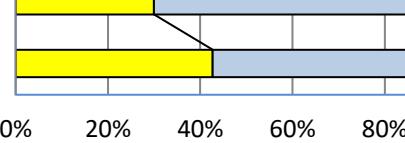
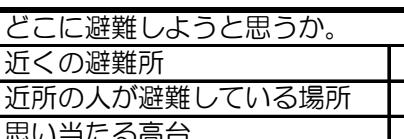
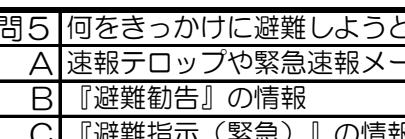
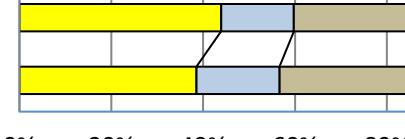
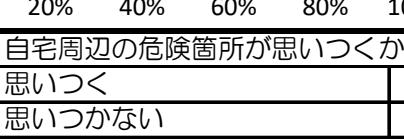
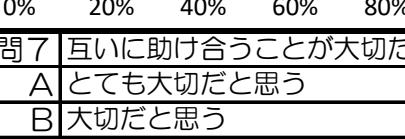
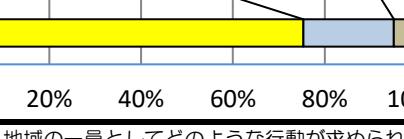
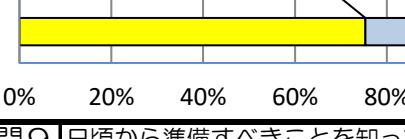
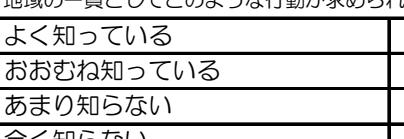
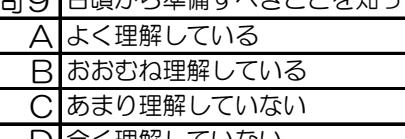
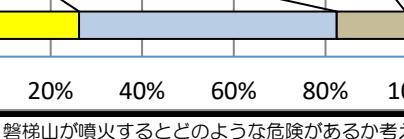
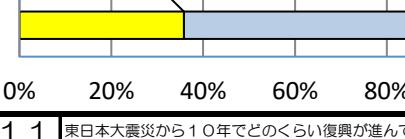
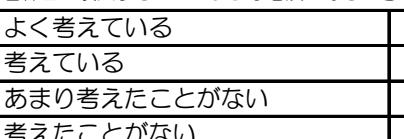
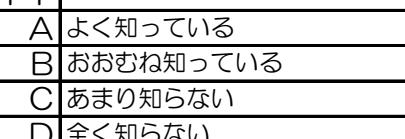
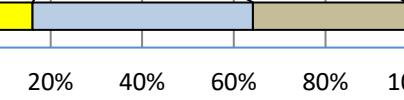
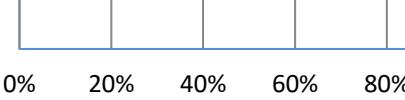
令和2年度 防災についてのアンケート（全体）

左：第1回 右：第2回
(7月) (12月)

設問2 ハザードマップを知っているか。				設問3 自宅周辺の避難場所を知っているか。			
A 知っているし、見たこともある	61	102		A 知っている	64	104	
B 知っているが、見たことはない	145	111		B 知らない	181	121	
C 知らない	45	12					
第1回				第1回			
							
第2回				第2回			
0% 20% 40% 60% 80% 100%				0% 20% 40% 60% 80% 100%			
設問4 どこに避難しようと思うか。				設問5 何をきっかけに避難しようと思うか。			
A 近くの避難所	121	135		A 速報テロップや緊急速報メール	121	93	
B 近所の人が避難している場所	26	19		B 『避難勧告』の情報	48	48	
C 思い当たる高台	70	54		C 『避難指示（緊急）』の情報	60	66	
D 自宅の2階	34	18		D 近所の人が避難を始めたとき	10	5	
				E 近隣の浸水が始まったとき	9	13	
				F 敷地内への浸水が始まったとき	2	1	
第1回				第1回			
							
第2回				第2回			
0% 20% 40% 60% 80% 100%				0% 20% 40% 60% 80% 100%			
設問6 自宅周辺の危険箇所が思いつくか。				設問7 互いに助け合うことが大切だと思うか。			
A 思いつく	139	180		A とても大切なと思う	187	163	
B 思いつかない	87	28		B 大切だと思う	60	57	
C 危険な箇所はない	25	14		C あまり大切なと思わない	3	1	
				D 全く大切なと思わない	0	1	
第1回				第1回			
							
第2回				第2回			
0% 20% 40% 60% 80% 100%				0% 20% 40% 60% 80% 100%			
設問8 地域の一員としてどのような行動が求められているか。				設問9 曜日から準備すべきことを知っているか。			
A よく知っている	39	50		A よく理解している	81	64	
B おおむね知っている	98	131		B おおむね理解している	129	149	
C あまり知らない	88	37		C あまり理解していない	37	8	
D 全く知らない	26	3		D 全く理解していない	3	1	
第1回				第1回			
							
第2回				第2回			
0% 20% 40% 60% 80% 100%				0% 20% 40% 60% 80% 100%			
設問1〇 磐梯山が噴火するなどの危険があるか考へているか。				設問11 東日本大震災から10年でどのくらい復興が進んでいるか知っているか。			
A よく考へている	17	13		A よく知っている	33	60	
B 考えている	24	39		B おおむね知っている	93	62	
C あまり考へたことがない	30	27		C あまり知らない	37	16	
D 考えたことがない	11	2		D 全く知らない	6	2	
第1回				第1回			
							
第2回				第2回			
0% 20% 40% 60% 80% 100%				0% 20% 40% 60% 80% 100%			

令和2年度 防災についてのアンケート（3学年）

左：第1回 右：第2回
(7月) (12月)

設問2	ハザードマップを知っているか。	A 知っているし、見たことがある	21	34	設問3	自宅周辺の避難場所を知っているか。	A 知っている	24	35
		B 知っているが、見たことはない	49	46		B 知らない		56	47
		C 知らない	12	2					
第1回		A (yellow)			第1回		A (yellow)		
第2回		B (light blue)			第2回		B (light blue)		
	0% 20% 40% 60% 80% 100%					0% 20% 40% 60% 80% 100%			
設問4	どこに避難しようと思うか。	A 近くの避難所	40	50	設問5	何をきっかけに避難しようと思うか。	A 速報テロップや緊急速報メール	36	32
		B 近所の人が避難している場所	8	5		B 『避難勧告』の情報		13	15
		C 思い当たる高台	21	18		C 『避難指示（緊急）』の情報		23	26
		D 自宅の2階	13	10		D 近所の人が避難を始めたとき		5	2
						E 近隣の浸水が始まったとき		4	7
						F 敷地内への浸水が始まったとき		1	1
第1回		A (yellow)			第1回		A (yellow)		
第2回		B (light blue)			第2回		C (brown)		
	0% 20% 40% 60% 80% 100%					0% 20% 40% 60% 80% 100%			
設問6	自宅周辺の危険箇所が思いつくか。	A 思いつく	42	61	設問7	互いに助け合うことが大切だと思うか。	A とても大切な思う	54	61
		B 思いつかない	32	16		B 大切だと思う		27	19
		C 危険な箇所はない	8	4		C あまり大切な思わない		1	1
						D 全く大切な思わない		0	0
第1回		A (yellow)			第1回		A (yellow)		
第2回		B (light blue)			第2回		C (brown)		
	0% 20% 40% 60% 80% 100%					0% 20% 40% 60% 80% 100%			
設問8	地域の一員としてどのような行動が求められているか。	A よく知っている	12	21	設問9	日頃から準備すべきことを知っているか。	A よく理解している	23	29
		B おおむね知っている	27	45		B おおむね理解している		41	50
		C あまり知らない	36	12		C あまり理解していない		18	1
		D 全く知らない	7	2		D 全く理解していない		0	1
第1回		A (yellow)			第1回		A (yellow)		
第2回		B (light blue)			第2回		C (brown)		
	0% 20% 40% 60% 80% 100%					0% 20% 40% 60% 80% 100%			
設問10	磐梯山が噴火するとどのような危険があるか考えているか。	A よく考えている	17	13	設問11	東日本大震災から10年でどのくらい復興が進んでいるか知っているか。	A よく知っている		
		B 考えている	24	39		B おおむね知っている			
		C あまり考えたことがない	30	27		C あまり知らない			
		D 考えたことがない	11	2		D 全く知らない			
第1回		A (yellow)			第1回		A (yellow)		
第2回		B (light blue)			第2回		C (brown)		
	0% 20% 40% 60% 80% 100%					0% 20% 40% 60% 80% 100%			

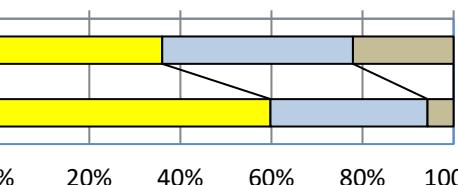
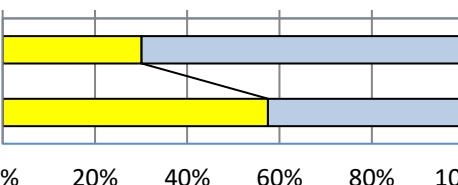
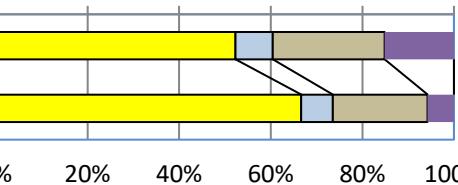
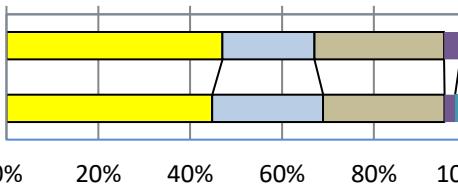
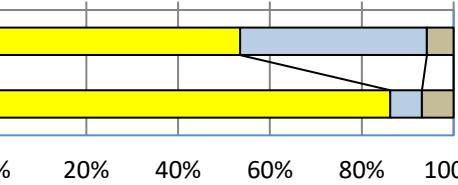
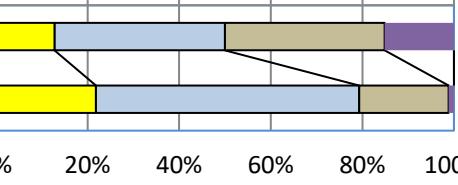
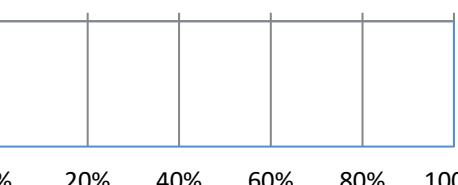
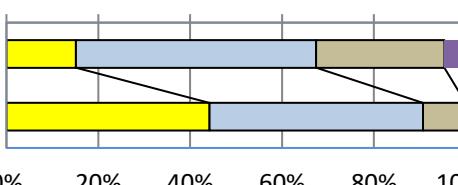
令和2年度 防災についてのアンケート（2学年）

左：第1回 右：第2回
(7月) (12月)

設問2 ハザードマップを知っているか。		設問3 自宅周辺の避難場所を知っているか。																																					
A 知っているし、見たこともある	9 16	A 知っている	15 19																																				
B 知っているが、見たことはない	60 35	B 知らない	67 37																																				
C 知らない	14 5																																						
<table border="1"> <thead> <tr> <th>回答</th> <th>第1回</th> <th>第2回</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>A</td> <td>約10%</td> <td>約30%</td> </tr> <tr> <td>B</td> <td>約80%</td> <td>約70%</td> </tr> <tr> <td>C</td> <td>約10%</td> <td>約10%</td> </tr> </tbody> </table>		回答	第1回	第2回	A	約10%	約30%	B	約80%	約70%	C	約10%	約10%	<table border="1"> <thead> <tr> <th>回答</th> <th>第1回</th> <th>第2回</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>A</td> <td>約20%</td> <td>約35%</td> </tr> <tr> <td>B</td> <td>約80%</td> <td>約65%</td> </tr> </tbody> </table>		回答	第1回	第2回	A	約20%	約35%	B	約80%	約65%															
回答	第1回	第2回																																					
A	約10%	約30%																																					
B	約80%	約70%																																					
C	約10%	約10%																																					
回答	第1回	第2回																																					
A	約20%	約35%																																					
B	約80%	約65%																																					
設問4 どこに避難しようと思うか。		設問5 何をきっかけに避難しようと思うか。																																					
A 近くの避難所	36 27	A 速報テロップや緊急速報メール	45 22																																				
B 近所の人が避難している場所	11 8	B 『避難勧告』の情報	18 12																																				
C 思い当たる高台	28 18	C 『避難指示（緊急）』の情報	13 17																																				
D 自宅の2階	8 3	D 近所の人が避難を始めたとき	2 1																																				
		E 近隣の浸水が始まったとき	5 4																																				
		F 敷地内への浸水が始まったとき	0 0																																				
<table border="1"> <thead> <tr> <th>回答</th> <th>第1回</th> <th>第2回</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>A</td> <td>約45%</td> <td>約65%</td> </tr> <tr> <td>B</td> <td>約10%</td> <td>約15%</td> </tr> <tr> <td>C</td> <td>約35%</td> <td>約30%</td> </tr> <tr> <td>D</td> <td>約10%</td> <td>約5%</td> </tr> </tbody> </table>		回答	第1回	第2回	A	約45%	約65%	B	約10%	約15%	C	約35%	約30%	D	約10%	約5%	<table border="1"> <thead> <tr> <th>回答</th> <th>第1回</th> <th>第2回</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>A</td> <td>約55%</td> <td>約40%</td> </tr> <tr> <td>B</td> <td>約20%</td> <td>約30%</td> </tr> <tr> <td>C</td> <td>約15%</td> <td>約25%</td> </tr> <tr> <td>D</td> <td>約5%</td> <td>約5%</td> </tr> <tr> <td>E</td> <td>0</td> <td>約5%</td> </tr> <tr> <td>F</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> </tbody> </table>		回答	第1回	第2回	A	約55%	約40%	B	約20%	約30%	C	約15%	約25%	D	約5%	約5%	E	0	約5%	F	0	0
回答	第1回	第2回																																					
A	約45%	約65%																																					
B	約10%	約15%																																					
C	約35%	約30%																																					
D	約10%	約5%																																					
回答	第1回	第2回																																					
A	約55%	約40%																																					
B	約20%	約30%																																					
C	約15%	約25%																																					
D	約5%	約5%																																					
E	0	約5%																																					
F	0	0																																					
設問6 自宅周辺の危険箇所が思いつくか。		設問7 互いに助け合うことが大切だと思うか。																																					
A 思いつく	51 44	A とても大切なと思う	69 38																																				
B 思いつかない	20 6	B 大切だと思う	12 16																																				
C 危険な箇所はない	12 4	C あまり大切なと思わない	1 0																																				
		D 全く大切なと思わない	0 0																																				
<table border="1"> <thead> <tr> <th>回答</th> <th>第1回</th> <th>第2回</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>A</td> <td>約60%</td> <td>約85%</td> </tr> <tr> <td>B</td> <td>約10%</td> <td>約5%</td> </tr> <tr> <td>C</td> <td>約20%</td> <td>約10%</td> </tr> </tbody> </table>		回答	第1回	第2回	A	約60%	約85%	B	約10%	約5%	C	約20%	約10%	<table border="1"> <thead> <tr> <th>回答</th> <th>第1回</th> <th>第2回</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>A</td> <td>約85%</td> <td>約70%</td> </tr> <tr> <td>B</td> <td>約10%</td> <td>約30%</td> </tr> <tr> <td>C</td> <td>0</td> <td>約10%</td> </tr> <tr> <td>D</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> </tbody> </table>		回答	第1回	第2回	A	約85%	約70%	B	約10%	約30%	C	0	約10%	D	0	0									
回答	第1回	第2回																																					
A	約60%	約85%																																					
B	約10%	約5%																																					
C	約20%	約10%																																					
回答	第1回	第2回																																					
A	約85%	約70%																																					
B	約10%	約30%																																					
C	0	約10%																																					
D	0	0																																					
設問8 地域の一員としてどのような行動が求められているか。		設問9 曜頃から準備すべきことを知っているか。																																					
A よく知っている	16 10	A よく理解している	31 14																																				
B おおむね知っている	39 36	B おおむね理解している	41 35																																				
C あまり知らない	22 8	C あまり理解していない	10 5																																				
D 全く知らない	6 0	D 全く理解していない	0 0																																				
<table border="1"> <thead> <tr> <th>回答</th> <th>第1回</th> <th>第2回</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>A</td> <td>約40%</td> <td>約80%</td> </tr> <tr> <td>B</td> <td>約30%</td> <td>約10%</td> </tr> <tr> <td>C</td> <td>約20%</td> <td>約10%</td> </tr> </tbody> </table>		回答	第1回	第2回	A	約40%	約80%	B	約30%	約10%	C	約20%	約10%	<table border="1"> <thead> <tr> <th>回答</th> <th>第1回</th> <th>第2回</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>A</td> <td>約85%</td> <td>約90%</td> </tr> <tr> <td>B</td> <td>約10%</td> <td>約5%</td> </tr> <tr> <td>C</td> <td>0</td> <td>約5%</td> </tr> <tr> <td>D</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> </tbody> </table>		回答	第1回	第2回	A	約85%	約90%	B	約10%	約5%	C	0	約5%	D	0	0									
回答	第1回	第2回																																					
A	約40%	約80%																																					
B	約30%	約10%																																					
C	約20%	約10%																																					
回答	第1回	第2回																																					
A	約85%	約90%																																					
B	約10%	約5%																																					
C	0	約5%																																					
D	0	0																																					
設問10 磐梯山が噴火するなどの危険があるか考へているか。		設問11 東日本大震災から10年でどのくらい復興が進んでいるか知っているか。																																					
A よく考へている		A よく知っている	20 22																																				
B 考えている		B おおむね知っている	48 22																																				
C あまり考へたことがない		C あまり知らない	13 8																																				
D 考えたことがない		D 全く知らない	2 2																																				
<table border="1"> <thead> <tr> <th>回答</th> <th>第1回</th> <th>第2回</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>A</td> <td>約20%</td> <td>約10%</td> </tr> <tr> <td>B</td> <td>約30%</td> <td>約50%</td> </tr> <tr> <td>C</td> <td>約30%</td> <td>約10%</td> </tr> <tr> <td>D</td> <td>約20%</td> <td>約10%</td> </tr> </tbody> </table>		回答	第1回	第2回	A	約20%	約10%	B	約30%	約50%	C	約30%	約10%	D	約20%	約10%	<table border="1"> <thead> <tr> <th>回答</th> <th>第1回</th> <th>第2回</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>A</td> <td>約40%</td> <td>約80%</td> </tr> <tr> <td>B</td> <td>約30%</td> <td>約10%</td> </tr> <tr> <td>C</td> <td>約10%</td> <td>約5%</td> </tr> <tr> <td>D</td> <td>約10%</td> <td>約5%</td> </tr> </tbody> </table>		回答	第1回	第2回	A	約40%	約80%	B	約30%	約10%	C	約10%	約5%	D	約10%	約5%						
回答	第1回	第2回																																					
A	約20%	約10%																																					
B	約30%	約50%																																					
C	約30%	約10%																																					
D	約20%	約10%																																					
回答	第1回	第2回																																					
A	約40%	約80%																																					
B	約30%	約10%																																					
C	約10%	約5%																																					
D	約10%	約5%																																					

令和2年度 防災についてのアンケート（1学年）

左：第1回 右：第2回
(7月) (12月)

設問2 ハザードマップを知っているか。			設問3 自宅周辺の避難場所を知っているか。		
A 知っているし、見たこともある	31	52	A 知っている	25	50
B 知っているが、見たことはない	36	30	B 知らない	58	37
C 知らない	19	5			
					
設問4 どこに避難しようと思うか。			設問5 何をきっかけに避難しようと思うか。		
A 近くの避難所	45	58	A 速報テロップや緊急速報メール	40	39
B 近所の人が避難している場所	7	6	B 『避難勧告』の情報	17	21
C 思い当たる高台	21	18	C 『避難指示（緊急）』の情報	24	23
D 自宅の2階	13	5	D 近所の人が避難を始めたとき	3	2
			E 近隣の浸水が始まったとき	0	2
			F 敷地内への浸水が始まったとき	1	0
					
設問6 自宅周辺の危険箇所が思いつくか。			設問7 互いに助け合うことが大切だと思うか。		
A 思いつく	46	75	A とても大切なと思う	64	64
B 思いつかない	35	6	B 大切だと思う	21	22
C 危険な箇所はない	5	6	C あまり大切なと思わない	1	0
			D 全く大切なと思わない	0	1
					
設問8 地域の一員としてどのような行動が求められているか。			設問9 曜頃から準備すべきことを知っているか。		
A よく知っている	11	19	A よく理解している	27	21
B おおむね知っている	32	50	B おおむね理解している	47	64
C あまり知らない	30	17	C あまり理解していない	9	2
D 全く知らない	13	1	D 全く理解していない	3	0
					
設問10 磐梯山が噴火するなどの危険があるか考へているか。			設問11 東日本大震災から10年でどのくらい復興が進んでいるか知っているか。		
A よく考へている			A よく知っている	13	38
B 考えている			B おおむね知っている	45	40
C あまり考へたことがない			C あまり知らない	24	8
D 考えたことがない			D 全く知らない	4	0
					

研究主題

訪問教育における学びの充実をめざして
～病院訪問学級における自立活動と各教科を関連付けた授業実践～

福島県立平支援学校 教諭 鈴木のぞみ



I 研究構想

1 本県の訪問教育について

訪問教育は、障がいのため通学して教育を受けることが困難な児童又は生徒に対して、家庭等へ教員を派遣して行う教育である。「対象児童生徒の全人的な発達を促し、障がいによる学習上又は生活上の困難を克服することを支援するもの」とされている。

本県の訪問教育は、昭和49年に県北、県中、いわき教育事務所において就学猶予及び免除中の学齢者に対して「在宅心身障害児巡回訪問指導」を実施したのが始まりである。対象児のほとんどが肢体不自由と他の障がいを併せ有する重複障がい児であった。

訪問教育には、家庭を訪問して行う「家庭訪問教育」と施設や医療機関を訪問して行う「病院訪問教育」の2つの形態がある。どちらの形態においても、教育課程の編成は、「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領」及び「特別支援学校高等部学習指導要領」を基準とするものとしている。

本県の特別支援教育は、共生社会の形成に向けて、「地域で共に学び、共に生きる教育」の推進を基本理念として、地域の学校と地域の関係機関による連携した支援の下、障がいのある児童生徒一人一人のニーズに応じた教育の実現を目指し取り組んでいる。

その中で訪問教育においても、児童生徒一人一人のニーズに応じたより質の高い学びの保障、本人らしいより豊かな将来の生活を見据え

た学びをつくることが求められている。

そのために、児童生徒を中心とした医療・教育・福祉・家庭等との連携の充実を図っていくことがより一層重要である。

さらに、訪問教育を受ける児童生徒は生活経験が限られている場合が多い。そのため、家庭や病院等における児童生徒の生活と学習とをつながりのあるものにしていく必要がある。児童生徒が出会う「人・もの・出来事」との関わり合いを深めながら「ことば」を育み、習得状況や興味関心等に合わせた一人一人に応じた学習を積み上げていくことが求められている。その一方で、人との関わり合いを拡げ、体験的な活動等を通した学び合いの促進も求められている。

2 本校の病院訪問教育の現状

平成5年度より、平養護学校翠ヶ丘分校が国立療養所翠ヶ丘病院訪問学級となったことで本校の病院訪問教育が始まった。

現在は、独立行政法人国立病院機構いわき病院に長期入院中の児童を対象にして行われている。病院訪問学級は、小学部に1学級(2名)編成されており、小学部6年男子1名、5年女子1名が在籍している。1単位時間を45分として、1日あたり2単位時間、週5日の授業を実施している。

3 主題設定の理由

病院訪問学級の児童は医療的な配慮の必要

性が高く、「重複障害者のうち障害の状態により特に必要がある場合」（特別支援学校小学部・中学部学習指導要領第1章総則の第8節の4）として、「自立活動を主とした教育課程」で学んでいる。

しかし、障がいの状態が重く、「自立活動を主とした教育課程」で学ぶ状況であっても、調和的な発達を促すため各教科の視点や生活年齢を踏まえた関わりを大切にする必要がある。

そこで、自立活動と各教科等を関連付けることで効果的な指導が実現するのではないかと考えた。自立活動は、個々の課題、指導目標に向けた指導である。また、特別支援学校の教科は各教科の指導目標の達成に向けて、自立活動の指導を配慮や手立てとして活かしながら学ぶものである。これらを関連付けて、各教科等の視点を踏まえた単元構想に基づき、自立活動の個々の指導目標（短期目標）の達成に向けた指導がなされることで、児童の個別の目標達成に迫り、その成長がより確かなものになると見える。また、人と関わり合いながら自分の願いを実現する力が育まれることで、本人らしいより豊かな生活につながるのではないかと考え、本主題を設定した。

4 研究仮説

以下に示す4つの視点をもとに、短期目標の達成を目指し、自立活動と各教科等を関連付けた授業実践に取り組むことにした。

〈視点1〉

児童の気付きを言語化するやりとり

探索活動における児童の気付きを言語化するやりとりを通して、生活に使える「ことば」を育む。

・児童は生活の中での探索活動を通して、病棟内の人や物、出来事に出会い、それらと関わり合う中で「気付き」が生まれる。その「気付き」

に共感し「学びの芽」として捉えて、言語化することで、児童の生活に使える「ことば」の習得につなげたい。

〈視点2〉

学習したことばを生かしたやりとり

探索活動において学習したことばを生かしてやりとりすることで、コミュニケーションの基礎を育む。

・探索活動において、児童の気付きに寄り添いながら、学習したことばを生かしてやりとりを重ねる。その中で、児童の要求の拡大を促し、人と関わり合いながら課題（願い）を解決する（叶える）経験を積み重ね、コミュニケーションの基礎となる力を育みたい。

〈視点3〉

各教科を関連付けた思考を促すやりとり

絵本を活用した学習の中で、各教科の要素と関連付けたやりとりを通して、思考・判断・表現を促し、各教科の見方・考え方を学ぶ。

・児童の気付きや興味関心、季節に関わることなど、児童の生活に即した絵本を選び、活用する。絵本の読み聞かせをしたり、絵本のストーリーに沿った遊びを展開させたりして学ぶ単元を構想することで、自立活動の指導と各教科の目標や内容を関連付けた教科等横断的な学習を展開する。

・教材や問い合わせの言葉、言葉掛けを工夫することで、これまでに学習したことばを生かして児童の思考を促し、各教科の見方・考え方を学び、働かせることができるようとする。

〈視点4〉

教師を仲介とした友達とのやりとり

絵本を活用した学習の中で、学び合いの場を設定し、教師を仲介とした友達とのやりとりを通して学びを深める。

- ・友達と関わり合う経験が少ないことに配慮し、同病院訪問学級児童（B児）との関わり合い、学び合いを段階的に進めるようとする。
- ・学び合いの場を設定することで、友達が学習に取り組む様子を見たり、教師を仲介として友達の考えを知ったり、一緒に楽しく遊んだりする中で、学習を深めることができるようとする。

II 研究の実際と考察

対象児童を病院訪問学級小学部5年女児（以下A児）とする。

A児の実態

- ・分節異常骨異形成症、座位・起立性保持困難、知的障がい、人工呼吸器使用

【生活状況】

- ・着替え、排泄…全面介助
- ・食事…経管栄養
- ・姿勢…常に仰臥位
- ・移動…車椅子への移乗、移動が可能
(令和2年7月末～)
- ・運動…首を自分で動かすことができる。首以外を自分で動かすことは困難。

【コミュニケーション】

- ・気管切開、人工呼吸器を装着しているが発声することができる。声量は少ない。
- ・「いや」「こわい」「もう1回」等いくつかの音声言語と視線、表情でやりとりをする。
- ・教師の言葉を模倣(自然模倣)する姿がある。

【その他】

- ・車椅子への移乗、体位変換等を教師が行うことはできない。看護師に依頼する。
- ・学習中に教師が手や腕の動きを支援する場合も骨折等への配慮が必要である。
- ・適宜バイタルチェック (SpO2、心拍)、看護

師に痰吸引等の処置を依頼するなど、体調に十分配慮しながら学習を進める必要がある。

A児の指導目標（短期目標）

- ①見る・聞く・触るなどの様々な活動を体験し、楽しさやうれしさを感じ、その気持ちを表現することができる。
- ②活動の中で、教師の言葉を繰り返して言ったり、挨拶や好きな物の名前を言ったりして言語のやりとりができる。
- ③歌いたい曲や読んでもらいたい本を視線や表情で教師に伝えることができる。

上記の個別の目標（短期目標）の達成に迫るために、仮説〈視点1～4〉に基づいた〈実践1～4〉に取り組んだ。

〈実践1〉

児童の気付きを言語化するやりとり

事例：散歩

A児（以下A）：「車椅子！」「お散歩！」
教師（以下T）

：「看護師さんにお願いしようね。」

（看護師により車椅子に移乗する。）

A：「B！」

T：「B君に会いたいね。」

「B君どこかな？」

（A児の病室を出る。廊下を進み最初の曲がり角。）

T：「B君のお部屋、どっち？」

T：（A児の右方向を指差しする。）

A：（Tの指を追視し、右方向を見る。）

T：「右かな？」

A：（右方向をじっと見つめる。）

T：（A児の左方向を指差しする。）

A：（Tの指を追視し、左方向を見る。）

T：「左かな？」

A : (Tをじっと見る。)

T : (A児と視線を合わせて、右方向を指差しながら)

「B君のお部屋は右だよ。」

「右に曲がります。」

T : (B児の病室前で止まり)

「B君のお部屋だよ。」

A : (病室を覗く。B児の姿を見つけてにこやかな表情になる。)

以上のようなやりとりを繰り返し行った。

その後、以下の姿が見られるようになった。

- ・教師が指差しながら、「B君の部屋はどっち？右？左？」と問い合わせると、A児は視線で右方向を選ぶ。
- ・教師の言葉を模倣し、「右」や「こっち！」と視線と言葉で応えようとする。
- ・B児の病室前で教師が「誰の部屋？」と問い合わせると「B！」と答える。
- ・病棟内の探索活動の中で、教師が「どっちに行きたい？」と問い合わせると、行きたい方向を視線で伝える。

考察

- ・空間における方向の違い（左右）を理解し、その名称にも触れることができた。また、A児は、「ことば」（視線や音声言語）で表現し、生活の中で学習したことを生かすことができるようになった。
- ・A児の興味関心や気付きはA児の「学びたいこと」と捉えると、その気付きに寄り添い学習につなげることで、子どもの「学びたいこと」と教師の「学ばせたいこと」との一致を図ることができる。その結果、教師の問い合わせに対して、自分から視線や表情で答えたり、教師の言葉を模倣したりするなど、A児の主体的に学ぶ姿につながったと考える。

〈実践2〉

学習した「ことば」を生かしたやりとり

事例：ドライヤー遊び

T : (A児の病室に入室)

A : 「ドライヤー！」

T : 「ドライヤーで遊びたいの？スイッチ、オン？」

A : 「はい。」

（頭を揺らしてにこやかな表情。）

T : 「でも、先生、ドライヤーないよ。」

A : (強い口調で) 「ドライヤー！！」

T : (かごの中の教材を全てA児のベッド上に出して見せて)

「ドライヤー、ある？ない？」

A : 「ない…。」(困ったような表情。)

T : (児童指導員（以下：J）さんの顔写真カードを見せて)

「Jさん、ドライヤー、あるかな？」

A : (Jさんの顔写真カードを見る。)

T : (ホワイトボードに顔写真カードを貼って) 「Jさん。」

(ドライヤーを描いて) 「ドライヤー。」

(吹き出しを書いて) 「かして。」

(Jさんに向けた矢印を書く。)

A : (ホワイトボードをじっと見る。)



写真1 上記のやりとりで使用した
ホワイトボード

T : 「Aちゃんお話ししてね。『Jさん、ドライヤー、かして。』」
 (車椅子に移乗して病棟内を移動し、Jさんを探す。)

T : 「Jさん、どこかな。」

A : 「どこかなあ？」

T : 「Jさん、見つけた！」

A : 「見つけた！」(Jさんの顔を見る。)

T : 「Aちゃん、お話しどうぞ。」

A : 「…。」(考える表情で黙っている。)

T・J : (A児が話し始めるのを待つ。)
 (ホワイトボードを提示する。)

A : 「ドライヤー！おねがい！」

J : 「わかったよ。いいよ。」
 (3人で浴室に移動する。)

A : (頭を揺らしてにこやかな表情。)

J : 「ドライヤー、どうぞ。」

A : (ドライヤーを受け取る。)
 「…。」(にこにこ笑う。)

T : 「ありがとう。」

A : 「ありがとう！」(にこにこ笑う。)

考察

- ・物の有無の理解とそれを表す言葉（「ある」「ない」）については既習事項である。A児は身に付けた力を生かすことで状況の把握をすることができた。
- ・写真カード（顔写真）やイラスト、矢印を手掛かりにして教師とやりとりすることで、伝える相手を意識し、伝え方を知ることができた。その結果、A児の自分の言葉で相手に思いを伝える姿、教師と関わり合いながら課題（願い）を解決する（叶える）姿につながったと考える。

以下は、その後のドライヤーを使って遊ぶ場面でのやりとりである。



写真2 ドライヤー遊び

T : (借りたドライヤーをもって)
 「3、2、1、スイッチ、オン！」
 (ドライヤー音)
 (温風がA児の顔に当たる。)

A : (口を開けて笑う。にこやかな表情。)

T : (ドライヤーを止める。)
 (温風が止まる。教師の顔をじっと見る。)

T : 「風、止まちやった。」

A : 「もう1回！」

T : 「いいよ。ドライヤー、もう1回ね。
 3、2、1、スイッチ…」

A : 「オン！」
 (ドライヤー音。温風が再びA児の顔に当たる。にこやかな表情。)

T : 「風、あったかいね。」

A : 「あったかい！」

T : 「あったかいねえ。」
 (ドライヤーを止める。)

A : 「止まちやったあ。もう1回！」
 ※この遊びを繰り返す。

T : (冷風に替えて、A児の顔に当てる。)

A : 「…。」(驚いた表情で教師の顔を見る。)

T : 「風、冷たい。」

A : 「冷たい！」(にこやかな表情。)

T : 「冷たいねえ。」

考察

- ・ドライヤー遊びの中で、A児は「風」に興味をもち、「風の違い（温風・冷風）」に気付くことができた。これを「学びの芽」として捉えて生活科の目標や内容と関連付けながら今後の学習につなげができると考える。
- ・「あったかい」「冷たい」と教師の言葉を聞いて自然模倣する姿が見られた。A児自身が、体験したことと教師による言語化を結び付けることで「ことば」（音声言語）を学ぶ姿であると捉えている。
- ・A児は長時間、屋外に出ることは健康上の理由から制限されている。そのため自然の風を感じ

じる機会はとても少ない。そのため「風」という存在を意識し、その名称も理解している様子はない。今後、体調等に十分配慮しながら、屋外（病棟のテラス）で自然の風を感じる体験的な活動を学習に取り入れることができるように、病棟の看護師や児童指導員と連携を図っていきたい。

〈実践3〉

各教科を関連付けた思考を促すやりとり

○絵本の活用について

資料1に示すように、これまで自立活動の学習（単元「絵本で遊ぼう」）において、絵本を活用して学習を展開してきた。児童の気付きや興味関心に関連した内容の絵本や学習した「ことば」が出てくる絵本、季節にまつわる事柄が題材となっている絵本など児童の生活に合った絵本を選び活用してきた。

○単元「絵本で遊ぼう～『さつまのおいも』～」について

本単元は、資料2に示すように、絵本を読み聞かせたり、絵本のストーリーに沿った遊びを展開させたりして学ぶ単元構想とした。

単元の目標は以下の通りである。

- (1) 絵本の読み聞かせを通して、絵本の中の言葉を模倣して言ったり、季節の歌に親しんだりすることができる。
- (2) いもほり遊びや制作を通して、教師や友達と関わり合いながら大きさや量の違いに気付き、言葉で表現することができる。
- (3) 絵本の読み聞かせやいもほり遊びをすることが分かって、教師や友達と関わり合いながら遊ぼうとする。

A児が毎日の生活において、教師や身近な人と関わり合う中で、言葉や数に触れ、歌や制作

を楽しみ、車椅子に移乗し動きに親しむことは各教科の見方・考え方を学び、それらの見方・考え方を働かせることにつながると考える。

本単元では、生活、国語、算数、音楽、図画工作、体育の各教科の目標・内容と関連付けたやりとりを通して、これまでに学習した「ことば」を生かして、A児の思考・判断・表現を促し、A児が自ら単元の目標に迫ることができるようとする。

①量の違いへの気付きを促すやりとり

- ・絵本のストーリーに沿った遊び「いもほり遊び」に取り組む場面
- ・準備物…絵本『さつまのおいも』、さつまいも（さつまいも：フェルト、つる：紐）、段ボール箱（畑に見立てたもの）

※絵本の読み聞かせが終わり、いもほり遊びを始める。

T：「Aちゃんも『うんしょ、とこしょ』やってみる？」

A：「はい！」（にこやかな表情。）

T：（絵本の挿絵を見せて）「『おいものはたけにこどもたちがやってきました。』 Aちゃんもやってきました。」

A：（頭を揺らして、にこやかな表情。）

T：「さあ、つなひきです。」

A：（頭の揺れが止まる。教師の顔を見る。）

T：（A児にさつまいものつるを見せて）

「一緒に『うんしょ、とこしょ』するよ。」「おいも、引っ張るよ。つるをもって…。」

（A児の右手の親指と人差し指の間につるを挟むようにして持たせる。教師は手添えする。）

A：（A児の右手に視線が動く。見る。）

T：「さあ、いくよお？ 3、2、1、うんしょ、とこしょ！ うんしょ、とこしょ！」

A：「すっぽ～ん！ ぬけたあ！」

(さつまいもが2本抜ける。)

T：(抜けたさつまいもをA児に見せる。)

A：「…。」(黙っている。「あれ？」というような困ったような表情。笑みはない。じっとさつまいもを見ている。)

T：「あれ？」

A：(教師の顔をじっと見る。)

T：(絵本の挿絵『ほうさくだ ほうさくだ』の場面を見せる。)

A：(絵本の挿絵に視線が動く。じっと見つめる。考えるような表情。)

T：(抜いた2本のさつまいもを見せる。)

A：(A児の視線がさつまいもに動く。)

T：「あれえ？」

A：(絵本の挿絵と2本のさつまいもで視線が往復する。表情が変わり始める。にやりと笑って)

「あれえ？」



写真4 絵本の挿絵

写真3 さつまいもを抜いたA児

考察

- ・絵本のストーリーでは「ほうさくだ ほうさくだ」の場面の挿絵の通り、たくさんのさつまいもが抜ける。しかし、「いもほり遊び」で抜けるさつまいもは2本とした。教材を工夫し、遊びに仕掛けをすることでA児は量の違いに気付き、表情で表現することができた。

- ・A児の表情や視線、絵本の挿絵とA児が抜いたさつまいもを見比べる様子から、「あれ？おかしいな。」「なにか、ちがうな。」「やっぱり、ちがう！」というA児の思考の流れを妨げないように捉えて、「あれ？」という言葉で言語化することで量の違いへの気付きをより確かな

ものにすることができたと考える。

②量の違いの表現を促すやりとり

※①のやりとりからの続き

T：(抜いた2本のさつまいもを見せて)

「Aちゃんのおいも、いくつ？」

A：(抜いた2本のさつまいもを見る。)

T：(さつまいもを指差しながら)

「数えるよ。1 (いち) …。」

A：「2 (に) !」

T：「1、2、終わり。少ない。」

A：(じっと2本のさつまいもを見る。)

T：(絵本の挿絵『ほうさくだ ほうさくだ』の場面を見せる。)

A：(絵本の挿絵に視線を移して見る。)

T：「数えるよ。せえの、1、2、3、4… 13。いっぱい。」

A：(じっと絵本の挿絵を見つめる。)

T：(さつまいもと絵本の挿絵を交互に見せて)

「Aちゃんのおいも、1、2、少ない！」

「絵本のおいも、いっぱい！」

A：(にやりと笑い始める。)

T：「Aちゃんのおいもは？ 少ない？ いっぱい？」

A：(さつまいもに視線が動いて)

「少ない…。」

(はにかむような表情。)

T：「少ないねえ。」

A：(絵本の挿絵に視線を動かして)

「いっぱい！」(にこやかな表情。)

T：「いっぱいだね。」

A：「いっぱい！ いっぱい！」

(絵本の挿絵を見て繰り返し言う。)

T：「おいも、いっぱい。いいね。」

「Aちゃん。おいも、いっぱい、ほしいの？」

A：「はい！」(頭を揺らしにこやかな表情。)

考察

・A児は、教師や看護師など身近な人の関わり合いの中で1から10まで数唱する経験がある。このような「いくつ?」「数えるよ。」といった生活の中で親しんでいる数に触れる問い合わせや言葉掛けをすることで、量のイメージと量を表す言葉（「少ない」「いっぱい」）を結び付けることができた。

・絵本の挿絵を見て、学習した「ことば」（音声言語）を自分から繰り返し伝える姿が見られた。算数における量についての見方・考え方を学ぶことができた。今後の探索活動や学習につなげることで、「いっぱい」「少ない」という量を表す言葉の理解を深め、A児の生活の中で使える「ことば」（音声言語）として身に付き、その見方・考え方を働かせていくことが期待できる。

・A児は学習の中で「おいもがいっぱいほしい」という思いをもつことができた。学びに向かう姿と捉えることができる。図画工作と関連付けたさつまいもの制作の学習にこのA児の思いをつなげることで、A児にとって学習が連續したものとなり、効果的に学習を積み上げていくことができると考える。

〈実践4〉

教師を仲介とした友達とのやりとり

○友達との関わり合いについて

本学級はA児とB児の2名で構成されているが、個別で学習に取り組んできた。そのため2名とも友達と関わり合いながら学習する経験がとても少ない。特に、A児は、B児と学習の場を共有することも「こわい。」と言って拒否することが多い状況であった。

○学び合いの場の設定について

・絵本を活用した学習において、資料1と次に示すように段階的に学び合いの場を設定し、A

児とB児が少しずつ関わり合いを深め、学び合うことができるよう働き掛けた。

- ①かかるきっかけをつくる段階
- ②遊びを共有する段階
- ③遊びの中で「楽しい」を共感する段階
- ④学び合う段階

以下は、単元「絵本で遊ぼう～『さつまのおいも』」における、「④学び合う段階」の教師を仲介とした友達とのやりとりである。

①「いもほり遊び」の順番を決める場面

- ・準備物…数字カード、顔写真カード

ホワイトボード

※A児の病室にて絵本『さつまのおいも』の読み聞かせが終わり、いもほり遊びに学習が展開している状況。

T：『うんしょ、とこしょ』やるよ。
(ホワイトボードに「1」の数字カードを貼って)
「だれが1番？」
A：「はい！」
B：「かっ！」(発声にて返答。「はい。」の表出。)

T：「Aちゃんが1番
がいいのね。」
(写真5のように

顔写真カード提示) **写真5**

A・B：(ホワイトボードに注目する。)
A：(にこやかな表情で頭を揺らす。)
B：(表情が硬くなる。舌を出す。「嫌だ。」の表出。)

T：「Bくんは嫌なんだって。Aちゃん、
どうする？」

(顔写真カードの順番を替えて再提示。)
「1番がBくん、2番Aちゃん。いい？」
B：「かっ！」(にこやかな表情で発声。「いいよ。」の表出。)



A : (舌を出して目を閉じる。「嫌」の表出。)
T : 「Aちゃんは、2番は嫌だよ。1番がいいんだって。」
(A児、B児とも教師を見る。)
T : 「こまったね。どうする？」
「Aちゃん、Bくんにお願いしたらいいんじゃない?『1番、お願い』って。」
A : (B児の顔を見て)「B！お願い！」
B : 「…かっ。」(「分かった」の表出。)

考察

- ・数字カードと顔写真カードを活用することで、言葉の理解を補い、A児、B児とも問われていることが分かってやりとりすることができた。表情や発声、音声言語で自分の考えを教師とのやりとりの中で表出することができた。
- ・A児、B児の思いを言語化し、教師が仲介となって伝えることでお互いの考えを知り、A児とB児が順番を交渉するやりとりにつながった。

②順番で「いもほり遊び」に取り組む場面

T1 (筆者) : 「Aちゃんから『うんしょ、とこしょ』するよ。」
(A児の右手親指と人差し指にさつまいものつるを挟み、教師が手添えする。)
T1 : 「Bくん、Aちゃんおいもいっぱいかな?応援してね。」
B : (にこやかな表情で口を開ける。)
T1 : 「さあ、いくよ。3、2、1、うんしょ、とこしょ。うんしょ、とこしょ。」
A : 「ぬけたー！いっぱい！」
T1 : 「Bくんに見せようね。Bくん、見て。おいもが…」
A : 「いっぱい！」
B : 「かっ！」(にこやかな表情で発声。)
T2 (担当教員) : 「Aちゃん、おいもいっぱい抜けたね。」

A : (B児のにこやかな表情を見る。頭を揺らしてにこやかな表情になる。)
T1 : 「やったあ！おいも、いっぱい！」
(同様にB児もT2と一緒にさつまいもを抜く)
T2 : 「せえの！うんしょ、とこしょ。うんしょ、とこしょ。」
A : (頭を揺らしながらにこやかな表情。B児とT2を見ている。)
T1 : 「Bくん、がんばって！」
A : 「がんばって！」
T2 : (さつまいもが抜けるのに合わせて)
「すっぽおん！」
A : 「ぬけたあ。」
T2 : (抜けたさつまいもをB児の膝の上にのせる。)
A : (その様子を見て)「いっぱい！」
T1 : 「Bくん、おいも、いっぱいだね。」
A : (にこにこと笑い、頭を揺らす。)
T1 : 「Bくん、やったあ！すごいねえ。」
A : (頭を揺らして、にこやかな表情で)
「いっぱい！」

考察

- ・A児はT1を仲介としたやりとりを通して、B児に「いっぱい。」と言葉で伝えることができた。また、A児はB児の表情にも注目して、それにこやかな表情とT2の言葉掛けからB児の思いを受けとめることができた。このように、教師がA児、B児の気持ちを代弁して仲介となることで、友達と思いを伝え合い、共感し合いながら学び合うことができた。
- ・A児は、B児の学習に取り組む様子を見て、既習の「量のイメージ・量を表す言葉」を自ら結び付けて「いっぱい」と言葉で表現し、伝えることができた。A児のこの学びの姿は、習得した算数科:量の概念(「いっぱい」「少ない」)の見方・考え方を働かせて思考・表現する姿であり、学びを深めている姿であると考える。

III 研究の成果と今後の課題

成果

- ・探索活動を通して、興味関心に寄り添い、気付きを言語化するやりとりを重ねることで、児童が生活の中で使える「ことば」を育むことができた。
- ・「ことば」の力が学習の基盤となり、教師とのやりとりを通して、各教科の見方・考え方を働かせて思考・判断・表現し、学びを深めることができた。学習のねらいに迫る姿を見取ることができた。
- ・探索活動及び自立活動と各教科を関連付けた授業実践1～4により、A児の指導目標（1）、（2）を達成することができた。音声言語を用いたコミュニケーションの力の伸びが顕著であった。
- ・学び合いの場面において、教師を仲介としたやりとりを通して友達と関わり合いながら効果的に学びを深めることができた。

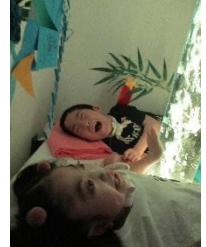
課題

- ・児童の気付きを的確に捉えて、児童のイメージや思いに合った言葉を選び、言語化する難しさを感じることがあった。今後、さらに教員間で児童の学びの姿を共有したり、児童の視線や表情等を丁寧に見取り、言葉掛けたりしていくようにしたい。
- ・今後、より社会性を育んでいく必要がある。病院訪問学級の友達から校内の同学年の友達へと関わり合いを拡げ、学び合いを促進させたいと考える。そのために、校内の授業や学校行事、儀式的行事等にリモートで参加するができるように進めていきたい。校内の友達と同じ課題に取り組む経験、やりとりを通して友達の考えを知る経験等を積み重ねることで、より社会性を育んでいくことができるのではないかと考える。また、必要に応じて、視線入力装置やkubi等のICT活用を試み、学習の中で児童の受信や発信を支援していくことも学びの

深まりにつながると考える。

・資料3に示すように、児童と医療・教育・家庭を「つなぐ」働き掛けを継続する必要がある。児童の成長を確かめ合い、共に喜び合える連携を続けていきたい。さらに、今後は、病棟の療育活動（療育指導室：保育士、児童指導員等による療育活動及び体験活動）と関連付けた学習を計画し、協働的な取り組みを行っていくことも必要と考える。生涯学習の視点から児童の将来の生活を見据えた学びをつくる一つの機会となると考える。

絵本を活用した取り組みについて（自立活動 単元「えほんであそぼう」）

時期	絵本名	A児の学習の様子
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・『はらぺこあおむし』 ・『ごあいさつあそび』 ・『くまさん、くまさん、なにみてるの？』 ・『りんごがドスーン！』 ・『ふわふわあひる』 ・『いろ』 ・『どんないろがすき？』 	  <p>◀『いろ』『どんないろがすき？』：発信は歌であることが多いため、歌詞絵本を活用し、歌詞のイメージを共有しながら、知っている言葉の意味理解を深めることができるようにした。絵の具遊びの活動に学習を展開させた。 「あか」「あお」等の色の弁別、名称との一致ができた。</p>
5月 6月	<ul style="list-style-type: none"> ・『おおきなかぶ』 ・『あめふりくまのこ』 ・『ぞうくんのさんぽ』 ・『あめあめふれふれ ねずみくん』 	  <p>▶『おおきなかぶ』：繰り返しの内容が分かり、あらすじを捉えることができた。「うんとこしょ、どっこいしょ。」絵本の言葉を言って楽しむ。大小の学習に発展。</p> <p>▶『あめふりくまのこ』：歌の歌詞を覚えたい様子で繰り返し読み聞かせを要求する。5番までの歌詞を覚えて歌うことができるようになった。</p> <p>▶『あめあめふれふれ ねずみくん』：傘を見たことがないA児。傘の体験。繰り返し傘を開くことを要求する。教師を模倣して「かさ」と言うことができた。</p> 
7月 8月	<ul style="list-style-type: none"> ・『たなばたさま』 ・『にじいろのさかな』 ・『ねこののはなびや』 ・『ポコポコ アイスクリーム』 ・『アイスクリームのうた』（自作） ・『おばけなんてないさ』 ・『なつのととずれ』 	 <p>◀『たなばたさま』：読み聞かせに合わせて笹飾りの制作にも取り組む。制作の中で形の弁別も学習。病棟のスヌーズレン室を利用して七夕会実施。<u>物語のように「会えたね。」と言葉掛けて友達と場を共有する</u>ことから関わり合う経験を積み重ねる。</p>  <p>◀『おばけなんてないさ』：友達との遊びの共有をねらった「おばけごっこ」の取組。おばけを制作し「おばけだぞ、わ～！」友達がA児の部屋に来たことに驚く。しかし、翌日、自分から「わ～！」と伝えて、おばけの制作、「おばけごっこ」に教師と一緒に取り組むことができた。</p>  <p>友達と遊びを共有し、楽しむ経験につながった。</p>

9月	<ul style="list-style-type: none"> ・『とんでもったバナナ』(自作) ・『ほんたのじどうはんぱいき』 ・『お月さまってどんなあじ』 ・『もりのおふろ』 	 <p>◀『もりのおふろ』: 友達と一緒に絵本の読み聞かせを楽しむことができるようになってきた。「背中を洗ってもらえませんか?」「いいですよ~」「ごしごしシュッシュ」との絵本の言葉を使ったやりとり遊びを楽しむことができた。</p>
10月 11月	<p style="text-align: center;">【学び合いの段階③】 遊びの中で「楽しい」を共感する段階</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『ノンタン あわくくくくふふふう』 ・『さつまのおいも』 ・『あきぞらさんぽ』 ・『てぶくろ』 <p style="text-align: center;">【学び合いの段階④】 学び合う段階</p>	  <p>▲『あきぞらさんぽ』: 落ち葉の「かさかさかさ…」という音を体験しながら絵本の言葉のイメージを共有できた。「すいー」「くるりん」など動きを伴う言葉にも興味をもつようになった。車椅子を動かすことで体験を通して言葉に触れることができた。</p>
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・『100人のサンタクロース』 ・『ノンタン サンタクロースだよ』 ・『ノンタン たんじょうび』 ・『おたんじょうケーキをつくりましょう』 ・『ぐりとぐらのおきやくさま』 	  <p>◀『ノンタンたんじょうび』『おたんじょうケーキをつくりましょう』: A児が知っている誕生日の歌やこれらの絵本から「誕生日はお母さんから生まれた日」ということに触れた。「毎年1歳が大きくなる」だから「おめでとう!」ということを知らせた。絵本と同様に友達に内緒でプレゼント(ケーキのカード)を制作。病棟誕生会では自分で「おめでとう!」と言って、友達に渡すことができた。</p>
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・『いろいろおてがみ』 ・『14ひきのもちつき』 ・『もちつきぺったん』 ・『十二支のはじまり』 ・『十二支のかぞえうた』 	 <p>◀『十二支のはじまり』: 歌『十二支の歌』と関連付けながら、読み聞かせを行った。さらに、身近な看護師に「干支、教えてください」と教師と一緒に話し掛けることができるようになり、教材を介して関わり合いを楽しむ姿につながった。</p>
2月 3月	<ul style="list-style-type: none"> ・『しろくまのパンツ』 ・『おにのパンツ』 ・『ねずみのすもう』 ・『きょうはたんじょうび』 ・『ノンタン ボールまでまで』 	  <p>◀『ノンタン ボールまでまで』: 「いっぱいさがし」の探索活動の中でボールプールを見つけた。読み聞かせを楽しみながら、実際にたくさんのボールに身体で触れて遊ぶ経験を重ねた。「ボール」「いっぱい」とボールプールで遊びたいことを教師に伝えることができるようになった。</p>

自立活動と各教科を関連付けた単元構想について

〈A児の短期目標〉

- ・体験的な活動を通して、楽しさやうれしさを感じ、その気持ちを表現することができる。
- ・教師の言葉を繰り返して言ったり、あいさつや好きな物の名前を言ったりして言語のやりとりができる。
- ・歌いたい曲や読んでもらいたい本を視線や表情で教師に伝えることができる。



単元「えほんであそぼう～絵本『さつまのおいも』～」(11月)

【単元の目標】

- ・絵本の読み聞かせを通して、絵本の中の言葉を模倣して言ったり、季節の歌に親しんだりすることができる。
- ・いもほり遊びや制作を通して、教師や友達と関わり合いながら大きさや量の違いに気付き、言葉で表現することができる。
- ・絵本の読み聞かせやいもほり遊びをすることが分かって、教師や友達と関わり合いながら遊ぼうとする。

【単元構成】各教科との関連付け

ことば	かず
<ul style="list-style-type: none"> ・絵本の言葉を楽しむ →国語 ・言葉と事物を一致させる →国語 ・「大きい・小さい」「多い（いっぱい）・少ない」を表現する →国語・算数 ・自分の考えをもつ・自分の思いを伝える →国語・生活 	<ul style="list-style-type: none"> ・大きさ・量の違いに気付く →算数 ・形が同じものを選ぶ →算数 ・順番の理解 →算数・生活
表現	動き
<ul style="list-style-type: none"> ・歌『やきいもグーチーパー』『たきび』 →音楽 ・おいもの制作（絵の具での色塗り） →图画工作 	<ul style="list-style-type: none"> ・車椅子への移乗（離床） ・車椅子での動きの経験（前後の動き） ・右腕（右肘から先）の動き (教師の手添えにて上下の動き) →体育
• 教師や友達と関わり合いながら 一緒に遊ぶ →生活	

【A児の学びの姿】

ことば

- ・絵本の読み聞かせでは、大まかにあらすじを捉えて、「おいも！」「うんしょ、とこしょ！」「すっぽーん！」など絵本の中の言葉を自分から言って楽しむことができた。
- ・実際にさつまいもを見たり、触れたりする体験的な活動を通して、「おいも」という言葉と事物の一致を図ることができた。
- ・制作の場面でのやりとりの中で、「おいも作るよ。大きい、小さいどっち？」と身振りを交えて問い合わせると、視線と合わせて「おおきい！」と大きなおいもを作りたいという自分の思いを伝えることができた。



かず

- ・いもほり遊びを通して、絵本の挿絵（「ほうねんまんさくだ」の場面）と自分が抜いたおいもの数を見比べて量の違いに気付くことができた。
- ・その気付きに対して、教師が「いっぱい」「少ない」と名付けすると、「いっぱい」を意識し、模倣することができた。
- ・いもほり遊びで抜けるおいもの数が増えると、自分で見て気付き「いっぱい！」と言葉で伝えることができた。友達が抜いた様子を見ても同様に伝えることができた。
- ・いもほり遊びの順番を決める場面では、数字カードと顔写真カードで活用し問われていることの理解を補うことで「だれが1番？」の問い合わせに応じることができた。B児も1番にやりたいことが分かるとお互いに譲らず、数字カードと顔写真カードを使ってやりとりを重ねることになった。



表現

- ・「おちばをあつめて、たきびして…やきいもたいかい」という絵本のストーリーに合わせた見立て遊びを楽しみながら季節の歌に触れることができた。歌『たきび』では頭を揺らしてリズムを感じることができた。『やきいもグーチーパー』は歌詞の一部を覚えて歌うことができた。
- ・児童とのやりとりの中で「おいも」「いっぱい！」と作りたい物、作りたい思いを伝えることができ、いもほり遊びで使うおいもを制作することになった。
- ・教師の「何色？」の問い合わせに対して「あか」「あお」と絵の具を見て答えることができた。また、絵の具を混色する様子を「まぜまぜ～！」と言いながら見て楽しむことができた。



動き

・いもほり遊びの中で、教師と一緒に車椅子を後ろに移動させながら引っ張つて抜く遊びに取り組むことができた。教師が手添えすることで、紐に触れて引く動きの感覚を体験することができるようにした。「うんしょ、とこしょ！」と絵本の言葉を言いながら引っ張る動きを楽しむ様子が見られた。



【単元後のA児の姿】

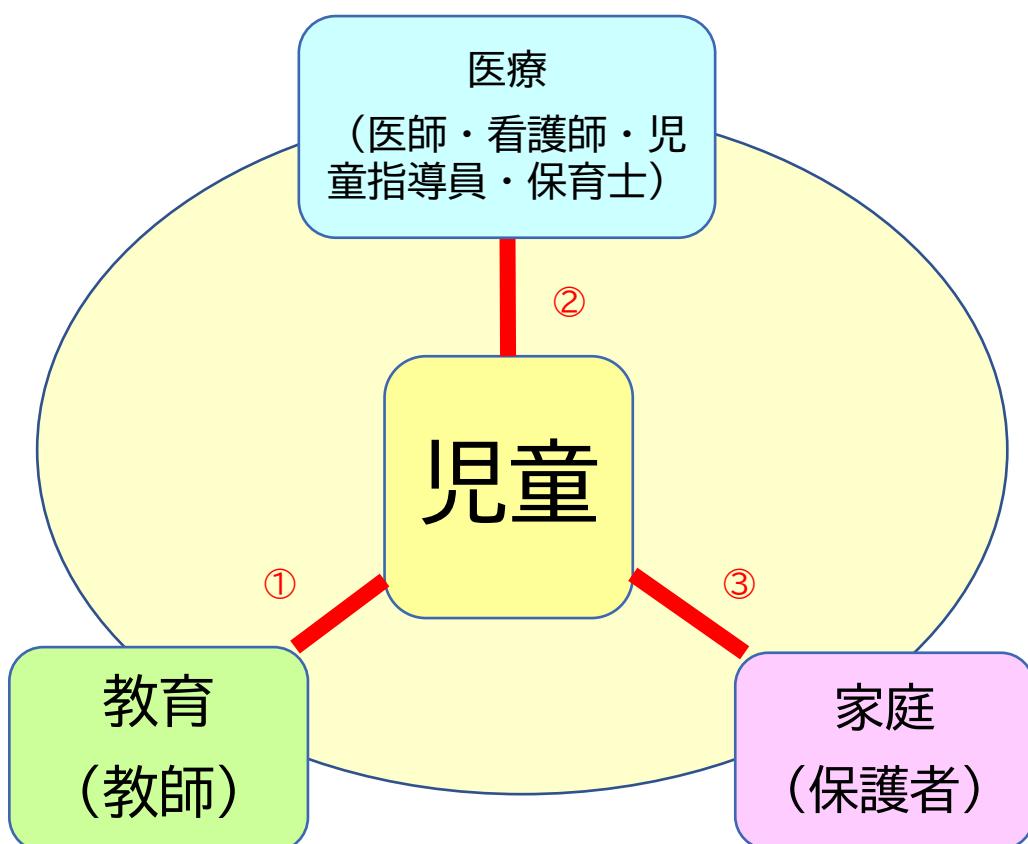
- ・「いっぱい」への興味が高まり、「いっぱい」を探す探索活動が始まった。
- ・タオルや壁面のハートの飾り、雛人形、梅の花などA児が見つけた「いっぱい」は iPadで画像として残し、学習の振り返りの場面で活用した。(画像を1枚ずつ提示し、教師が「○○が…」と言葉掛けて、A児が「いっぱい！」と応えるやりとりを楽しむ。)
- ・A児が病棟内で「いっぱいさがし」をすることで、B児もまた「いっぱい」という言葉を意識し、興味を示すようになった。次第に一緒に探索活動を行うようになり、教師が「『いっぱい』はどこにあるかな？」と問い合わせると、A児は言葉で、B児は視線で壁面のハートの飾りを捉えるなど、学び合いの場にもなった。
- ・「いっぱいさがし」の中で、「少ない」状況に出会うことも多くあった。A児はその違いに気付いて、「いっぱい」とは言わず、じっと見つめるだけの様子が見られた。その気付きに名付けするかわりとして「『いっぱい』じゃないね。少ない。」と言葉掛けるようにした。そのようなやりとりを重ねるうちに「いっぱい」と「すくない」の状況を自分なりに区別して捉え、言葉を使い分ける姿が見られるようになった。
- ・探索活動や学習における関わり合いの中で、教師が「たっぷり」や「ぜんぶ」、「たくさん」といった言葉を使うと、A児はそれを聞き、自分から「いっぱい」と言う場面が見られるようになった。「いっぱい」と似た意味の言葉として認識し、言葉を置き換えたのではないかと考える。



児童を中心とした医療・教育・家庭との連携 「3つの『つなぐ』取り組み」

【②児童と医療をつなぐ】

- 日々の授業：看護師や児童指導員と学習の様子や学習した「ことば」について共有。
- 病棟連絡会の実施（隔月 第1火曜日）：病棟看護師長、主任保育士、児童指導員と学級通信を活用して学習の様子、「ことば」の育ち等について情報共有。
- 医教連絡会の実施（年1回 3月）：病院長、担当医、看護師長、主任保育士、児童指導員、学校（校長、担任、担当）で1年間の療育と学習について情報交換。



【①児童と教師（担任・担当2名）をつなぐ】

- 授業を振り返り、児童の学習の様子を話す習慣付け：引継ぎシートの活用（自然に話し合いができるようになるまで）
- 児童の「ことば」に視点をおいた情報共有→「ことば」を共有して使う、授業の改善：移動中を利用して話し合い
- ケース会議（各学期1回）：学期ごとに目指す児童の姿を共有して、各月のテーマを単元化。

【③児童と家庭をつなぐ】

- 学級通信：学習のねらい、学びの姿、「ことば」の育ちを伝える。写真を活用し、児童とのやりとりが見えるように伝える。
- 通知表：通知表の内容と合わせた学級通信を発行することで、書かれてあることをイメージできるようにした。
- 配布物の郵送や電話：最近の児童の様子（学習や遊びの様子）を伝える機会としても活用。

参考文献・参考資料

○文部科学省 (2018)

「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編（幼稚部・小学部・中学部）」開隆堂

○文部科学省 (2018)

「特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（小学部・中学部）」開隆堂

○文部科学省 (2018)

「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）」開隆堂

○福島県教育委員会 「福島県立特別支援学校訪問教育実施要領」

○福島県養護教育振興会 編 (2002) 「福島県特殊教育史 第二巻」

審査の観点及び審査総評

【審査の観点】

- (1) 研究の意図が明確で、主題が適切なものであるか。
- (2) 研究の対象が明確であるか。
- (3) 研究の計画及び内容が適切であるか。
- (4) 論旨が一貫しており、説得力があるか。
- (5) 必要な資料が精選され、整えられているか。
- (6) 結論の導き方は適切であるか。
- (7) 今後の実践に生かす手立てを講じているか。

【総評】

コロナ禍においても、熱意を持って、真摯に子どもと向き合い、子ども、学校、地域のために取り組んでいる研究が多く見られた。様々な学校種において、多様なアプローチから研究が進められていることは、今年度の特徴であると言える。カリキュラム・マネジメント、単元全体を通したものなどダイナミックな研究も多く見られた。また、継続研究も何点か見られたが、年数を重ねることで研究が整理されるだけでなく、教職員が共通理解を深め、それがより深い研究へと結び付いていることがよく分かるものであった。一方、研究内容が広がり過ぎていたり、実践したことを全て掲載したりするなど、研究主題や副主題に沿って整理していくことが必要と考えられる研究も見られた。研究主題については、子どもの実態に沿って、できるだけ焦点化し、具体化したものでありたい。さらに、研究の中で使用する言葉や概念についても、正しく理解し、定義付けていくことも重要である。どんな実践を行い、それにどんな成果や課題があったかということは、子どもの具体的な姿や言葉等を根拠とすることで明らかになる。今後はそれらも意識した研究をしていただきたい。

令和3年度 福島県教職員研究論文 応募状況

1 1次審査通過論文数 32点 (総論文数 37点)

2 内 訳

(1) 教育事務所別(1次審査通過論文数)

県北	県中	県南	会津	南会津	相双	いわき	計
6	6	5	5	2	3	5	32

(2) 学校種別(1次審査通過論文数)

幼稚園	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校	自然の家	計
0	23	4	2	3	0	32

(3) 各教科、領域等及び教育事務所別内訳

△	幼稚園	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校	自然の家	計	県北	県中	県南	会津	南会津	相双	いわき	計
学校経営					1		1	1							1
学年経営							0								0
学級経営			1				1				1				1
学習指導一般		9	1				10	3	2	2		2	1		10
国語							0								0
社会地理歴史			1	1			2				2				2
算数・数学		6					6		3	1			1	1	6
理科							0								0
生活・総合							0								0
音楽		1					1	1							1
図画工作美術		1					1	1							1
技術・家庭							0								0
体育保健体育							0								0
外国語活動英語							0								0
道徳							0								0
特別活動			1				1				1				1
教育課程		2					2			1				1	2
生徒指導				1			1							1	1
特別支援教育					2		2							2	2
学校保健		3					3			1	1		1		3
食育・学校給食							0								0
いわき地教育							0								0
幼稚園教育							0								0
学校事務		1					1		1						1
合計	0	23	4	2	3	0	32	6	6	5	5	2	3	5	32

令和3年度 福島県教職員研究論文 応募者一覧

領域等	個人 団体	学校名・グループ名	氏名・代表者名	研究主題名
学校経営	グループ	福島県立大笛生支援学校 研修部	富村 祥子	OJL(On the Job Learning)の理念を取り入れた校内研究推進の取組 ～校内における研修推進=人材育成となるチームづくりを目指して～
学級経営	個人	会津若松市立第四中学校	遠藤 番子	生徒の学力向上につながる学級経営の在り方 ～日々の小さな取組が大きな変化になることを目指して～
学習指導 一般	団体	伊達市立伊達東小学校	緑上 隆	ひろく、深く学び、共に高め合う児童の育成 ～教科等横断的な視点に立った授業づくり～
	団体	伊達市立保原小学校	堀部 誠	共に学び 共に喜び 共に高め合う 子どもの育成 ～自ら動き出す課題を設定し、仲間と共に自分の考えを広げ深める授業づくり～
	団体	伊達市立伊達中学校	岡崎 秀一	「思考力・判断力・表現力を高める学習指導のあり方」 ～ふくしまの「授業スタンダード」を活用して～
	個人	二本松市立新殿小学校	齋藤 佑亮	主体的に学びに向かい、思いや考えを表現できる児童の育成 ～国語科と算数科における「見方・考え方」を働かせる指導の工夫～
	団体	本宮市立白岩小学校	鈴木 茂	安全・安心な社会づくりに貢献できるこころ豊かな子どもの育成（2年次） ～教科等横断的な視点による資質・能力の育成と活用を通して～
	団体	田村市立都路小学校	安瀬 一正	小規模校のよさを生かし、問い合わせを協働で解決する喜びに満ちた授業（2年次） ～学びをつなぐ単元構想図～
	団体	田村市立船引南小学校	平野 美和	学び合うことの楽しさを実感し、学習に主体的にかかわる子どもの育成（2年次） ～ICT機器を活用した「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指して～
	団体	塙町立塙小学校	藤田 篤	自分の考えをもち、ともにかかわり合い、高め合う児童の育成 ～リーディングスキル（RS）の視点を取り入れた授業の工夫～
	団体	鮫川村立鮫川小学校	齋藤 雅彦	自ら考え主体的に行動する力の育成 ～キャリア教育の視点を生かした道徳科授業の実践を通して～
	団体	只見町立只見小学校	伊藤 知雄	ふるさと只見、そして日本の未来を拓くたくましい子どもの育成 ～海を通して、地域と自分と未来を見つめ、考え、行動する～
社会 地理歴史	団体	只見町立朝日小学校	米畑 健一	つながりの中で育む「只見愛」 ～未来へ向かって行動できる子供の育成～海につながるESDの実践
	個人	相馬市立中村第一中学校	長谷川 徹	リーディングスキルの向上による、学習指導要領の目標の達成をめざした学習指導の改善 ～「主体的に学習に取り組む態度」の育成のために～
	国語	郡山市立芳山小学校	佐藤 幸子	文学作品の解釈を協働的に想像する授業
算数・数学	個人	猪苗代町立猪苗代中学校	鈴木 淳	つながりある学びを基盤として未来へ生きてはたらく力を身につける生徒の育成 ～社会科を通して学力向上と生徒指導・進路指導の充実をめざして～
	個人	福島県立猪苗代高等学校	今川 吉晃	生徒の学びを深化させる教育実践の工夫 ～諸資料の活用に重点を置いて～
算数・数学	個人	郡山市立御代田小学校	鈴木 元気	算数教育において主体的・対話的に活動する問題解決学習の在り方に関する研究 ～自力解決と解決の練り上げを分岐させた問題解決のプロセスに注目して～
	個人	田村市立大越小学校	佐藤 翔英	子どもたちの問題発見・解決する姿の実現 ～数学的な見方・考え方を意識化するための授業デザインを通して～
	団体	田村市立船引小学校	安生 昌弘	自ら進んで考え、学び合う児童の育成（2年次） ～豊かなつながりのある授業を通して～

	団体	田村市立瀬川小学校	湯淺 伸二朗	伝え合い高め合う子どもの育成 ～必要感・期待感・達成感がある少人数教育の実践を通して～(1年次)
	個人	小野町立小野中学校	箭内 広光	数学科における「深い学び」の実現に向けて ～構造的板書と発問を通して～
算数・数学	個人	白河市立みさか小学校	渡部 一嵩	算数科における表現力の育成 ～『協働的な学び』だからこそできる！活きた表現力の育成～
	個人	相馬市立桜丘小学校	原 悠太	「単位」の統合的な理解を目指して ～符号としての単位から「一つ分」としての単位へ～
	個人	いわき市立小川小学校	武田 涼子	数学的な見方・考え方を豊かで確かなものにするための授業改善 ～4学年の実践を通して～
音楽	個人	福島市立平野小学校	稻毛 光司	思考力・判断力を育む音楽科の授業改善 ～子どもの音楽観を広げる音楽活動を通して～
図画工作 美術	個人	川俣町立福田小学校	八巻 千咲	自分から作品と向き合って鑑賞する力を育む図画工作科の授業をめざして ～自分の見方・感じ方で、思いを伝え合う活動を通して～
特別活動	団体	喜多方市立第一中学校	板橋 和典	生命の大切さを尊重して行動できる生徒の育成 ～地域との連携を図った防災教育の実践～
教育課程	団体	棚倉町立棚倉小学校	鈴木 雅人	なりたい自分になるために学び続ける児童の育成 ～将来につなぐ資質・能力を育む教育課程を通して～
	個人	いわき市立高坂小学校	田島 裕司	CRMを個別最適な学びに結び付け、一人一人が輝く「高坂SDGsカリキュラム」の在り方 ～地域連携担当教職員によるコロナ禍ならではのカリキュラム・マネジメント～
生徒指導	個人	福島県立遠野高等学校	渡部 久美子	つながる・つなげる生徒指導・支援に関する実践的研究 ～グループソーシャルスキルトレーニング(T-palクラブ)と医療・福祉機関との連携・協働を通して～
特別支援 教育	個人	福島県立平支援学校	鈴木 のぞみ	訪問教育における学びの充実をめざして ～病院訪問学級における自立活動と各教科を関連付けた授業実践～
	個人	福島県立平支援学校	泉 大介	自立と社会参加を目指して主体的に生活する児童生徒の育成 ～寄宿舎生活における「できること」の経験を生かした指導実践を通して～
学校保健	個人	中島村立滑津小学校	黒羽 葵	自己マネジメント力を育み、健康課題を解決する児童の育成 ～学校現場における体組成計の活用と養護教諭の役割をいかして～
	個人	北塩原村立裏磐梯小学校	小板橋 綾子	GIGAスクール構想推進下のヘルスプロモーション実現を目指して ～メディアコントロール能力を育成する保健教育の実践～
	個人	相馬市立日立木小学校	渡邊 舞香	主体的に健康の保持増進を図る児童の育成 ～自分手帳と自己管理実践カード等を活用した肥満指導を通して～
学校事務	個人	郡山市立富田東小学校	泉田 洋介	県下一の大規模小学校における事務職員の組織開発 ～複数配置校における事務職員協働組織「事務部」～

おわりに

『福島県教職員特選研究論文集』は、県内の教職員の優れた教育実践を広く普及するために発刊しており、今回が第28集の発刊となりました。

今年度は小学校、中学校、高等学校、特別支援学校から37点の応募がありました。改めて、先生方の教育に対する熱意と意欲に敬意を表しているところであります。

本年度の応募の内訳を見ますと、学校全体（団体）が14点、個人が22点、グループが1点となっており、新型コロナウイルス感染症による影響下にありながらも、昨年度と同程度の応募数となっています。

応募いただきましたどの論文も児童生徒や地域の実態、現代的な教育課題を踏まえた実践的な研究がなされ、児童生徒や学校、さらには地域全体のよりよい成長、発展を目指した、具体的な手立てが随所に見られました。

福島県教育委員会が策定した「頑張る学校応援プラン」では、本県教育の課題として、教員の学び合いや研修が必ずしも実質化されていないことを挙げ、この課題解決に向け、「教員の指導力、学校のチーム力の最大化」を教育施策の一つに掲げ取組を進めてまいりました。応募いただきました団体・グループ・個人の皆様の真摯かつ意欲的な姿勢は、まさに福島県が求めている「学び続ける教師像」と重なるものだと思っております。

この『福島県教職員特選研究論文集』は、県のホームページにも掲載し、研究の成果が広く各学校や教育機関等において活用されるよう広報にも努めてまいります。

最後になりますが、教職員の皆様お一人お一人が、今後も教育に関わる専門家として、その指導力に磨きをかけていただくことをお願いするとともに、児童生徒の夢や希望の実現に向け、次年度も本研究論文に幅広い領域・校種から積極的に御応募くださいますようお願い申し上げます。

令和3年度 福島県教職員特選研究論文集

令和4年2月発行
編集・発行 福島県教育委員会

アーティスト
実現する
人々